宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集

Takenouti

竹ノ内遺跡

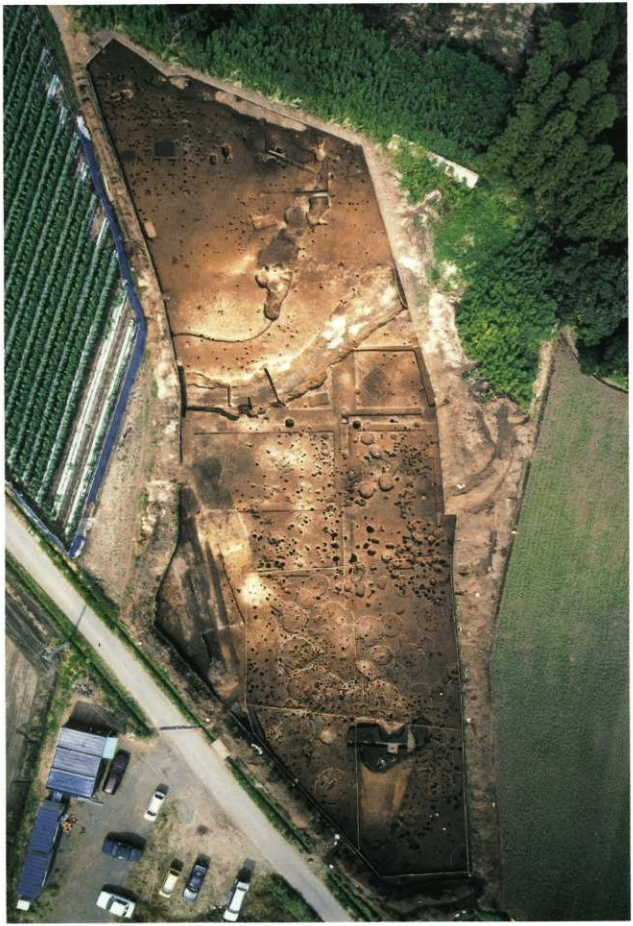
一般県道清武インター線道路改築事業に伴う発掘調査報告書

２０００年
宮崎県埋蔵文化財センター

竹ノ内遺跡正誤表

ページ	誤	正
P225	5行目　後期の石鏃は、144点ほど出土している。石器総数に占める割合は8.2%である。	後期の石鏃は、146点ほど出土している。石器総数に占める割合は5%である。
〃	23行目　竹ノ内遺跡のスクレイパーは、総数406点出土している。	竹ノ内遺跡のスクレイパーは、総数419点出土している。
〃	29行目　石錐は、全部で15点ほど出土している。	石錐は、全部で18点ほど出土している。
〃	35行目　打製石斧は、全部で27点ほど出土しているが	打製石斧は、全部で37点ほど出土しているが
P226	5行目　磨製石斧は、112点ほど出土しているが	磨製石斧は、246点ほど出土しているが
〃	19行目　磨石は、全部で251点ほど検出している。	磨石は、全部で240点ほど出土している。
〃	24行目　石皿は97点検出している。	石皿は、166点出土している。
P321	2行目　石鏃が146点で(約0,05%)にあたる。	石鏃が146点で約5%にあたる。
〃	3行目　石匙が27点で(約0.01%)である。スクレイパーは、419点で(約0.15%)	石匙が27点で約1%である。スクレイパーは、419点で約15%
〃	4行目　石錐は、18点で(約0.01%)・打製石斧が37点で(約0.01%)・磨製石斧は、246点で(約0.09%)・石錘は、132点で(約0.05%)である。	石錐は、18点で約1%、打製石斧が37点で約1%、磨製石斧は、246点で約9%、石錘は、132点で約5%である。
〃	5行目　磨石が240点で(約0.08%)・凹石が55点で(約0.08%)・石皿が166点で(約0.06%)である。	磨石が240点で約8%、凹石が55点で約2%、石皿が166点で約6%である。
〃	6行目　台石が11点で(約0.003%)・敲石が53点で(約0.02%)あたる。	台石が11点で約0.3%、敲石が53点で約2%にあたる。
〃	7行目　砥石が59点で(約0.02%)である。その他の剥片が1278点で(約0.44%)である。	砥石が59点で約2%である。その他の剥片が1278点で約44%である。
〃	8行目　この組成比率から製品としては、スクレイパーが製品としては磨石・石皿・石錘の順である。	この組成比率から製品としては、スクレイパー・磨石・石皿・石錘の順に数が多い。
〃	9行目　石錘の中で切目石錘が55個で約0.41%になる。	石錘の中で切目石錘が55個で石錘全体の約41%を占める。

なお、第V章の縄文後期土器編年の略図等については、前迫亮一氏「異系統土器文化の接点」『南九州縄文通信No６』(南九州縄文研究会　1992)の記述を参考に作成した。

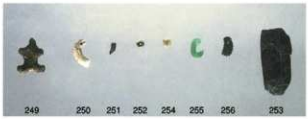


竹ノ内遺跡（B－1区）全景

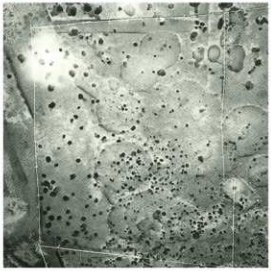
岩偶（表）

岩偶（裏）

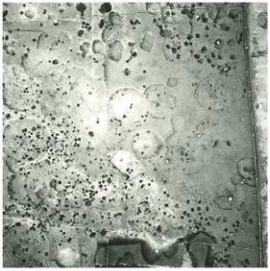
土偶



石偶（他）



竪穴住居跡（北西部）



竪穴住居跡（北東部）

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集

Takenouti

竹ノ内遺跡

一般県道清武インター線道路改築事業に伴う発掘調査報告書

2000
宮崎県埋蔵文化財センター

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深いご理解をいただき厚くお礼申し上げます。このたび宮崎県教育委員会では、一般県道清武インター線道路改築事業に伴い、竹ノ内遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

今回の調査では、旧石器時代から近世にかけての遺構・遺物が検出されました。特に縄文時代後期の生活の痕跡が数多く確認され、当時の人々の暮らしを垣間見ることができたことは、調査の大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、ならびに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成12年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長　田中　守

例　言

1　本書は、一般県道清武インター道路改築事業に伴い、宮崎県教育委員会が行った竹ノ内遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査は、2次に分けて実施し、それぞれ次の期間で行った。

　　平成8年度（第1次調査）平成8年5月17日～平成9年3月31日

　　平成9年度（第2次調査）平成9年5月12日～平成9年10月11日

4　現地での実測・写真撮影等の記録は、平成8年度は高山富雄・山田洋一郎・白岩　修（木城町教委）木嶋嵩晴（大阪府貝塚市教委）・山路康弘・稲岡洋道(宮崎市教委)、平成9年度は高山富雄・山田洋一郎・代田博文（南郷町教委）が行った。

5　空中写真撮影は（株）スカイサーベイに、テフラ分析・年代測定は（株）古環境研究所に委託した。

6　整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレース・写真撮影は、高山富雄と山田洋一郎が整理補助員の協力を得て行った。

7　本書で使用した位置図は国土地理院発行の5万分の1図を基に作成し、調査範囲図は宮崎県土木課作成の4千分の1図を基に作成した。

8　土層断面及び土器の色調は『新版標準土色帖』に拠った。

9　本書で使用した方位は磁北（M．N．）及び座標北（G．N．）である。座標は国土座標第Ⅱ系に拠る。レベルは海抜絶対高である。

10　本書で使用した遺構略号は次の通りである。

　ＳＡ……竪穴住居跡　　ＳＢ……掘立柱建物跡　　ＳＣ……土坑

　ＳＥ……溝状遺構　　ＳＩ……集石遺構　　ＳＺ……竪穴状遺構

11　本書の執筆及び編集は高山富雄・山田洋一郎が行った。

12　出土遺物・その他諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
第Ⅱ章　調査の概要 …… 2
　第１節　遺跡の位置と（歴史的）環境 …… 2
　第２節　調査の経過 …… 5
　第３節　遺跡の基本層序 …… 7
第Ⅲ章　調査の記録 …… 11
　第１節　旧石器時代の遺物 …… 11
　第２節　縄文時代早期の遺構と遺物 …… 17
　１　遺構
（１）集石遺構 …… 17
　２　遺物
　（１）土器 …… 29
　（２）石器 …… 33
　第３節　縄文時代後期の遺構と遺物 …… 36
　１　遺構
　（１）竪穴住居跡 …… 36
　（２）土坑 …… 87
　（３）竪穴状遺構 …… 120
　（４）その他の遺物 …… 125
　２　遺物
　（１）土器 …… 127
　（２）土器片錘 …… 182
　（３）土器片加工円盤 …… 182
　（４）石器 …… 225
　第４節　弥生時代の遺物 …… 293
　第５節　古墳時代の遺構と遺物 …… 295
　第６節　古代の遺物 …… 296
　第７節　中・近世の遺構と遺物 …… 298
　１　中世の遺構と遺物 …… 298
　２　近世の遺構と遺物 …… 304
第Ⅳ章　自然科学分析調査の結果 …… 309
第Ⅴ章　まとめ …… 317

挿図目次

第1図　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 3
第2図　発掘調査範囲図 …… 4
第3図　調査区設定図 …… 6
第4図　基本土層図 …… 7
第5図　A区土層断面図 …… 8
第6図　B－Ⅰ・Ⅲ区土層断面図 …… 9
第7図　B－Ⅳ区土層断面図 …… 10
第8図　旧石器実測図（1） …… 12
第9図　旧石器実測図（2） …… 13
第10図　旧石器実測図（3） …… 14
第11図　旧石器実測図（4） …… 15
第12図　旧石器遺物分布図 …… 16
第13図　集石遺構分布図 …… 20
第14図　集石遺構実測図（1） …… 22
第15図　集石遺構実測図（2） …… 23
第16図　集石遺構実測図（3） …… 24
第17図　集石遺構実測図（4） …… 25
第18図　集石遺構実測図（5） …… 26
第19図　集石遺構実測図（6） …… 27
第20図　集石遺構実測図（7） …… 28
第21図　縄文早期土器実測図（1） …… 29
第22図　縄文早期土器実側図（2） …… 30
第23図　縄文早期土器実測図（3） …… 31
第24図　縄文早期石器分布図 …… 34
第25図　縄文早期石器実測図 …… 35
第26図　遺構分布図（A区） …… 37～38
第27図　遺構分布図（B区） …… 39～40
第28図　竪穴住居跡実測図（1） …… 41
第29図　竪穴住居跡実測図（2） …… 42
第30図　縄文土器実測図（1） …… 43
第31図　縄文土器実測図（2） …… 44
第32図　竪穴住居跡実測図（3） …… 45
第33図　竪穴住居跡実測図（4） …… 46
第34図　竪穴住居跡実測図（5） …… 47
第35図　竪穴住居跡実測図（6） …… 48
第36図　竪穴住居跡実測図（7） …… 49
第37図　竪穴住居跡実測図（8） …… 50
第38図　縄文土器実測図　（3） …… 51
第39図　縄文土器実測図　（4） …… 52
第40図　竪穴住居跡実測図（9） …… 53

第41図　竪穴住居跡実測図（10）…… 54
第42図　縄文土器実測図（5）…… 55
第43図　縄文土器実測図（6）…… 56
第44図　竪穴住居跡実測図（11）…… 57
第45図　竪穴住居跡実測図（12）…… 58
第46図　縄文土器実測図（7）…… 59
第47図　縄文土器実測図（8）…… 60
第48図　竪穴住居跡実測図（13）…… 61
第49図　竪穴住居跡実測図（14）…… 62
第50図　竪穴住居跡実測図（15）…… 63
第51図　竪穴住居跡実測図（16）…… 64
第52図　縄文土器実測図（9）…… 65
第53図　縄文土器実測図（10）…… 66
第54図　竪穴住居跡実測図（17）…… 67
第55図　竪穴住居跡実測図（18）…… 68
第56図　縄文土器実測図（11）…… 69
第57図　縄文土器実測図（12）…… 70
第58図　竪穴住居跡実測図（19）…… 71
第59図　竪穴住居跡実測図（20）…… 72
第60図　縄文土器実測図（13）…… 73
第61図　縄文土器実測図（14）…… 74
第62図　竪穴住居跡実測図（21）…… 75
第63図　竪穴住居跡実測図（22）…… 76
第64図　竪穴住居跡実測図（23）…… 77
第65図　竪穴住居跡実測図（24）…… 78
第66図　縄文土器実測図（15）…… 81
第67図　縄文土器実測図（16）…… 82
第68図　縄文土器実測図（17）…… 85
第69図　土坑実測図（1）…… 89
第70図　土坑実測図（2）…… 90
第71図　土坑実測図（3）…… 91
第72図　土坑実測図（4）…… 92
第73図　土坑実測図（5）…… 93
第74図　土坑実測図（6）…… 94
第75図　土坑実測図（7）…… 95
第76図　土坑実測図（8）…… 96
第77図　土坑実測図（9）…… 97
第78図　土坑実測図（10）…… 98
第79図　土坑実測図（11）…… 99
第80図　土坑実測図（12）…… 100
第81図　縄文土器実測図（18）…… 104
第82図　縄文土器実測図（19）…… 105

第83図　縄文土器実測図（20）…… 106
第84図　縄文土器実測図（21）…… 107
第85図　縄文土器実測図（22）…… 108
第86図　縄文土器実測図（23）…… 109
第87図　縄文土器実測図（24）…… 110
第88図　縄文土器実測図（25）…… 111
第89図　縄文土器実測図（26）…… 112
第90図　縄文土器実測図（27）…… 113
第91図　縄文土器実測図（28）…… 114
第92図　縄文土器実測図（29）…… 115
第93図　縄文土器実測図（30）…… 116
第94図　縄文土器実測図（31）…… 117
第95図　縄文土器実測図（32）…… 118
第96図　縄文土器実測図（33）…… 119
第97図　縄文土器実測図（34）…… 120
第98図　竪穴状遺構実測図（1）…… 121
第99図　竪穴状遺構実測図（2）…… 122
第100図　竪穴状遺構実測図（3）…… 123
第101図　竪穴状遺構実測図（4）…… 124
第102図　竪穴状遺構実測図（5）…… 125
第103図　縄文土器実測図（35）…… 126
第104図　縄文時代後期土器分布図（A区）…… 129～130
第105図　縄文時代後期土器分布図（B区）…… 131～132
第106図　縄文土器実測図（36）…… 133
第107図　縄文土器実測図（37）…… 134
第108図　縄文土器実測図（38）…… 135
第109図　縄文土器実測図（39）…… 136
第110図　縄文土器実測図（40）…… 137
第111図　縄文土器実測図（41）…… 138
第112図　縄文土器実測図（42）…… 139
第113図　縄文土器実測図（43）…… 140
第114図　縄文土器実測図（44）…… 141
第115図　縄文土器実測図（45）…… 142
第116図　縄文土器実測図（46）…… 143
第117図　縄文土器実測図（47）…… 144
第118図　縄文土器実測図（48）…… 145
第119図　縄文土器実測図（49）…… 146
第120図　縄文土器実測図（50）…… 147
第121図　縄文土器実測図（51）…… 148
第122図　縄文土器実測図（52）…… 149
第123図　縄文土器実測図（53）…… 150
第124図　縄文土器実測図（54）…… 151

第125図　縄文土器実測図（55）…… 152
第126図　縄文土器実測図（56）…… 153
第127図　縄文土器実測図（57）…… 154
第128図　縄文土器実測図（58）…… 155
第129図　縄文土器実測図（59）…… 156
第130図　縄文土器実測図（60）…… 157
第131図　縄文土器実測図（61）…… 158
第132図　縄文土器実測図（62）…… 161
第133図　縄文土器実測図（63）…… 162
第134図　縄文土器実測図（64）…… 163
第135図　縄文土器実測図（65）…… 164
第136図　縄文土器実測図（66）…… 165
第137図　縄文土器実測図（67）…… 166
第138図　縄文土器実測図（68）…… 167
第139図　縄文土器実測図（69）…… 168
第140図　縄文土器実測図（70）…… 169
第141図　縄文土器実測図（71）…… 170
第142図　縄文土器実測図（72）…… 171
第143図　縄文土器実測図（73）…… 172
第144図　縄文土器実測図（74）…… 173
第145図　縄文土器実測図（75）…… 174
第146図　縄文土器実測図（76）…… 175
第147図　縄文土器実測図（77）…… 176
第148図　縄文土器実測図（78）…… 177
第149図　縄文土器実測図（79）…… 178
第150図　縄文土器実測図（80）…… 179
第151図　土器片加工円盤・土器片錘実測図（1）…… 183
第152図　土器片加工円盤・土器片錘実測図（2）…… 184
第153図　土器片加工円盤・土器片錘実測図（3）…… 185
第154図　縄文後期石器分布図（A区）…… 227～228
第155図　縄文後期石器分布図（B区）…… 229～230
第156図　縄文後期石器実測図（1）…… 231
第157図　縄文後期石器実測図（2）…… 232
第158図　縄文後期石器実測図（3）…… 233
第159図　縄文後期石器実測図（4）…… 234
第160図　縄文後期石器実測図（5）…… 235
第161図　縄文後期石器実測図（6）…… 236
第162図　縄文後期石器実測図（7）…… 237
第163図　縄文後期石器実測図（8）…… 238
第164図　縄文後期石器実測図（9）…… 239
第165図　縄文後期石器実測図（10）…… 240
第166図　縄文後期石器実測図（11）…… 241

第167図　縄文後期石器実測図（12）…… 242
第168図　縄文後期石器実測図（13）…… 243
第169図　縄文後期石器実測図（14）…… 244
第170図　縄文後期石器実測図（15）…… 245
第171図　縄文後期石器実測図（16）…… 246
第172図　縄文後期石器実測図（17）…… 247
第173図　縄文後期石器実測図（18）…… 248
第174図　縄文後期石器実測図（19）…… 249
第175図　縄文後期石器実測図（20）…… 250
第176図　縄文後期石器実測図（21）…… 251
第177図　縄文後期石器実測図（22）…… 252
第178図　縄文後期石器実測図（23）…… 253
第179図　縄文後期石器実測図（24）…… 254
第180図　縄文後期石器実測図（25）…… 255
第181図　縄文後期石器実測図（26）…… 256
第182図　縄文後期石器実測図（27）…… 257
第183図　縄文後期石器実測図（28）…… 258
第184図　縄文後期石器実測図（29）…… 259
第185図　縄文後期石器実測図（30）…… 260
第186図　縄文後期石器実測図（31）…… 261
第187図　弥生土器実測図 …… 294
第188図　古墳時代土器実測図 …… 295
第189図　古墳時代竪穴住居址実測図 …… 295
第190図　古代土器実測図 …… 296
第191図　中･近世遺構分布図 …… 298
第192図　掘立柱建物実測図 …… 299
第193図　B―Ⅰ区2号溝状遺構実測図 …… 300
第194図　中世遺物実測図（1）…… 301
第195図　中世遺物実測図（2）…… 302
第196図　近世土壙実測図（1）…… 305
第197図　近世土壙実測図（2）…… 306
第198図　近世遺物実測図 …… 307

表　目　次

第１表　旧石器計測表 …… 15
第２表　集石遺構計測表 …… 18
第３表　縄文早期土器観察表 …… 32
第４表　縄文早期石器計測表 …… 35
第５表　竪穴住居跡観察表 …… 79
第６表　縄文後期土坑観察表 …… 101
第７表　竪穴状遺構観察表 …… 125
第８表　土器片錘計測表 …… 183
第９表　土器片加工円盤計測表 …… 183
第10表　縄文土器観察表（1）～（38） …… 187
第11表　縄文石器計測表（1）～（32） …… 262
第12表　古代遺物観察表 …… 297
第13表　中世遺物観察表 …… 303
第14表　近世土壙観察表 …… 306
第15表　近世遺物観察表 …… 308

図 版 目 次

図版1　竹ノ内（B－Ⅰ区）全景 ……口絵1
図版2　岩偶（表裏）・土偶・石偶・竪穴住居跡(北西部・北東部) ……口絵2
図版3　竪穴住居跡（南西部・南東部）・30号住居跡・2号住居跡・ＳＥ2号 ……323
図版4　ＳＥ1号・ＳＣ105号・ＳＩ5号・ＳＩ18号・50号住居跡・遺物出土状況 ……324
図版5　旧石器時代遺物（1～3）・縄文時代早期石器・縄文時代後期石器（1） ……325
図版6　縄文時代後期石器（2～9） ……326
図版7　縄文時代後期石器（10～18） ……327
図版8　縄文時代早期土器（1～3） ……328
図版9　SA2・SA3・SA6～SA11・SA9・SA13・SA14・SA18・SA14～SA19・SA20～SA22 ……329
図版10　SA23・SA25・SA23～SA26・SA28・SA26・SA29～SA30・SA26・SA29・SA26・SA31・SA31・SA31・SA31 ……330
図版11　SA32～SA35・SA32・SA33・SA48・SA35・SA37～SA40・SA41・SA42・SA42～SA44・SA46・SA44・SA46・SA48・SA50・SA51・SA52 ……331
図版12　SA31・SA40・SA52・底部・SC1 ……332
図版13　SC2・4・6・7・10・13～16・SC16・17・19・22・24・SC27～SC31・SC24・SC27・SC34・SC32～SC35・SC56 ……333
図版14　SC38・47・49～51・53・56・SC35・SC56・SC57・SC58 ……334
図版15　SC58・SC64・SC70・SC65・67・72・78・83・85～88・90・93 ……335
図版16　SC58・SC64・SC90・91・93・95・99・100・102・104～106・SZ1～SZ4・SE2・SA31・Ⅰ類土器 ……336
図版17　Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類土器 ……337
図版18　Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類Aa土器 ……338
図版19　Ⅵ類（Ａａ・Ａｂ・Ｂａ・Ｂｂ）土器・Ⅶ類（A）土器 ……339
図版20　Ⅶ類（A・B）土器 ……340
図版21　Ⅷ・Ⅸ類土器 ……341
図版22　Ⅸ・Ⅹ類土器・台付皿形土器 ……342
図版23　底部・ⅩⅠ類土器 ……343
図版24　ⅩⅠ・ⅩⅡ類土器 ……344
図版25　ⅩⅡ類土器 ……345
図版26　ⅩⅡ類土器・磨研土器・碗形土器 ……346
図版27　磨研土器・台付皿形土器 ……347
図版28　土器片錘・土器片加工円盤 ……348
図版29　弥生土器（1～2）古墳土器（1）・古代土器（1～2）・中世遺物（1～3） ……349
図版30　中世遺物（4～6）・近世土器・近世陶磁器（1～2） ……350

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

一般県道清武インター線は、東九州自動車道と国道269号のアクセス道として宮崎土木事務所が改良事業を計画し、それにともない、宮崎土木事務所より県文化課に埋蔵文化財の有無の照会があった。文化課では予定路線内の分布調査及び試掘調査を実施した結果、アカホヤ上位で縄文後期の文化層を確認したため、竹ノ内遺跡と命名した。

この結果を受けて、県文化課と埋蔵文化財センターは宮崎土木事務所と事前の協議を行い、やむを得ず遺跡影響が及ぶ施行範囲約１2,000㎡を記録保存することとし、竹ノ内遺跡を平成８年５月17日から平成９年３月31日まで、平成９年５月12日から平成９年10月11日までの期間、発掘調査を実施した。

第２節　調査の組織

調査主体　宮崎県教育委員会

教育長	田原直廣（平成８年度）
	岩切重厚（平成９年度）
	笹山竹義（平成10年～11年度）
文化課長	江崎富治（平成８年度）
	仲田俊彦（平成９年度～11年度）
埋蔵文化財係長	面高哲郎（平成８年度）
	北郷泰道（平成９年度～11年度）
埋蔵文化財主査	永友良典（Ｈ８）・柳田宏一（Ｈ９）（調整担当）
主任主事	重山郁子（Ｈ10～Ｈ11）（調整担当）

宮崎県埋蔵文化財センター

所　長	藤本健一（平成８年～９年度）
	田中　守（平成10年～11年度）
庶務係長	三石泰博（平成8年～9年度）
	児玉和昭（平成10年～11年度）
調査第一係長	岩永哲夫（兼務）（平成８年度）
	面高哲郎（平成９年度～11年度）
調査第一係主査	高山富雄（調査主任）・山田洋一郎（調査副主任）
調査員（嘱託）	白岩　修・山路康弘・木嶋満晴・稲岡洋道
〃	代田博文　（平成９年度）

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　遺跡の位置と（歴史的）環境

竹ノ内遺跡（第１図１）は、宮崎県宮崎郡清武町大字今泉字竹ノ内に所在する。清武町は、県央、宮崎平野の南西部に位置し、日南山塊から延びる丘陵の先端部及びその間を流れる清武川とその支流水無川を中心とした低地からなり、川沿いの丘陵地には河岸段丘が発達し、町内の遺跡の大半はこの段丘上平坦面に形成されている。

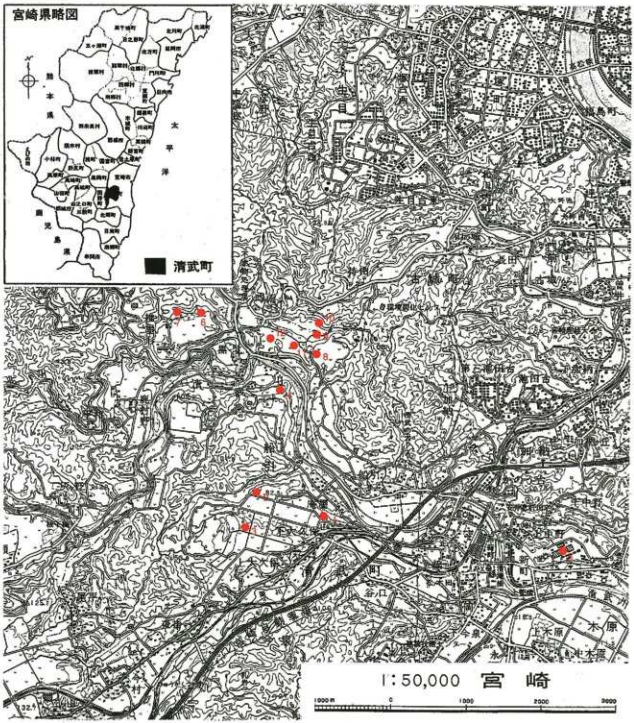
本遺跡は、清武川右岸の標高約60ｍを測る小高いシラス台地の縁辺部に立地する。調査時点で台地は畑作が営まれており、台地縁辺の崖面には湧水地が見られ、遺跡立地の好条件が備わっている。

近年、本遺跡の周辺では東九州自動車道建設に伴う発掘調査や、県営農地保全整備事業時屋地区における発掘調査等が実施されており数多くの調査報告がなされている。以下、町内の歴史、及び、主要な遺跡について、簡単に紹介してみたい。

清武町は古代から交通の要所として開け、後には飫肥街道も縦断し、清武城をはじめ中近世を中心とした史跡が町内に散在し、ひとつの町の雰囲気を醸し出している。特に室町時代には、伊東氏の所領が日向のほぼ全域に及び、清武城を含む四十八城を有するまでになる。安土桃山時代、元亀３年の木崎原合戦に敗れ、一時、島津氏の所領となるが、天正15年、豊臣秀吉の九州征伐の功により伊東祐兵の時から再び伊東氏の所領となり、幕末まで至る。このように、中近世の清武は、伊東氏の所領期が長いこともあって、広くその武士文化が浸透する基盤を持っており、特に、現市街地を取り囲む丘陵地帯には、神社仏閣が数多く建立され、『日向地誌』によれば、寺院１６、神社５を数える。なかでも明治5年に廃寺となった勢田寺は日向七堂伽藍のひとつに数えられ、飫肥街道沿いに立地し、十二支院を持つ大伽藍であったとされ、宮崎学園都市遺跡群中の山内石塔群及び県指定有形文化財の五輪塔はこの勢田寺に関連するものとされる。山内石塔群は記年在銘からは文明年間から天明年間にかけての約450基余りの五輪塔や板碑で構成されている。

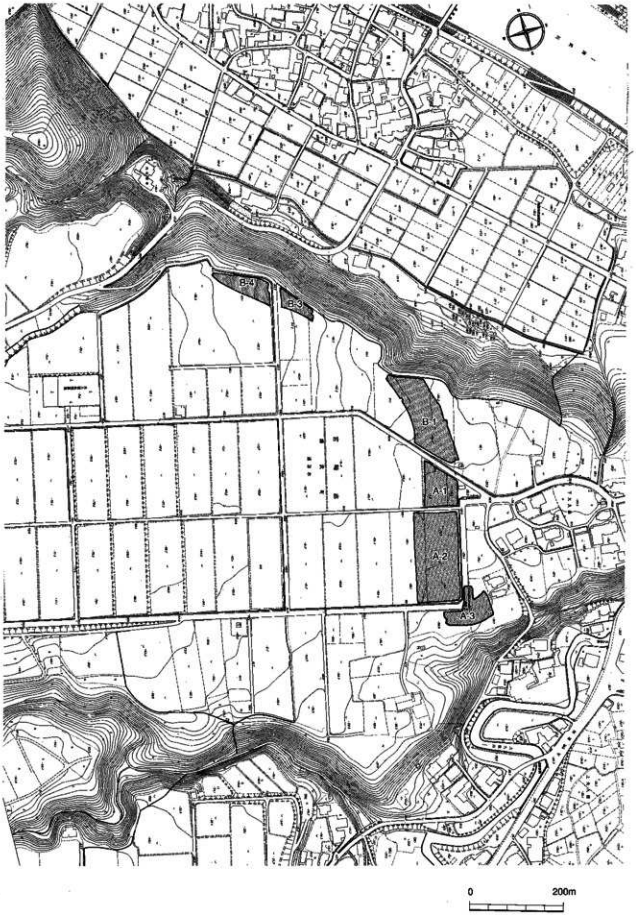
その他、町内及び隣接地では、近年、発掘調査が急増し、古代以前の遺跡についても調査結果が報告されるようになり、貴重な文化遺産が紹介されている。本遺跡の西側に位置する東九州自動車道関連の杉木原遺跡・下星野遺跡・権現原Ｂ遺跡は縄文時代早期を中心とする遺物・遺構が検出されている。また、本遺跡の東側の辻遺跡は、貝殻復縁による刺突文を連続した山形あるいは鋸歯状に施文する辻タイプと分類される縄文早期の土器が出土したことでも知られている。

本遺跡の北側の台地には県営農地保全整備事業関連の複合遺跡群が立地している。その中で、権屋形第１遺跡・第２遺跡では縄文時代草創期の土器が多量に出土するとともに、第１遺跡では、弥生時代後期初頭のいわゆる「花弁状住居跡」が検出されている。上ノ原第１・第２遺跡では縄文時代中期～後期の竪穴住居跡・土坑群が検出されている。また、白ヶ野第１・第２・第３遺跡では縄文時代早期を中心とする遺構・遺物が出土しており、特に、第３遺跡B地区の古代の竪穴住居群は特筆に価する。また、東九州関連の白ヶ野遺跡は、縄文時代を中心とする遺構・遺物の検



1．竹ノ内遺跡　2．杉木原遺跡　3．下星野遺跡　4．梅現原B遺跡
5．辻遺跡　6．椎屋形第１遺跡　7．椎屋形第２遺跡　8．白ヶ野第１遺跡
9．白ヶ野第２遺跡　10．白ヶ野第３遺跡　11．上ノ原第１遺跡　12．上ノ原第２遺跡

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡



第２図　遺跡発掘調査範囲図（1/4,000）

出量が非常に多く、報告書の刊行が待たれるところである。
また、本遺跡の西南西約9.5ｋｍに位置する丸野第２遺跡（田野町七野字丸野）は、縄文時代後期の竪穴住居が多数検出され、出土した遺物も指宿式、市来式、鐘崎式等、本遺跡に類似しており、整理の段階で非常に参考になった。

［参考文献］
清武町教育委員会　1990　『清武町遺跡詳細分布調査報告書』清武町埋蔵文化財調査報告書　第４集

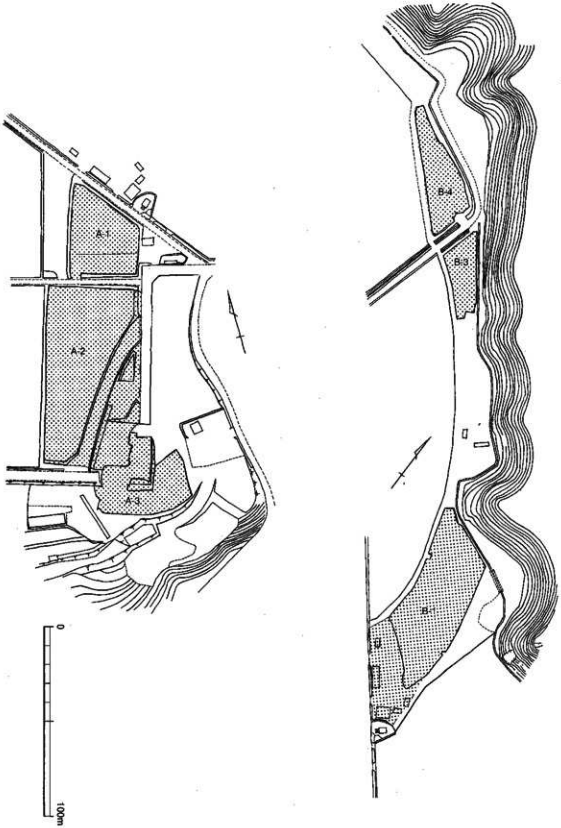
第２節　調査の経過

竹ノ内遺跡の調査対象面積は12,000㎡である。調査の都合上、調査区を道路を境に、南北にＡ・Ｂ２地区に分け、平成８年５月17日、Ａ区から発掘調査に入った。まず、表土（耕作土）を重機を使用して除去し、10ｍグリッドを組んで掘り下げを進めていった。グリッドは国土座標軸に関係なく調査区に沿って区画した。Ａ区の西側半分は掘削を受けている個所が多かったが、東側は掘削を受けずに当時の生活面が残っていた。その結果、アカホヤ上面の黒褐色層から縄文時代後期の竪穴住居・竪穴状遺構・土坑が検出され、それとともに市来式土器を中心とする遺物が多数出土した。また、アカホヤ下の黒褐色層からは縄文時代早期の集石遺構や押型文土器・石鏃等が検出された。その他、時期不明の柱穴群、中世の土師碗・白磁が出土した。

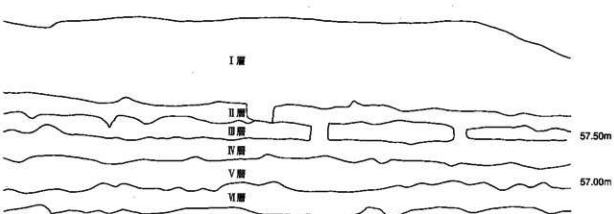
Ｂ地区は4区に区分しＡ区と同じように重機で表土を除去し、国土座標（ＸＹ座標）を基準としてＢ－１区は10ｍグリッド、Ｂ－３・Ｂ－４区は５ｍグリッドを設定し、掘り下げを進めた。Ｂ区は台地の縁辺部に位置しており、Ｂ－２区は表土の下はシラス層であった。それで、北側の縁辺部のＢ－３・Ｂ－４区、南側のＢ－１区を調査することとした。Ｂ－３・４区は、アカホヤが残存していたが谷状のため、遺構・遺物の密度は低かった。Ｂ－1区は、表土の下位層にあたる黒灰色土が撹乱なのかプライマリーな層なのか物議を醸したが、遺物の量の多さや保存状態を考慮して遺物包含層と判断し調査を進めた。その結果、縄文時代早期の集石遺構や押型文土器・石鏃等、縄文時代後期の配石遺構や市来式土器・指宿式土器・石鏃・磨石・石皿等の遺構・遺物が検出された。しかし、平成9年3月31日までにＢ－１区全体の調査は終了できず、次年度、継続調査となった。

平成９年５月12日から10月11日まで二次調査を実施した。当初は、単なる遺物包含層と考えていたが、掘り下げていくうちにⅡ層の褐色層から竪穴住居跡が検出された。残念ながらⅡ層の黒褐色層では検出できなかった。調査の進行上、遣り方測量を実施し平面図とレベル入れだけを行い、土層についてはベルトで切り合いを確認した。

調査の結果、第１次・第２次調査を通じて旧石器時代のナイフ形石器・スクレイパー等の石器類・縄文時代早期の集石遺構や押型文土器・石鏃等の遺物、縄文時代後期の竪穴住居跡・土坑・集石遺構・竪穴状遺構や岩偶・土偶・石偶・市来式土器・磨消縄文系土器・黒色磨研系土器・石鏃・磨製石斧・磨石・石皿等の遺物、中世・近世の陶磁器、近世の土壙墓・掘立て柱・道遺構（溝状遺構）等が確認された。



第３図　調査設定図



Ⅰ層　表土
Ⅱ層　黒褐色土（Hue 10YR 2/2/2）粒が細かく、パサツキがあり灰白色の軽石を含む。
Ⅲ層　アカホヤ火山灰
Ⅳ層　黒褐色土（Hue 10YR 3/3/2）粒が粗く、ブロック状になり砂質で粘質もあり、1mm程度の橙色の軽石を多く含む。
Ⅴ層　暗褐色土（Hue 10YR 5/6）粒が粗く、ブロック状になるものがある。全体的に1mm程度の灰白色・黄橙色の軽石がみられる。
Ⅵ層　暗褐色土（Hue 10YR 5/8）粒が細かく、パサツキがあり1mmほどの灰白色の軽石を含んでいる。
Ⅶ層　にぶい暗褐色（Hue 10YR 6/8）粒が細かく硬い。灰白色・青灰色の軽石・灰色のブロックを含む。
Ⅷ層　シラス層（Hue 10YR 1/2）

0　1m

第4図　基本土層図

第3節　遺跡の基本層序

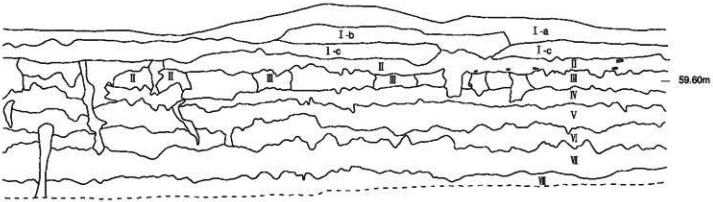
本遺跡の基本層序は第3図に示す通りである。

Ⅰ層
Ⅱ層
Ⅲ層
Ⅳ層
Ⅴ層
Ⅵ層
Ⅶ層
Ⅷ層

第Ⅰ層(表土)は大根を中心とする畑作に利用されている。第Ⅱ層（黒褐色土）は粒が細かく、パサツキがあり、灰白色の軽石を含む。縄文後期の遺物包含層である。第Ⅲ層はアカホヤ火山灰層(一次堆積)であり、下部に火山豆石を含む。第Ⅳ層（黒褐色土）は粒があらく、ブロック状になり砂質で粘質もあり、1㎜程度の橙色の軽石を多く含む。縄文時代早期の遺物包含層である。第Ⅴ層（暗褐色土）は粒があらく、ブロック状になるものがある。全体的に1㎜程度の灰白色・黄橙色の軽石がみられる。縄文時代早期の遺物包含層であり、集石遺構が検出された。第Ⅵ層(暗褐色土)は粒が細かく、パサツキがあり1㎜ほどの灰白色の軽石を含んでいる。第Ⅶ層（にぶい暗褐色）は粒が細かく硬い。灰白色・青灰色の軽石・灰色のブロックを含む。第Ⅷ層はシラス火山灰層である。

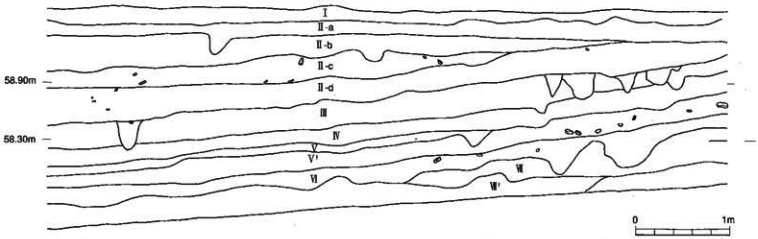
また、後述のテフラ検出分析結果より、第Ⅲ層は約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰に同定される。第Ⅶ層は約1.4～1.6万年前に霧島火山から噴出した霧島小林軽石に由来すると思われる。

竹ノ内遺跡　A-1区　東側土層断面図



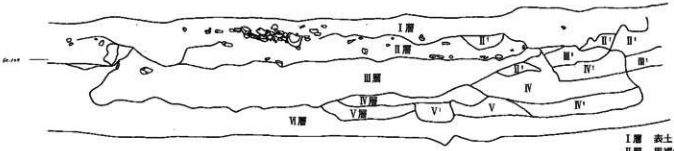
Ⅰ層　カクラン
Ⅱ層　黒褐色土（Hue 10YR 2/2）１～２mmほどの黄橙色の軽石を含む。
Ⅱ-a　黒褐色土（Hue 10YR 3/1）粒が粗く、しまっている。
Ⅱ-b　黒褐色土（Hue 10YR 2/3）２～３mmの黄橙色の軽石を含む。
Ⅱ-c　黒色土（Hue 10YR 1/1/7）１mm程度の黄橙色・灰白色の軽石を含む。
Ⅱ-d　黒色土（Hue 10YR 2/1）１mm程度の黄橙色の粒を含む。
Ⅲ層　アカホヤ火山灰
Ⅳ層　黒色土（Hue 10YR 3/1）全体的に１～２mmほどの橙色の軽石が含まれる。
Ⅴ層　黒褐色（Hue 10YR 3/2）全体的に１mmほどの灰色・黄橙色の軽石が少し含まれる。
Ⅴ'層　黒褐色（Hue 10YR 2/2）砂質ではりがあるが、粘質はない。
Ⅵ層　にぶい黄褐色（Hue 10YR 4/3）灰白色・青灰色の軽石・灰色のブロックがあるが小林軽石を含む。
Ⅵ'層　にぶい黄褐色（Hue 10YR 4/3）Ⅵ層に比べて、はりがみられる。
Ⅶ層　シラス（Hue 10YR 4/2）

竹ノ内遺跡　A-2区　土層断面図



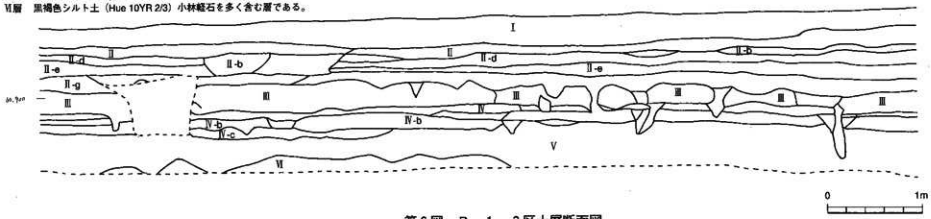
第５図　Ａ区土層断面図

竹ノ内遺跡　B-1区　北側土層断面図

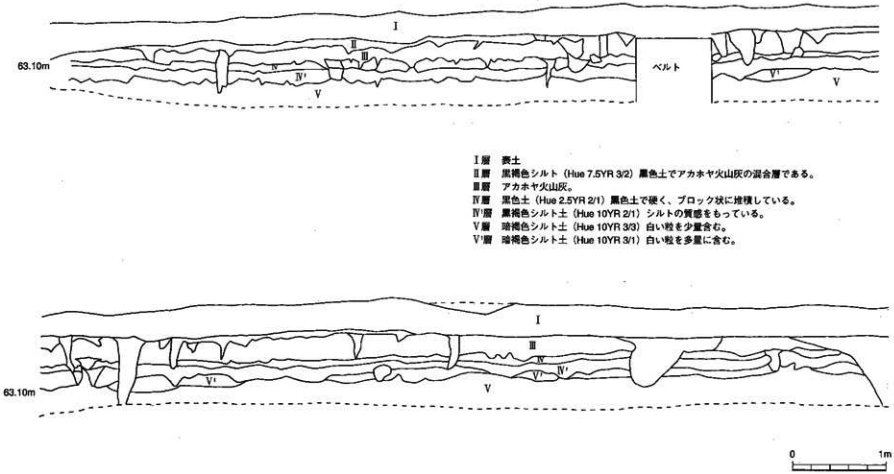


Ⅰ層　表土
Ⅱ層　黒褐色土（Hue 10YR 3/2/3）粒が細かく、パサパサしている。
Ⅱ'層　黒褐色土（Hue 10YR 3/2/3）粒が細かく、白い粒を少量含む。
Ⅲ層　黒褐色土（Hue 10YR 3/2/2）粒が細かく、白い粒を少量含む。
Ⅲ'層　黒褐色土（Hue 10YR 3/3/2）粒が細かく、白い粒と褐色の粒を含む。
Ⅳ層　黒褐色土（Hue 10YR 3/3/1）粒が細かく、上部に白い粒を少量含む。
Ⅴ層　黒褐色土（Hue 10YR 3/2/2）粒が粗く、白や黄色の粒を含む。
Ⅴ'層　黒褐色土（Hue 10YR 3/2/2）粒が粗く、白や黄色の粒を少量含む。
Ⅵ層　黄橙色土（Hue 10YR 8/6/6）粒が大きく、小石を多く含んでいる。
Ⅶ層　にぶい黄橙色土（Hue 10YR 5/4/3）粒が粗く、白いブロックを少量含む。
Ⅶ'層　にぶい黄橙色土（Hue 10YR 5/4/3）粒が粗く、白いブロックを多く含む。

Ⅰ層　表土
Ⅱ層　褐色土（Hue 10YR 4/1）5mmくらいの灰白色の石を含む。（新燃岳スコリア）
Ⅱ-b層 灰黄褐色（Hue 10YR 4/2）白い砂粒を多く含む。（文明層）
Ⅱ-d層 暗褐色（Hue 10YR 3/3）にぶい黄色粒を多く含む。（高原スコリア）
Ⅱ-e層 黒褐色土（Hue 10YR 3/2）にぶい黄色粒を部かん含む。
Ⅱ-g層 黒色土（Hue 7.5YR 2/1）アカホヤ直上の黒色土である。
Ⅲ層　アカホヤ火山灰層
Ⅳ層　黒色土（Hue 2.5YR 2/1）アカホヤ直下でものすごく固く、ブロック状に堆積している。
Ⅳ-b層 黒色シルト土（Hue 10YR 2/1）アカホヤの直下で白い粒子を多少含む。
Ⅳ-c層 黒色シルト土（Hue 10YR 3/1）桜島と思われる小粒を多量に含む。
Ⅴ層　黒褐色シルト土（Hue 10YR 3/3）しまりがあり、石英を含む。
Ⅵ層　黒褐色シルト土（Hue 10YR 2/3）小林軽石を多く含む層である。



第6図　B－1・3区土層断面図



Ⅰ層　表土
Ⅱ層　黒褐色シルト（Hue 7.5YR 3/2）黒色土でアカホヤ火山灰の混合層である。
Ⅲ層　アカホヤ火山灰。
Ⅳ層　黒色土（Hue 2.5YR 2/1）黒色土で硬く、ブロック状に堆積している。
Ⅳ'層　黒褐色シルト土（Hue 10YR 2/1）シルトの質感をもっている。
Ⅴ層　暗褐色シルト土（Hue 10YR 3/3）白い粒を少量含む。
Ⅴ'層　暗褐色シルト土（Hue 10YR 3/1）白い粒を多量に含む。

第７図　Ｂ－Ⅳ区土層断面図

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　旧石器時代の遺物

竹ノ内遺跡の旧石器時代の遺構は、無く遺物のみの検出となった。遺物は、A－Ⅰ区・A－Ⅱ区・B－Ⅰ区・B－Ⅲ区・B－Ⅳ区で出土している。

遺物の分布状況については、B－Ⅰ区のG－５・F－５、B－Ⅳ区のG－９に多少の集中部が見られるものの、ユニットを構成できるものではなかった。

竹ノ内遺跡では、旧石器時代の遺物を全部で36点検出している。内訳は、ナイフ形石器２点（６％）・楔形石器３点（８％）・台形様石器１点（３％）・石核９点（25％）・細石核８点(22％）・剥片類９点（25％）・砕片類４点である。(11％)

地区別に出土数を比べてみると、A－Ⅰ区（１点）・A－Ⅱ区（７点）・B－Ⅰ区（14点）・B－Ⅲ区（１点）・B－Ⅳ区（13点）となる。この中で基本土層が比較的残っているのは、B－Ⅳ区である。B－Ⅳ区で検出された遺物は、霧島小林軽石を含む第Ⅶ層から検出されている。その他、A－Ⅰ・A－Ⅱ・B－Ⅰ区で検出したものの中には縄文の包含層や表土に混在したものもあった。尚、第12図旧石器遺構分布図には、実測したものを掲載した。

ナイフ形石器（第８図１～２）

ナイフ形石器は、全部で２点出土している。１は、頁岩製の縦長剥片を素材としているもので一側辺に加工を施しているものである。Ⅶ層で検出している。プランティングは、裏面から施されている。２は、全体の半分程が欠損しているが、１と同じく頁岩製の一側辺加工のものである。トレンチで検出され縄文の遺物と共に混在していた。プランティングは裏面から施されている。

楔形石器（第８図３～４）

楔形石器は、全部で3点出土している。そのうちの2点を実測した。石材はすべて頁岩である。３は、縦長剥片を素材とし、上下両端に小剥離痕が観察される。４も縦長剥片を素材としていて、上下両端に剥離面を持っている。

台形様石器（第８図５）

台形様石器は、縦長剥片を素材として、下端を切断したもので一側辺に調整が見られるものである。

石核（第８図～第10図６～９）

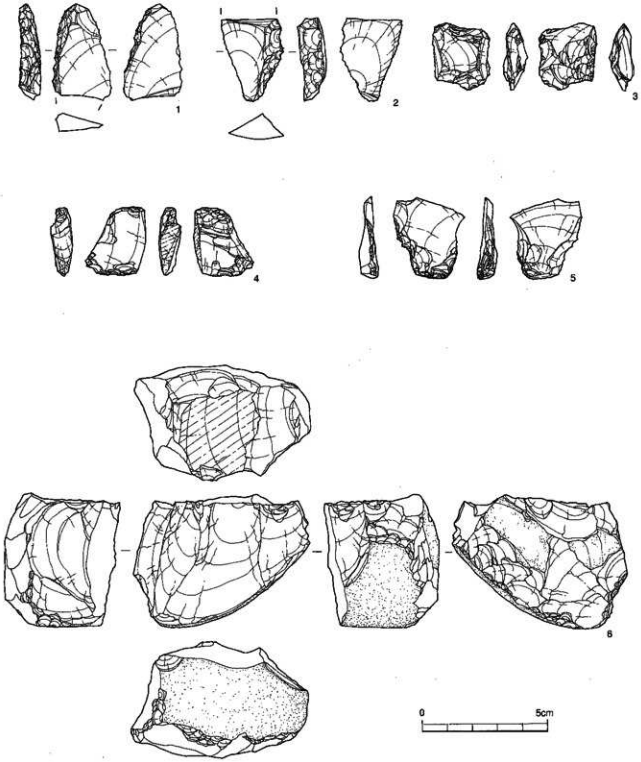
石核は、全部で9点出土している。その石材別の内訳は、頁岩９点である。

これらの資料の中で4点を実測した。６は、縦長剥片の剥出作業面が4面みられる。縦長剥片は、いずれも上部を打点として剥離されている。

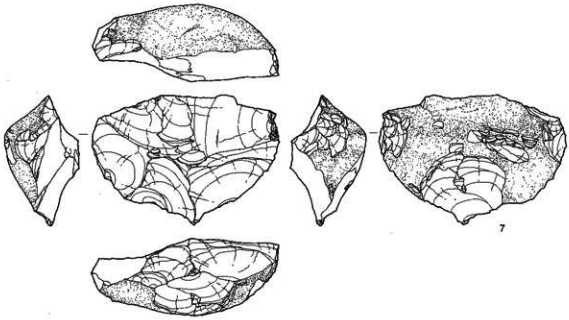
７は、不定形剥片の剥出作業面5面見られる。打点は横方向にみられる。

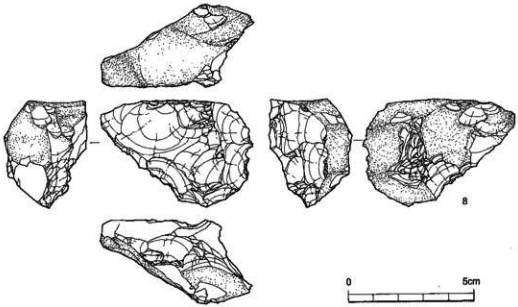
８は、不定形剥片の剥出作業面が７面見られる。打点は、その作業面を打面として剥離を行っている。９は、不定形剥片の剥出作業面が７面見られるもので、その作業面を打面として剥出作業を行っている。

細石核（第10図10～13）

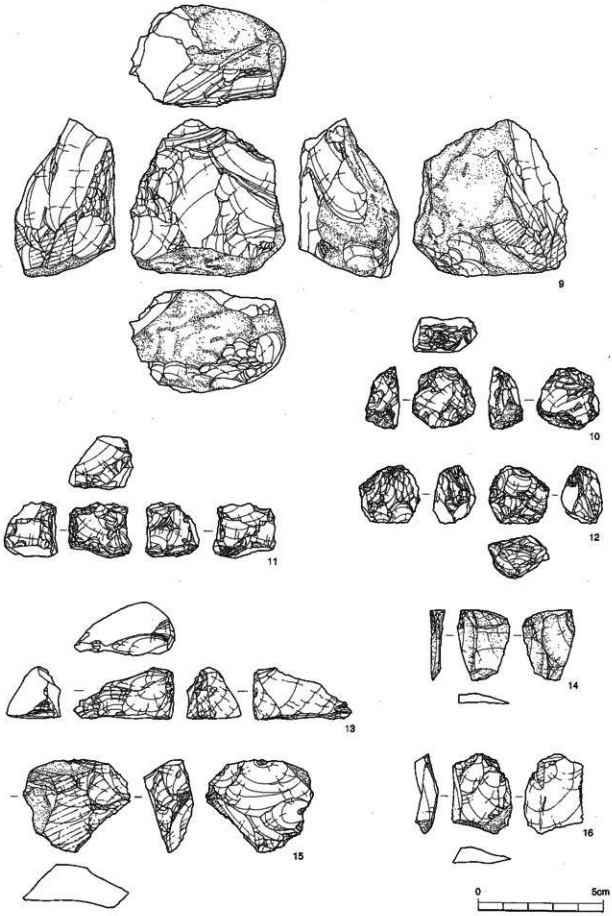


第8図　旧石器実測図（1）

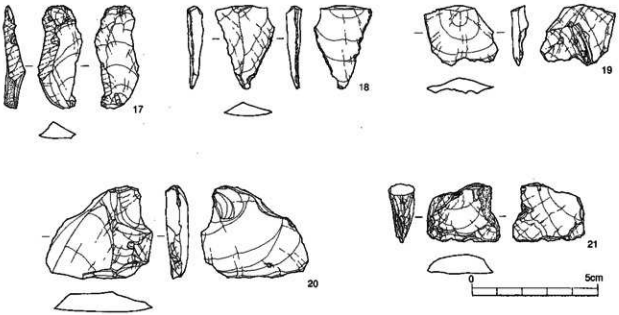




第９図　旧石器実測図（2）



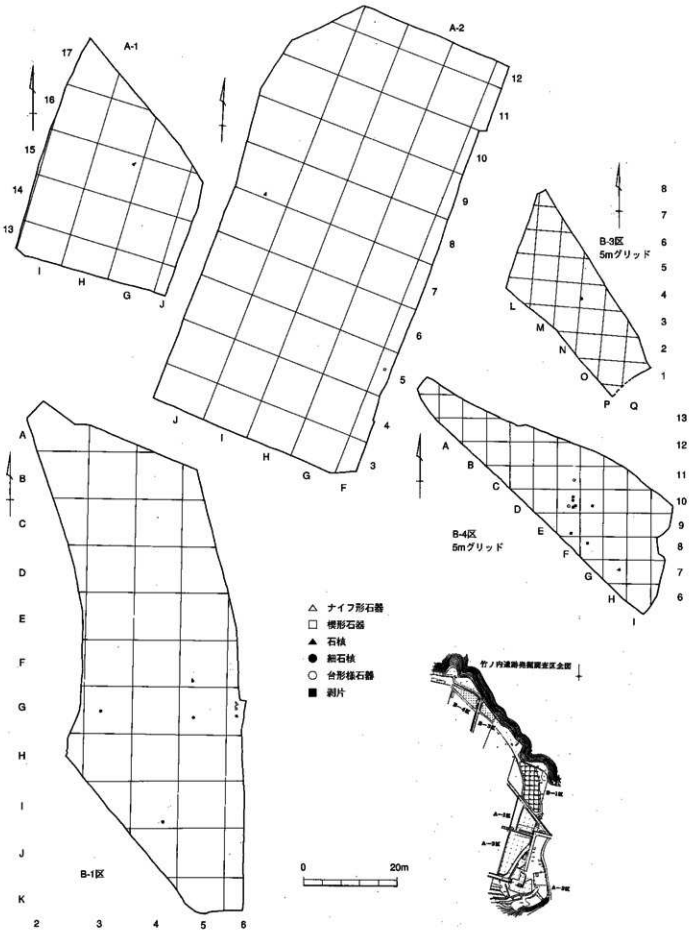
第10図　旧石器実測図（3）



第11図　旧石器実測図（4）

第１表　旧石器計測表

図版番号	出土位置	器種	計測値			重量(g)	石材	備考	実測番号
			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)				
1	B-Ⅰトレ9	ナイフ形石器	3.25	2.44	9.4	5.67	頁岩	実測	27
2	B-Ⅰトレ9	ナイフ形石器	2.31	1.7	8.7	3.39	頁岩	実測	28
3	B-ⅣⅩⅡ層-35	楔形石器	2.66	2.24	7.7	5.43	頁岩	実測	29
4	A-2-f-5	楔形石器	2.67	2.3	8	5.37	頁岩	実測	30
5	B-ⅣⅩⅡ層-49	台形様石器	3.21	2.8	8.2	5.33	頁岩	実測	32
6	B-Ⅰ-SC27	石核	4.94	6.96	4.59	230	頁岩	実測	1
7	B-ⅣⅣ層-114	石核	5.16	7.35	3.04	93.75	頁岩	実測	2
8	A-Ⅱ-198	石核	4.94	6.32	3.26	67.14	頁岩	実測	3
9	A-ⅡSZ3-57	石核	2.06	4.01	2.07	15.02	頁岩	実測	8
10	B-Ⅰ-SC54	細石核	2.24	2.45	2.15	13.16	黒曜石	実測	5
11	B-Ⅱi-3	細石核	5.16	6.15	4.02	171	チャート	実測	4
12	B-ⅠB-728	細石核	2.32	2.47	1.29	7.63	黒曜石	実測	6
13	B-ⅢⅤ層-1	細石核	2.27	2.31	1.51	7.84	頁岩	実測	7
14	B-ⅣⅩⅡ層48	剥片	3.17	2.42	0.61	5.29	頁岩	実測	20
15	B-ⅣⅩⅡ層-108	剥片	2.73	1.98	0.57	2.79	頁岩	実測	19
16	B-ⅣⅩⅡ層-48	剥片	4.03	1.58	0.62	3.61	頁岩	実測	21
17	B-ⅣⅩⅡ層-47	剥片	2.36	2.95	0.59	2.79	頁岩	実測	22
18	B-ⅣⅩⅡ層-55	剥片	3.86	2.31	8	6.2	頁岩	実測	26
19	B-ⅣⅩⅡ層-50	剥片	2.28	2.82	0.83	6.33	頁岩	実測	23
20	B-Ⅰトレ9コハ゛	剥片	3.24	2.28	0.56	2.28	頁岩	実測	25
21	B-Ⅳ層-40	剥片	3.61	4.31	0.87	13.71	頁岩	実測	24
22	A-Ⅰg-15	石核	5.53	3.92	2.18	49.7	頁岩		14
23	A-Ⅱ	石核	8.49	5	3.81	198.5	頁岩		9
24	A-Ⅱ	石核	7.3	6.38	5.92	289.4	頁岩		11
25	A-Ⅱh-9	石核	5.1	4.17	2.34	58.7	頁岩		10
26	A-Ⅱ	細石核	3.6	2.11	2.7	19	砂岩		12
27	A-Ⅱ	砕片	1.22	0.9	0.16	0.2	黒曜石		37
28	A-ⅡⅢ層-3094	砕片	1.889	0.708	0.184	0.4	頁岩		35
29	B-Ⅰ-g-5	細石核	3.02	2.05	1.56	9.5	黒曜石		16
30	B-ⅠJ-6	石核	5.12	4.15	2.62	70.1	頁岩		13
31	B-ⅠSE2	楔形石器	2.9	1.66	0.86	6	チャート		31
32	B-Ⅰ-780	砕片	1.541	0.544	0.144	0.01	頁岩		36
33	B-Ⅰg-6	砕片	1.128	0.768	0.156	0.01	頁岩		33
34	B-Ⅰトレ6-14	細石核	2.43	1.97	1.21	5.6	黒曜石		15
35	BⅣ	細石核	2.75	1.76	1.96	7.6	黒曜石		17
36	B-ⅣⅦ層-48	剥片	3.76	4.25	1.87	21.83	頁岩		18


A-1
A-2
B-1区
B-3区
5mグリッド
B-4区
5mグリッド
△ ナイフ形石器
□ 楔形石器
▲ 石核
● 細石核
○ 台形様石器
■ 剥片
0
20m
竹ノ内遺跡発掘調査区全図

第12図　旧石器分布図

細石核は、全部で8点検出された。そのうちの4点を図示した。

10は、漆黒系の黒曜石製のもので、剥出作業面が5面ほど見られるものである。打点は、左右両方向に見られる。

11は、チャート系のもので剥出作業面が5面ほど見られる。打点は、上下両方向に見られる。

12は、漆黒系の黒曜石製である。剥出作業面が5面ほど見られる。打面は、上下両方向にみられるものである。

13は、頁岩製のものである。剥出作業面が6面ほど見られるものである。打面は、上下両方向にみられる。

剥片・砕片（第11図14～21）

剥片・砕片類は、13点ほど検出している。そのうち剥片を8点ほど図示した。

14・16～18までは縦長剥片である。そのうち14と16・18は、側面に使用痕と思われる剥離が見られる。15・19～21までは，横長剥片である。いずれも縦あるいは横方向に調整を施している。

第2節　縄文時代早期の遺構と遺物

1　遺構

（1）集石遺構

竹ノ内遺跡では、集石遺構を第Ⅳ層・第Ⅴ層で37基検出している。分布状況は、B－Ⅰ区は、16基・B－Ⅲ区で7基・B－Ⅳ区で5基・A－Ⅲ区で9基である。

集石遺構は、八木澤一郎氏の分類を参考に3形態に分類した。

Ⅰ類－掘り込みを持つが、底石が無い形態のもの。――――――28基

Ⅱ類－掘り込みも底石も共にある形態のもの。――――――――8基

Ⅲ類－掘り込みも底石も共に無い形態のもの。――――――――1基

1号集石（第14図）

B－Ⅰ区のⅤ層で検出されている。礫は浮いた状態になっていた。埋土は、黒灰色で締まっている。礫は比較的に小さな角礫ものが多い。構成礫のうち23個は赤変していた。分類でいうとⅠ類に相当する。

2号集石（第14図）

B－Ⅰ区のⅣ層で検出されている。礫は浮いた状態で検出している。埋土は、黒褐色で締まっていた。礫は角礫が多く三分の一ほどが赤く変色していた。分類でいうとⅠ類に相当する。

3号集石（第14図）

B－Ⅰ区のⅤ層で検出されている。楕円形の浅い掘り込みを持っている。埋土は暗褐色土である。分類でいうとⅠ類に相当する。熱を受けた礫は10個前後と少ない。

4号集石（第14図）

B－Ⅰ区のⅤ層で検出している。埋土は暗褐色土である。分類でいうとⅠ類に相当する。

5号集石（第14図）

B－Ⅰ区のⅣ層で検出している。埋土は黒褐色土である。土器が6点出土している。分類で言う

第2表　集石遺構計測表

図番号	検出位置	礫の範囲	土坑の大きさ	土坑の深さ	配石の有無	備考
1号集石	B－Ⅰ区	0.85m×0.95m	0.94m×0.92m	0.21m	無し	Ⅰ類
2号集石	B－Ⅰ区	1.35m×1.25m	1.13m×1.18m	0.13m	無し	Ⅰ類
3号集石	B－Ⅰ区	0.7m×0.9m	1.07m×0.92m	0.11m	無し	Ⅰ類
4号集石	B－Ⅰ区	0.9m×0.87m	0.91m×0.81m	0.09m	無し	Ⅰ類
5号集石	B－Ⅰ区	0.64m×0.5m	0.64m×0.5m	0.60m	無し	Ⅰ類
6号集石	B－Ⅰ区	1.32m×0.97m	1.32m×0.97m	0.12m	無し	Ⅰ類
7号集石	B－Ⅰ区	0.81m×0.77m	0.87×0.78m	0.07m	無し	Ⅰ類
8号集石	B－Ⅰ区	0.8m×0.88m	0.80m×0.88m	0.89m	無し	Ⅰ類
9号集石	B－Ⅰ区	0.9m×0.85m	0.98m×0.95m	0.08m	無し	Ⅰ類
10号集石	B－Ⅰ区	1.1m×0.67m	1.09m×0.66m	0.10m	無し	Ⅰ類
11号集石	B－Ⅰ区	0.85m×0.81m	0.9m×0.9m	0.13m	無し	Ⅰ類
12号集石	B－Ⅰ区	0.75m×0.80m	1.09m×0.85m	0.22m	無し	Ⅰ類
13号集石	B－Ⅰ区	0.45m×0.48m	8.6m×8.1m	0.71m	無し	Ⅰ類
14号集石	B－Ⅰ区	0.93m×0.87m	0.95m×0.81m	0.12m	無し	Ⅰ類
15号集石	B-Ⅲ区	0.8m×0.88m	0.82m×0.92m	0.22m	無し	Ⅰ類
16号集石	B-Ⅲ区	0.8m×0.83m	0.92m×0.78m	0.14m	無し	Ⅰ類
17号集石	B-Ⅲ区	1.0m×0.85m	0.81m×0.82m	0.01m	無し	Ⅰ類
18号集石	B-Ⅲ区	1.22m×1.20m	1.0m×0.88m	0.11m	無し	Ⅰ類
19号集石	B-Ⅲ区	1.20m×1.04m	1.21m×1.34m	0.15m	無し	Ⅰ類
20号集石	B-Ⅲ区	0.72m×0.76m	0.71m×0.81m	0.17m	無し	Ⅰ類
21号集石	B-Ⅳ区	0.58m×0.45m	0.65m×0.62m	0.07m	無し	Ⅰ類
22号集石	B-Ⅳ区	1.16m×0.95m	0.7m×0.76m	0.27m	無し	Ⅰ類
23号集石	B-Ⅳ区	0.91m×1.05m	0.68m×1.056m	0.10m	無し	Ⅰ類
24号集石	B-Ⅳ区	1.31m×1.35m	0.78m×0.72m	0.28m	無し	Ⅰ類
25号集石	B-Ⅳ区	1.04m×1.07m	0.82m×0.84m	0.20m	無し	Ⅰ類
26号集石	A-Ⅲ区	0.92m×0.53m	1.0m×0.68m	0.15m	無し	Ⅰ類
27号集石	A-Ⅲ区	1.0m×1.02m	0.82m×0.93m	0.12m	無し	Ⅰ類
28号集石	A-Ⅲ区	1.143m×0.98m	1.34m×0.83m	0.08m	無し	Ⅰ類
29号集石	B－Ⅰ区	2.07m×1.67m	2.15m×1.57m	0.32m	2個	Ⅱ類
30号集石	B－Ⅰ区	0.56m×0.77m	0.83m×0.69m	0.12m	3個	Ⅱ類
31号集石	A-Ⅲ区	2.49m×1.98m	1.93m×1.80m	0.33m	4個	Ⅱ類
32号集石	A-Ⅲ区	1.35m×1.16m	1.17m×1.13m	0.13m	2個	Ⅱ類
33号集石	A-Ⅲ区	1.65m×1.40m	1.44m×1.49m	0.23m	4個	Ⅱ類
34号集石	A-Ⅲ区	1.82m×1.78m	1.71m×1.67m	0.35m	14個	Ⅱ類
35号集石	A-Ⅲ区	1.40m×1.50m	1.06m×0.91m	0.24m	4個	Ⅱ類
36号集石	A-Ⅲ区	1.65m×1.50m	1.67m×1.44m	0.28m	5個	Ⅱ類
37号集石	B-Ⅲ区	1.35m×1.07m				Ⅲ類

とⅠ類に相当する。

6号集石（第14図）

B－Ⅰ区のⅣ層で検出している。埋土は黒褐色土である。分類で言うとⅠ類に相当する。

7号集石（第15図）

B－Ⅰ区のⅣ層で検出している。埋土は、黒褐色土である。分類でいうとⅠ類に相当する。

8号集石（第15図）

B－Ⅰ区のⅣ層で検出している。分類でいうとⅠ類に相当する。礫の半分ぐらいは赤変している。

9号集石（第15図）

B－Ⅰ区のⅣ層で検出している。埋土は黒褐色土である。床面はかたくしまっている。分類でいうとⅠ類に相当する。

10号集石（第15図）

B－Ⅰ区のⅣ層で検出している。埋土は黒褐色土である。分類でいうとⅠ類に相当する。

11号集石（第15図）

B－Ⅰ区のⅤ層で検出している。埋土は暗褐色で炭化物を少量含んでいた。分類でいうとⅠ類に相当する。

12号集石（第15図）

B－Ⅰ区のⅤ層で検出している。また、埋土の中に炭化物を含んでいる。礫は浮いた状態にな

っている。埋土は暗褐色土である。分類でいうとⅠ類に相当する。

13号集石（第16図）

B－Ⅰ区のⅤ層で検出している。掘り込みの西側部分に深さ40cmの穴が見られる。土器が３点検出している。分類でいうとⅠ類に相当する。

14号集石（第20図）

B－Ⅰ区のⅤ層で検出している。埋土は黒灰色土で、礫には煤のついているものもあった。分類でいうとⅠ類に相当する。縄文後期の住居址と同じレベルから出土したことから縄文後期の所産と考えられる。

15号集石（第16図）

B－Ⅲ区のⅣ層で検出されている。礫がかなり浮いた状態で検出されている。埋土は黒褐色土で炭化物を多く含んでいる。分類でいうとⅠ類に相当する。

16号集石（第16図）

B－Ⅲ区のⅤ層で検出されている。礫が少し浮いた感じで検出されている。埋土は暗褐色土で炭化物が混じっていた。分類でいうとⅠ類に相当する。

17号集石（第16図）

B－Ⅲ区のⅤ層で検出されている。埋土は暗褐色土である。分類でいうとⅠ類に相当する。

18号集石（第16図）

B－Ⅲ区のⅣ層で検出されている。埋土は、黒褐色土で少量の炭化物を含む。分類でいうとⅠ類に相当する。

19号集石（第17図）

B－Ⅲ区のⅣ層で検出されている。特徴としては、埋土は暗褐色土である。少量の炭化物を含んでいる。分類でいうとⅠ類に相当する。

20号集石（第17図）

B－Ⅲ区のⅤ層で検出されている。礫は浮いた状態で検出されている。埋土は暗褐色土に炭化物の砕片が混在している。分類でいうとⅠ類に相当する。

21号集石（第17図）

B－Ⅳ区のⅤ層で検出されている。埋土は暗褐色土に少量の炭化物を含んでいる。分類でいうとⅠ類に相当する。

22号集石（第17図）

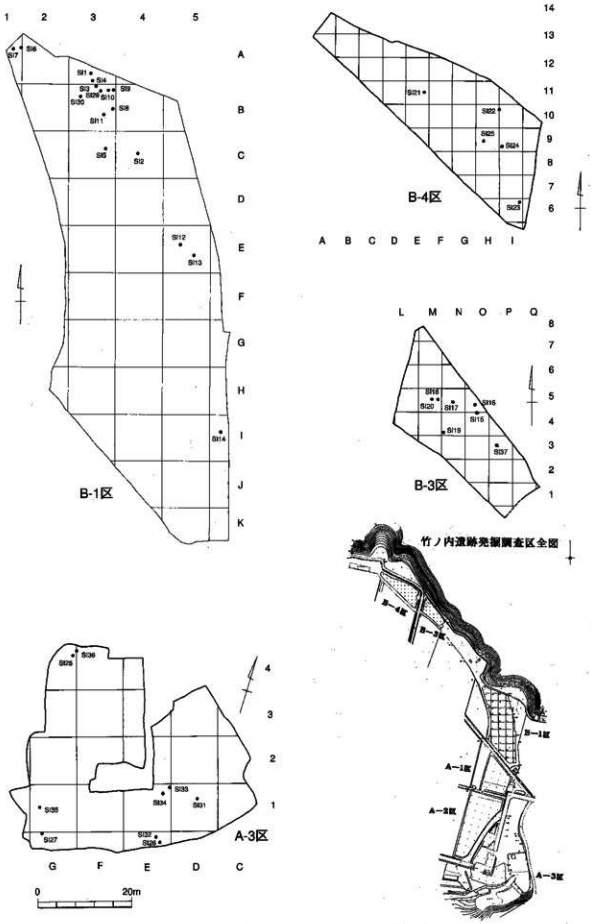
B－Ⅳ区のⅤ層で検出されている。礫に煤のついたものも見受けられる。分類でいうとⅠ類に相当する。

23号集石（第17図）

B－Ⅳ区のⅤ層で検出している。埋土は暗褐色土である。分類でいうとⅠ類に相当する。

24号集石（第17図）

B－Ⅳ区のⅤ層で検出している。礫は底部より少し浮いた状態である。埋土は暗褐色土である。分類でいうとⅠ類に相当する。



第13図　集石遺構分布図

25号集石（第18図）

B－Ⅳ区のⅣ層で検出している。埋土は黒褐色土である。わずかに炭化物を含んでいる。分類でいうとⅠ類に相当する。

26号集石（第18図）

A－Ⅲ区のⅤ層で検出している。埋土は暗褐色土である。分類でいうとⅠ類に相当する。出土遺物としては、深鉢の胴部で外面に2本単位の棒状工具による鋸歯条沈線文・横ナデが施されているものがある。（第21図３）

27号集石（第18図）

A－Ⅲ区のⅤ層で検出している。埋土は暗褐色土である。分類でいうとⅠ類に相当する。出土遺物としては、深鉢の口縁付近で外面に横方向の山形押型文をほどこしているものがある。（第21図４）

28号集石（第18図）

A－Ⅲ区のⅤ層で検出している。埋土は暗褐色土で少量の炭化物を含んでいる。分類でいうと第Ⅰ類に相当する。

29号集石（第18図）

B－Ⅰ区のⅣ層で検出されている。礫は浮いた状態で検出されている。埋土は黒褐色で締まっている。礫は角礫が多く角は磨耗しているものが多い。分類でいうとⅡ類に相当する。

30号集石（第18図）

B－Ⅰ区のⅤ層で検出している。埋土は暗褐色土である。分類でいうとⅡ類に相当する。

31号集石（第19図）

A－Ⅲ区のⅣ層で検出している。埋土は黒褐色土で、分類でいうとⅡ類に相当する。

32号集石（第19図）

A－Ⅲ区のⅣ層で検出している。埋土は黒褐色土で、分類でいうとⅡ類に相当する。出土土器としては、口縁部が先細り気味で緩やかに外反し、外面に斜位の撚糸文をもつものがある。（第21図１）また、深鉢の胴部で斜め方向の放射状の貝殻条痕文をもつものがある。（第21図２）

33号集石（第19図）

A－Ⅲ区のⅣ層で検出している。埋土は黒褐色土で分類でいうとⅡ類に相当する。

34号集石（第20図）

A－Ⅲ区のⅣ層で検出している。埋土は黒褐色土で分類でいうとⅡ類に相当する。

35号集石（第20図）

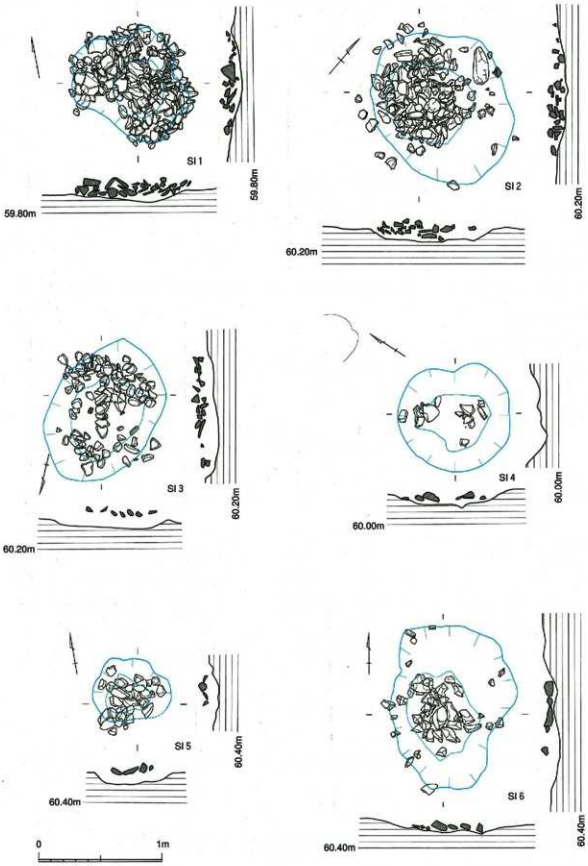
A－Ⅲ区のⅤ層で検出している。埋土は暗褐色土で分類でいうとⅡ類に相当する。遺物は斜め方向の貝殻条痕文が出土した。（第21図５）

36号集石（第20図）

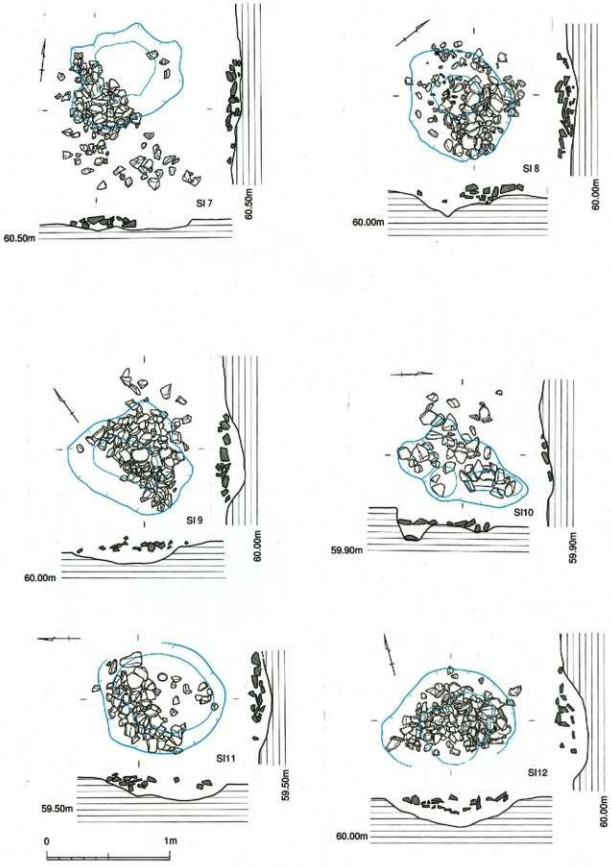
A－Ⅲ区のⅤ層で検出している。埋土は暗褐色土で分類でいうとⅡ類に相当する。

３７号集石（第19図）

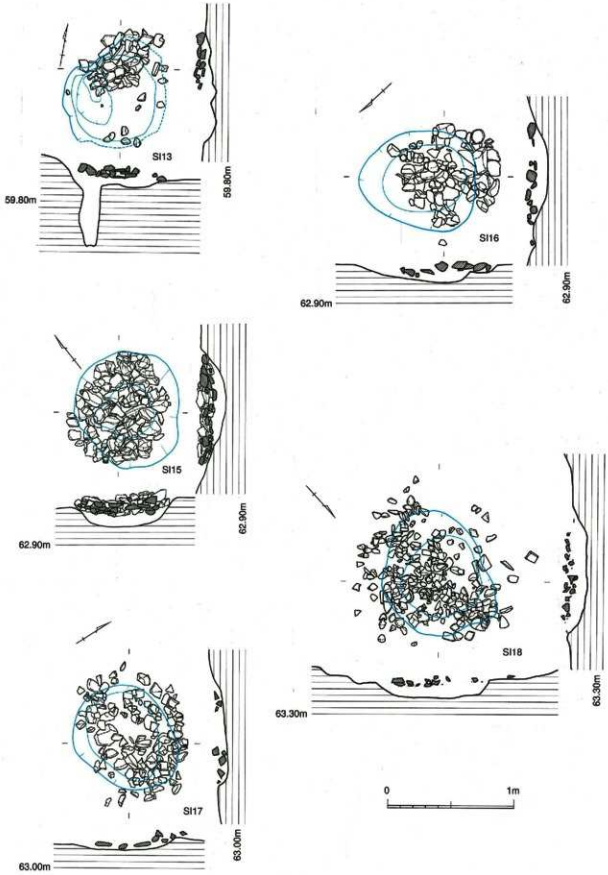
B－Ⅲ区のⅤ層で検出している。埋土は暗褐色土になる。分類でいうとⅢ類に相当する。



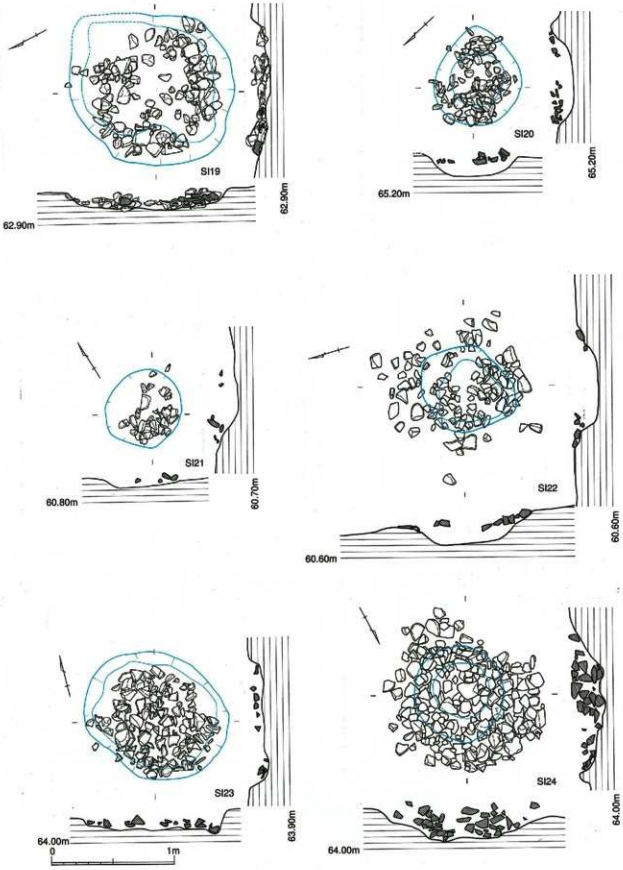
第14図　集石遺構実測図（1）



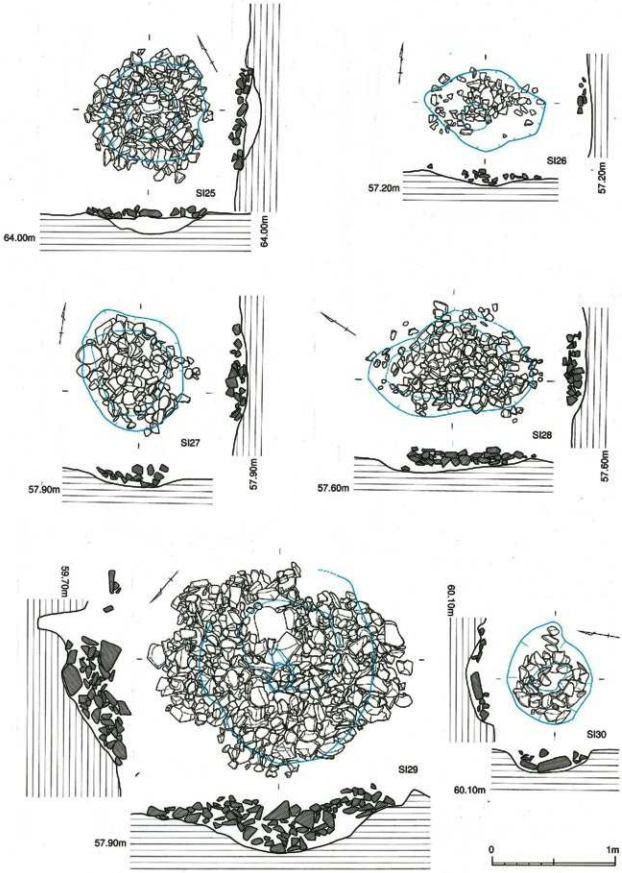
第15図　集石遺構実測図（2）



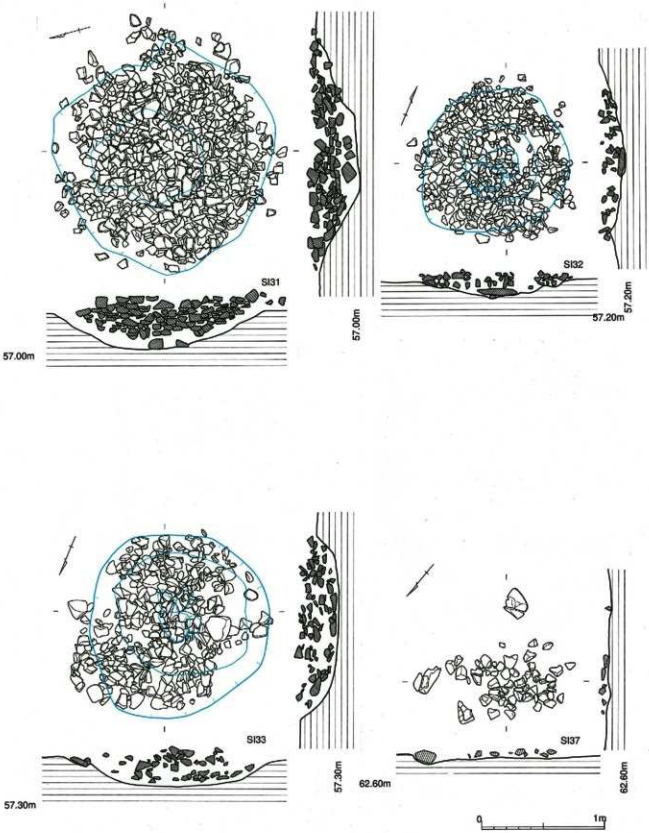
第16図　集石遺構実測図（3）



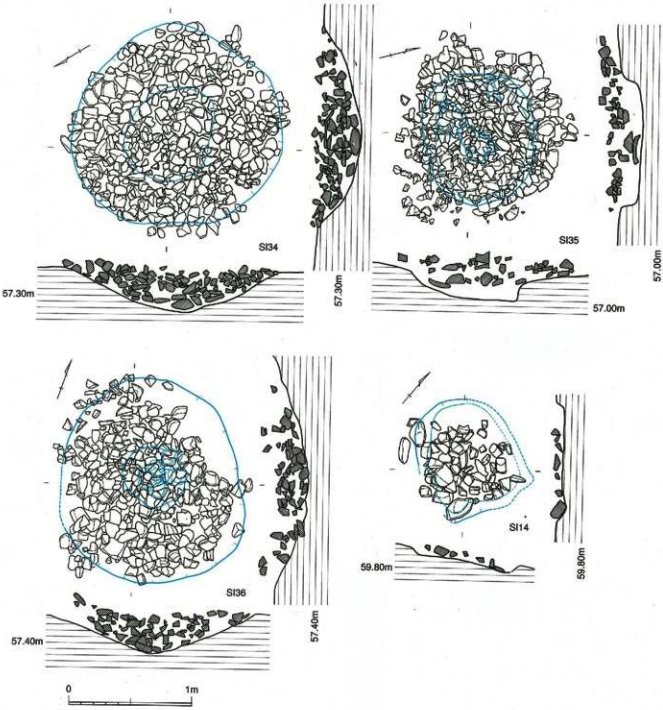
第17図　集石遺構実測図（4）



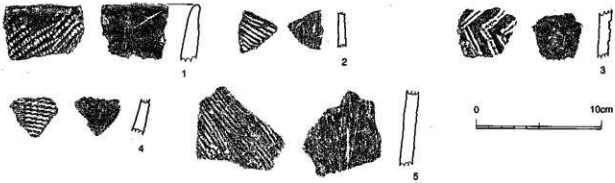
第18図　集石遺構実測図（5）



第19図　集石遺構実測図（6）



第20図　集石遺構実測図（7）



第21図　縄文早期土器実測図（1）

2　遺物

(1)　土器

縄文早期の土器は、縄文後期の土器に比べ大変少ないが、A－Ⅲ区・B－Ⅲ・Ⅳ区で出土した。尚これらの地区では、アカホヤ直下の黒褐色層が残存していた。

文様や形態から7類に分類した。

Ⅰ類（第22図6）～ヘラ状工具による斜め方向の連続刺突文や斜め方向の貝殻条痕文をもつもの。

6は、深鉢の口縁部で内面に横方向のミガキ・斜め方向の丁寧なナデをもっている。胎土としては、1.5mm以下の鋭光沢の金雲母などを含んでいる。

Ⅱ類（第22図7）～貝殻復縁による3から4条の横位の刺突文に貝殻復縁による斜位の刺突文・一部が貝殻刺突による楔形突帯文を持つもの。

7は、深鉢の胴部で内面には丁寧な横ナデが施してある。

Ⅲ類（第22図8～11・13～14）～櫛歯状工具による縦位の連続刺突文やヘラ状工具による羽状文または，貝殻復縁による縦位の条痕や連続刺突文等を持つもの。

8は、深鉢の口縁部で外面に横ナデ内面に横方向のミガキを施してある。9は、深鉢の胴部でヘラ状工具による横方向の羽状文と内外面に丁寧な横ナデが施されている。10も深鉢の口縁部で横方向に5mm幅の3条の沈線文・ヘラ状工具による横方向の羽状文が施されている。また，内面には縦ナデの後斜め方向のミガキが施されている。11は、深鉢の胴部でヘラ状工具による横方向の羽状文が施されている。また、内面は縦ナデの後斜め方向のミガキが施されている。13と14は、ともにナデの後貝殻復縁で縦位に連続刺突文を施すものである。

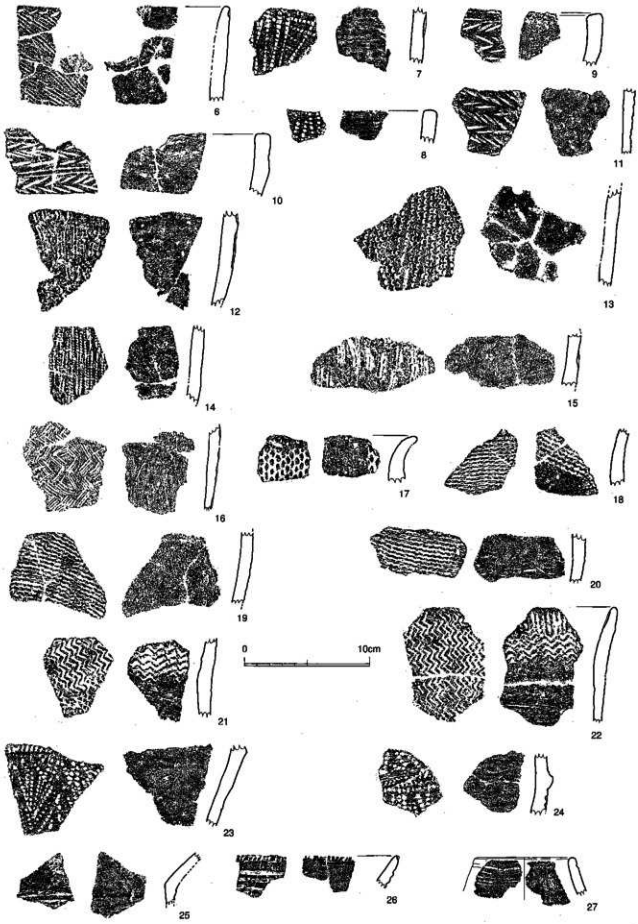
Ⅳ類（第22図12・15～16）～貝殻復縁による縦位の短い条痕文等を施しているもの。

12は、深鉢の胴部で内面に丁寧な横ナデもしくはミガキが施されている。15も深鉢の胴部で縦もしくは横方向のミガキを施している。16は、深鉢の胴部で横ナデの後貝殻復縁による縦方向の櫛歯状文・貝殻による施文・貝殻復縁によって斜め方向の刺突文が施されている。

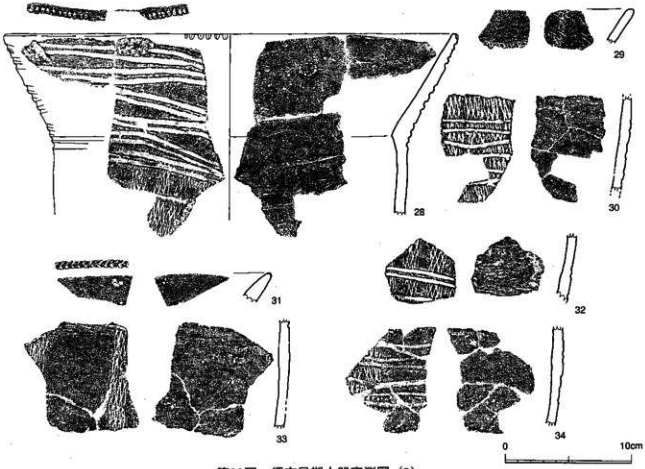
Ⅴ類～押型文として分類されるものの一群である。

Ⅴａ類（第22図17）～楕円押型文に分類されるもの。

17は、深鉢の口縁部で、外面に縦方向の楕円押型文・内面に横方向の楕円押型文がそれぞれ施されている。



第22図　縄文早期土器実測図（2）



第23図　縄文早期土器実測図（3）

Ｖｂ類（第22図18～22）～山形押型文に分類されるもの。

18は、深鉢の胴部で、外面に極浅い山形押型文が施され、内面には山形押型文と丁寧なナデが施されている。19も深鉢の胴部で横方向に極浅い押型文が施されている。内面に縦ナデが施されている。20は、深鉢の胴部で横方向の極浅い山形押型文である。21は、深鉢の胴部で外面に縦方向の山形押型文で内面には横方向の山形押型文や横ナデ・もしくは削りの後横ナデが施してある。22は、深鉢の胴部で外面に縦方向の山形押型文を施し、内面に横ナデや連続短沈線文を施している。

Ⅵ類（第22図23～24）～櫛歯状や鋸歯状の刺突文がみられるものの一群である。

23は、深鉢の胴部で突帯の上下両サイドに連続押圧刻み・貝殻復縁による斜め方向の複合鋸歯文状の刺突文が施してある。内面は斜め方向のヘラミガキである。24も深鉢の胴部で外面に櫛歯状工具による斜位の刺突文・横方向の貝殻条痕文・突帯の上に櫛歯状工具による斜位の刺突文・櫛歯状工具による横位の刺突文・縦位の刺突文が施されている。内面には、横方向のミガキがみられる。

Ⅶ類（第22・23図25～34）～棒状工具・ヘラ状工具による凹線や沈線または網目状の撚糸文などが施されている一群である。

25は、深鉢の胴部で外面に棒状工具による横方向の浅い凹線文が施され、内外面に横ナデが施されている。26は深鉢の口縁部で外面に口唇部にヘラ状工具による連続押圧刻み・棒状工具によ

第３表　縄文早期土器観察表

図面番号	実測番号	出土位置	器種	部位	文様及び調整 外面	文様及び調整 内面	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土
1	736	SI32-1	深鉢	口縁部	斜位の撚糸文	ヘラナデ・横ナデ・撚糸が見られる。	橙	橙	良好	微細な白色・黒色の鉱光沢・1mm～2mm大の黒色・鉱光沢のある灰白色の鉱物粒を含む。
2	735	SI32	深鉢	胴部	斜め方向の放射筋のはっきりした貝殻条痕文	縦方向の削り	浅黄橙	浅黄橙	良好	微細な無色の鉱光沢のある白色・黒色の鉱物粒を含む・1mm大の黒く鉱光沢のある1mm大の無色透明の鉱物粒を含む。
3	737	SI26-1	深鉢	胴部	2本単位の棒状工具による櫛描条沈線文・横ナデ	横ナデ	にぶい橙	黒褐	良好	微細な白色・無色透明な1mm大位の灰白色・白色の鉱物粒を含む・2mm大の褐色の雲片を含む。・0.5mm～2.5mmの黒雲母を含む。
4	741	SI27-1	深鉢	口縁付近	横方向の山形押型文	縦斜め方向のナデ	褐灰	明黄褐	良好	1.5mm以下の黒色鉱光沢の鉱物粒・1mm以下の白色半透明の鉱物粒を含む。
5	742	SI35-1	深鉢	底部付近	斜め方向の貝殻条痕文	縦方向の削り	にぶい黄橙	明黄褐	良好	2mm以下の白色鉱光沢の鉱物粒・2mm以下の灰褐色の角の丸い岩片を含む。
6	770	B-IV類 層-81	深鉢	口縁部	ヘラ状工具による斜め方向の連続刺突文・斜め方向の貝殻条痕文	横方向のミガキ・斜め方向のナデ	橙	にぶい黄橙	良好	1.5mm以下の鉱光沢の金雲母を含む。
7	760	B-Ⅰ・4	深鉢	胴部	貝殻腹縁による斜め方向の刺突文・ヘラ状工具による斜位の刺突文・一部が貝殻刺突による楕形突帯の盛り出し状に盛り上がる。	丁寧な横ナデ	橙	にぶい黄橙	良好	0.5mm～2mm大の白色～黄色味～褐色の鉱物粒を含む・1mm大の金色の黒雲母を含む。
6	764	B-Ⅰ・5	深鉢	口縁部	櫛歯状工具による縦位の連続刺突文・横ナデ	横方向のミガキ	橙	にぶい橙	良好	2mm～3mm白色半透明・微細～1.5mm白色～褐色明鉱物粒を多く含む。
9	766	B-IV類 層-66	深鉢	胴部	ヘラ状工具による横方向の羽状文・丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ・横ナデ	橙	にぶい黄橙	良好	微細～2mm大の灰白色で角がある岩片を多量に含み、微細から1mmの無色透明な鉱物粒と1.5mm～2mmの金色の黒雲母を少量含む。
10	769	B-IV類 層-66	深鉢	口縁部	横方向に5mm間幅の3条の沈線文・ヘラ状工具による横方向の羽状文	縦ナデの後、斜め方向のミガキ	橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の灰白色で不定形な岩片・微細な白色半透明の鉱物粒
11	768	B-IV類 層-66	深鉢	胴部	ヘラ状工具による横方向の羽状文	縦ナデの後、横方向のミガキ	橙	灰黄	良好	2mm以下の白色で不定形な岩片・微細～1mm大の黒色・透明な鉱物粒
12	759	A-III V 層-1	深鉢	胴部	横ナデの後、貝殻腹縁による縦位の短い条痕文	丁寧な横ナデもしくは、ミガキ	橙	灰黄褐	良好	微細～3mm大の白色～半透明・微細は、やや黄色味のある鉱物粒を多く含む・微細～3mm大の金色の黒雲母も含まれている。
13	762	B-I-2144	深鉢	胴部	縦方向の貝殻腹縁による縦位の無文帯区画間を斜位の連続刺突文施	斜め方向のミガキ・斜め方向の粗いナデ	橙	にぶい黄橙	良好	微細～2mm大の白色～白色不透明・1mm前後の黄色味の鉱物粒を多く含む。
14	761	B-Ⅰ・4	深鉢	胴部	ナデの後貝殻腹縁による縦位の連続刺突文	横ナデ	橙	にぶい黄橙	良好	微細～2mm大の灰褐・褐色・2mm大の黒色鉱光沢の鉱物粒を多く含む。
15	739	A-III D-1	深鉢	胴部	粗いナデの後、貝殻腹縁による縦位の短い条痕文	荒もしくは、横方向のミガキ	橙	橙	良好	微細～2mm大（微細最多）の金雲母1mm～4mm大の白色不透明の鉱物粒・やや黄色味の粒・チャートの透明感のあるものを含む。
16	738	A-III D-1	深鉢	胴部	横ナデの後貝殻腹縁による縦方向の盛線状文・貝殻による強文・貝殻腹縁によって斜め方向の刺突文	縦方向の削りの後上から横ナデ・横方向のミガキ縦方向のミガキ	明褐	橙・黒褐	良好	1mm～1.5mmの無色透明・黒色鉱光沢で角柱状の鉱物粒・微細～3mm大の灰白色で角のやや丸い岩片を含む。
17	767	B-IV類 層-418	深鉢	口縁部	縦方向の楕円押型文	横方向の楕円押型文・横ナデ	橙	黒褐・にぶい黄橙	良好	微細～1mm大の黒色鉱光沢の角柱状の鉱物粒を多量に含み・微細～0.5mm大の黒色透明の鉱物粒・1.5mm～2．5mmの灰色や褐色の角のやや丸い岩片を少量含む。
18	番外2	A-III	深鉢	胴部	ごく浅い山形押型文	山形押型文・丁寧なナデ	明黄褐	にぶい黄橙	良好	1～2mm大の白色透明・黒色で光沢のある微細な黒色・白色の鉱物粒を含む。
19	740	A-III D-1	深鉢	胴部	横方向に高低さの小さい山形押型文	縦ナデ	橙	黄褐	良好	1mm～3mm大（1mm大最多）の黒色鉱光沢で角柱状・1mm～3mm大（1mm大最多）1mm大の白色不透明の鉱物粒・2mm大の赤褐色の角が丸い岩片を含む。
20	757	A-III V 層-9	深鉢	胴部	横方向の極浅い山形押型文	丁寧な横ナデ	橙	にぶい黄橙	良好	1～2mmの白色不透明の岩片・1mm大で2mm～3mmの黒色ガラス質の鉱物粒を多く含む。
21	758	A-III V 層-18	深鉢	胴部	縦方向の山形押型文	横方向の山形押型文・横ナデもしくは、間り の後横ナデ	橙	黒褐	良好	微細～1mm大の黒色の鉱光沢の鉱物粒を含む・1mm～2mm大の褐色及び灰色の岩片を含む。
22	756	A-III f・4	深鉢	口縁部	縦方向の山形押型文・右の方に円形の補修孔有り	横ナデ・連続刺突絡文・横方向の山形押型文	橙	黒褐	良好	微細～1mm大の黒色鉱光沢の角柱状の鉱物粒を多量に含み・微細～0.5mm大の黒色透明の鉱物粒・1.5mm～2．5mmの灰色や褐色の角のやや丸い岩片を少量含む。黒色の鉱光沢の鉱物粒を多く含む・1mm～2mm大の褐色及び灰色の岩片を少く含。
23	763	B-Ⅰ・4	深鉢	胴部	突帯の上下両サイドに連続押圧刻み・貝殻腹縁による斜め方向の楕円盛書文状の刺突文	斜め方向のヘラミガキ	橙	にぶい黄橙	良好	1mm～2mm大白色半透明・微細～2mm大の白色・橙色・褐色の鉱物粒・0.5mm～1mm大の金色の黒雲母を含む。
24	765	B-Ⅰ・4	深鉢	胴部	櫛歯状工具による斜位の刺突文・横方向の貝殻条痕文・突帯の上に櫛歯状工具による斜位の刺突文・櫛歯状工具による楕位の刺突文・縦位の刺突文	横方向のミガキ	橙	にぶい褐・黒	良好	微細～1mm前後の無色透明な鉱物粒・微細な金色の黒雲母・微細～2mm前後の褐色の岩片を含む。
25	751	B-IV X II 層-114	深鉢	胴部	棒状工具による横方向の浅い沈線文・横ナデ	横ナデ・間りぎみの横ナデ	橙	黄橙	良好	1mm～2mm大の無色透明・1mm～2mm大の黒色鉱光沢で角柱状・1mm大の黒色鉱光沢の鉱物粒・微細～1mm大の白い粒・1.5mm大の褐色の角が丸い岩片を含む。
26	750	B-IV X II 層-41	深鉢	口縁部	口唇部にヘラ状工具による連続押圧刻み・棒状工具による沈線文	丁寧な横ナデ	橙	にぶい橙	良好	微細な黒色・白色・透明な鉱物粒を含む。

第３表　縄文早期土器観察表

図版番号	実測番号	出土位置	器種	部位	文様及び調整 外面	文様及び調整 内面	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土
27	749	B-Ⅳ・Ⅴ Ⅱ層-114	深鉢	口縁部	棒状工具による浅い横走沈線文・3～4条の浅い沈線文・横ナデ	横ナデ	橙	浅黄	良好	微細な白色・黒色・1mm大の無色透明の鉱物粒を含む。
28	747	B-Ⅳ Ⅱ層-32	深鉢	口縁部～胴部	棒状工具による連続押圧文・沈線文・横方向のナデ・網目状の撚糸文	丁寧な横ナデ	橙	にぶい黄橙	良好	1mm～2mm大の黒の角柱状の粒・微細～1.5mmの黒・金の光沢・白色半透明の粒・微細～1mm前後の白色の不透明・やや黄色味・黒・金の粒を含む。
29	755	B-Ⅰ	深鉢	口縁部	横方向のヘラ・ミガキ	横ナデ・斜め方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	良好	1mm大の白色不透明の鉱物粒を含む・1mm大の褐色及び灰色の岩片を含む。
30	752	B-Ⅳ Ⅱ Ⅱ層5	深鉢	胴部	ナデの上に横方向の浅い凹線文・縦位の網目状の撚糸文	斜め方向の削りの後、横ナデ	橙	浅黄・浅黄	良好	微細～2mm大（1mm大最多）の無色透明。黒色鋭光沢の鉱物粒を含む。
31	746	B-Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	深鉢	口縁部	ヘラ状工具によるハの字状の連続押圧刻み	横ナデ	浅黄	浅黄	良好	微細～1mm大の黒色と黄色味のある鉱物粒を含む・微細の乳白色及び灰色の岩片を含む。
32	753	A-Ⅱn-3トレ	深鉢	胴部	横方向の浅い沈線文・区画のない縦位の網目状の撚糸文・斜め方向のナデ	横方向の削り	橙	浅黄橙・灰黄褐	良好	1mm～2mm大の無色透明・1mm大の白色不透明・1.5mm大の黒色鋭光沢で角柱状の鉱物粒を含む。
33	754	B-Ⅳ 層-8	深鉢	胴部	横ナデ・縦方向に二列の撚糸文	横ナデ・横ミガキ	浅黄	浅黄	良好	微細で黒色鋭光沢の鉱物粒を含む。微細の乳白色・灰色の岩片を含む。
34	748	B-Ⅳ Ⅱ Ⅱ層-15	深鉢	胴部	横ナデ・棒状工具による3条の横走沈線文・縦位の網目状の撚糸文・	丁寧な横ナデ	橙	浅黄	良好	微細な白色・黒色・透明で光沢のある1mm大の無色透明・黒色で光沢のある細長い鉱物粒を含む。

る沈線文を施している。内面は丁寧な横ナデが施されている。27は、棒状工具による浅い横走沈線文・3～4条の浅い沈線文が施されている。また、内外面には横ナデが施されている。28は、深鉢の口縁部から胴部にかけてのもので棒状工具による連続凹圧文・沈線文・横方向のナデ・網目状の撚糸文が施されている。内面には丁寧な横ナデがみられる。29は、深鉢の口縁部で外面に横方向のヘラ・ミガキ内面に横ナデや斜め方向のナデが施されている。30は、深鉢の胴部で外面はナデの上に横方向の浅い凹線文・縦位の網目状の撚糸が施されている。内面は、斜め方向の削りの後横ナデを施している。31は、深鉢の口縁部で外面にヘラ状工具によるハの字状の連続押圧刻みを持っている。内面は横ナデである。32は、深鉢の胴部で外面に横方向の浅い沈線文・区画のない縦位の網目状の撚糸文と斜め方向にナデが施されている。内面には横方向の削りがみられる。33は、深鉢の胴部で外面に縦方向に二列の撚糸文と横ナデが施されている。内面は横ナデと横ミガキである。34は、深鉢の胴部で棒状工具による3条の横走沈線文・縦位の網目状の撚糸文が施され、内面には横ナデがみられる。

石器

縄文早期の石器は、全部で１１点ほど検出している。そのうち10点を実測した。

石鏃（第25図１～８）

縄文早期の石鏃は全部で8点ほど出土している。地区別にみるとA－Ⅲ区（２点）・B－Ⅲ区（２点）・B－Ⅳ区（４点）である。

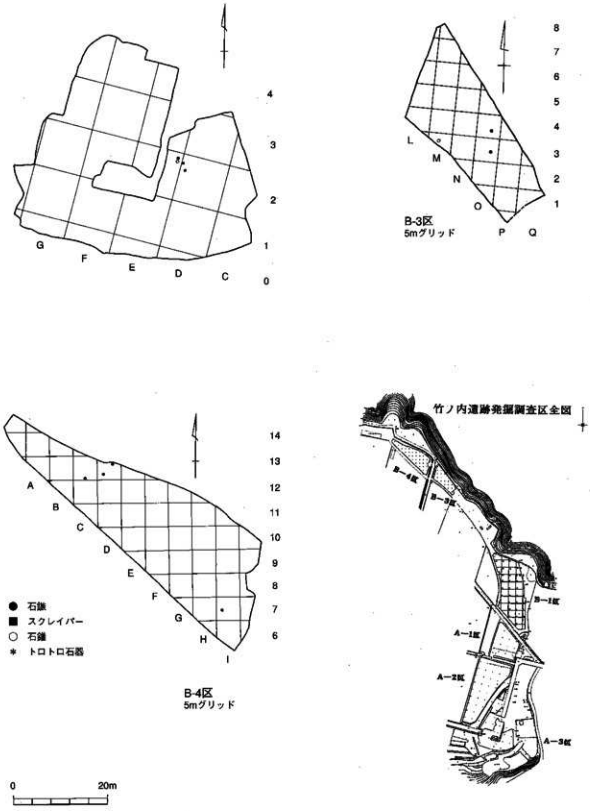
石鏃を形態により次のように分類した。

Ⅰ－ａ類（１）

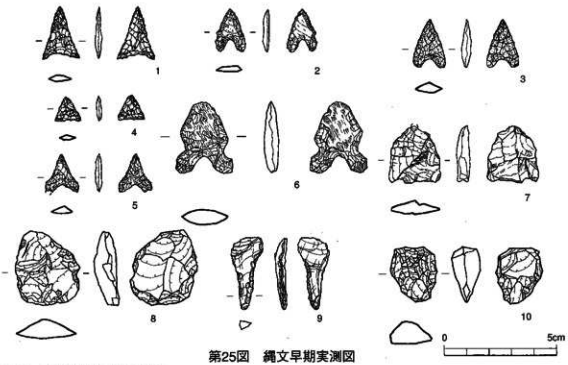
全体形が二等辺三角形を呈する浅い抉りの凹基ものである。資料数は1点である。形状の特徴は最大幅が石器の基部にあるものである。

Ⅰ－b類（２～３）

全体形が二等辺三角形を呈するU字状の抉りの凹基である。資料数は２点である。形状の特徴は２の基部末端がやや尖ったもので、３は基部末端がやや丸みを持つものである。



第24図　遺跡縄文早期石器分布図



第25図　縄文早期実測図

第４表　縄文早期石器計測表

図番号	出土位置	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
1	A-Ⅲ層-7	石鏃	2.296	1.652	0.295	0.5	頁岩	Ⅰ-a
2	B-Ⅳc-13Ⅵ1	石鏃	1.867	1.34	0.259	0.5	頁岩	Ⅰ-b
3	B-Ⅳ層-3	石鏃	2.09	1.419	0.41	0.9	頁岩	Ⅰ-b
4	A-Ⅲ層-3	石鏃	1.096	1.156	0.224	0.2	頁岩	Ⅱ-a
5	B-Ⅳ層-38	石鏃	1.642	1.497	0.291	0.4	頁岩	Ⅱ-b
6	B-ⅣⅩⅡ層-119	トロトロ石器	3.09	2.526	0.615	4.1	チャート	Ⅲ類
7	B-Ⅲ層-12	石鏃	2.46	2.259	0.596	3.5	頁岩	Ⅲ類
8	B-Ⅲ層-38	石鏃	3.1	2.7	0.7	7.9	頁岩	Ⅲ類
9	A-Ⅲ層-5	石錐	3.17	1.3	0.39	1.35	頁岩	
10	A-ⅢE-1	スクレイパー	2.537	2.03	1.12	5.2	頁岩	
11	B-Ⅲ層-58	石錐	1.9	1.1	0.3	0.7	頁岩	

Ⅱ－ａ類（４）

全体形が正三角形を呈する平基のものである。資料数は1点である。形状の特徴は両側縁が急速にすぼまる形で作り出されている。

Ⅱ－ｂ類（５）

全体形が正三角形を呈するＶ字状の抉りを呈する凹基である。資料数は、1点である。形状の特徴は基部の先端が平坦になっていることである。

Ⅲ類（６～８）

Ⅰ・Ⅱ類どちらにも属さないものをここに一括した。そのうち６は、トロトロ石器と呼ばれる異形石鏃である。

石錐（第25図９）

早期の石錐は２点のみである。そのうち1点を図示した。特徴は錐部の作り出しによって、つまみ部と錐部が明瞭に区別されることである。

スクレイパー（第25図10）

早期のスクレイパーは１点のみである。

９は、長軸の端部に急斜度の刃部をもうけたものである。

第３節　縄文時代後期の遺構と遺物

１　遺構

(1) 竪穴住居跡

竹ノ内遺跡では、竪穴住居跡が全部で51軒検出された。内訳は、B－Ⅰ区が48軒と最も多く、A－Ⅰ区が2軒でA－Ⅲ区で1軒検出している。住居跡のほとんどが円形プランで、少量の隅丸方形を含む方形プランを含んでいる。そのほとんどが黒灰色土を埋土としていて検出面が大変浅くなっている。尚、A－Ⅲ区出土の50号住居跡の埋土は黒褐色土であった。切り合いが大変激しく住居の存在期間は、数期に分けられると思われる。

2号住居跡（第28図）

調査区の中間に位置し、楕円形プランを呈する。住居の規模は、262cm×186cmで深さは11cmであった。住居跡内十坑を有していて柱穴も1本みられるが主柱穴が2本柱なのかは確認できていない。埋土は黒灰色土である。出土遺物は、Ⅳ類（3）やⅥ類（２・４・５）やⅩⅡ類（1）がある。

3号住居跡（第29図）

２つの土坑と切り合っている。方形プランを呈する。住居の規模は、長径は556cmで短径は計測不能である。主柱穴は、多くの他の遺構に切られていて不明である。住居跡内土坑は無く、埋土は黒灰色土である。出土遺物は無紋土器（６・10）があり、６は、口唇部に貝殻腹縁刺突文が施されている。10は、口唇部に沈線文を廻らし一部に刻みがある。11は、内面施文でⅢ類に相当する。底部（７・９）は網代底である。

4号住居跡（第32図）

4号住居跡は、5号住居跡を切っている。方形プランを呈する。長径は336cmで短径は切り合いの関係で計測不能である。深さは21cmである。住居跡内土坑は無い。主柱穴は、2本柱と考えられる。埋土は黒灰色である。出土土器は少なくⅣ類と思われる土器（12）1点である。

5号住居跡（第32図）

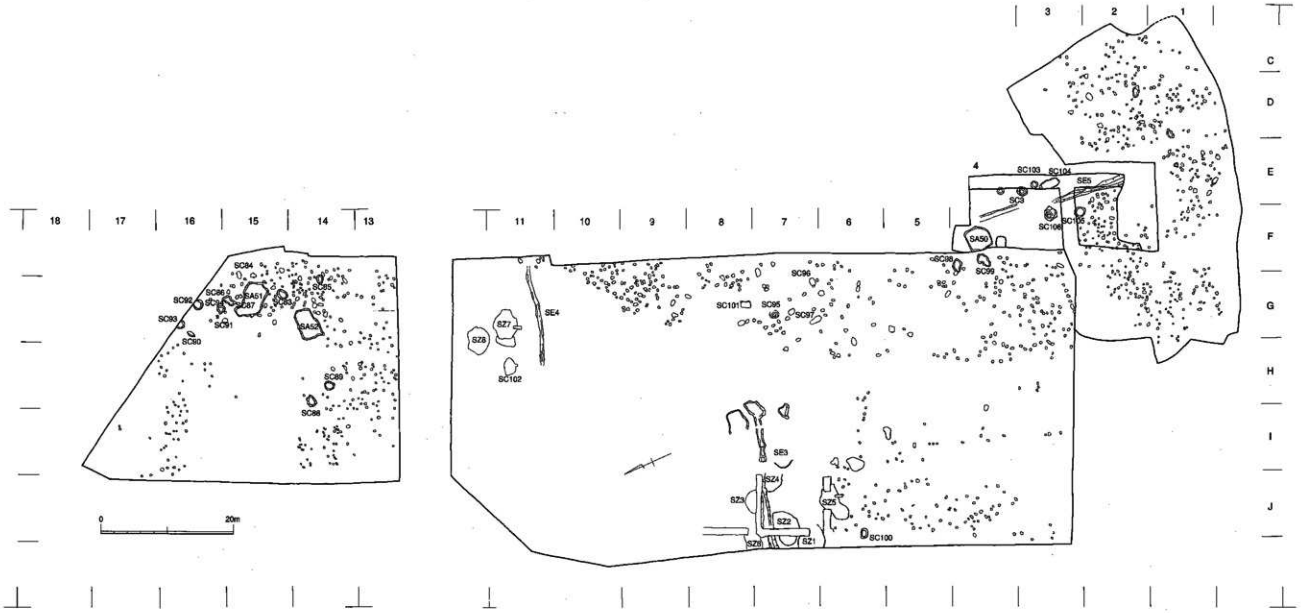
5号住居跡は、4号住居跡に切られている。円形プランを呈する。長径は、226cm×短径254cmの円形プランである。深さは12cmである。主柱穴は、4本柱と考える。また、中央土坑を有している。埋土は黒灰色土である。出土遺物は無い。

6号住居跡（第33図）

6号住居跡は、7号住居跡に切られている。円形プランを呈する。長径は300cm×260cmで深さは17cmを測る。中央土坑を有し、その両端に2本の主柱穴を有している。埋土は黒褐色土である。出土遺物は口縁上部に貝殻腹縁刺突文を施し、下部に凹線文を施したⅠ類に相当する土器（13）、Ⅳ類（14）・Ⅵ類（15）が出土している。

7号住居跡（第33図）

7号住居跡は、6号住居跡を切っている。円形プランを呈する。長径は272cm×240cmで深さは17cmを測る。中央土坑を有している。主柱穴は、1本と考える。埋土は黒褐色土である。出土遺物は口縁部の器形からⅣ類の無文土器（16）、Ⅴ類と思われる土器（17）が出土している。



第26図　遺構分布図（A区）

第27図　遺構分布図（B区）

8号住居跡（第33図）

8号住居跡は、9号住居跡を切っている。円形プランを呈する。長径は、344cm×336cmで、深さは17cmである。主柱穴は、2本と思われる。埋土は黒褐色土である。出土遺物は磨研土器の胴部（18）、Ⅳ類の波状口縁（19・20）が出土している。

9号住居跡（第34図）

9号住居跡は、10号住居跡と8号住居跡に切られている。長径276cmで深さは5cmである。プランは円形プランと考えられる。中央土坑を有している。主柱穴は、切り合いが激しいため1本しか確認できなかった。埋土は黒褐色土である。出土遺物は少なく、片方の端部を刺突した数条痕文の沈線文が特徴の台付皿（21）があり、文様の特徴から（22）と同じようにⅥ類に相当すると思われる。

10号住居跡（第35図）

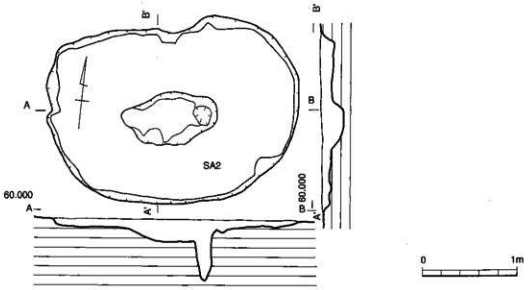
10号住居跡は11号住居跡を切っている。長径304cmで深さは17cmである。出土遺物は、市来式土器と丸尾式土器である。プランは、円形プランと考えられる。主柱穴は、2本柱と考えられる。埋土は黒灰色土である。住居跡内土坑を有している。出土遺物は少なく、Ⅳ類土器（23・24）、Ⅵ類土器（25）が出土している。

11号住居跡（第35図）

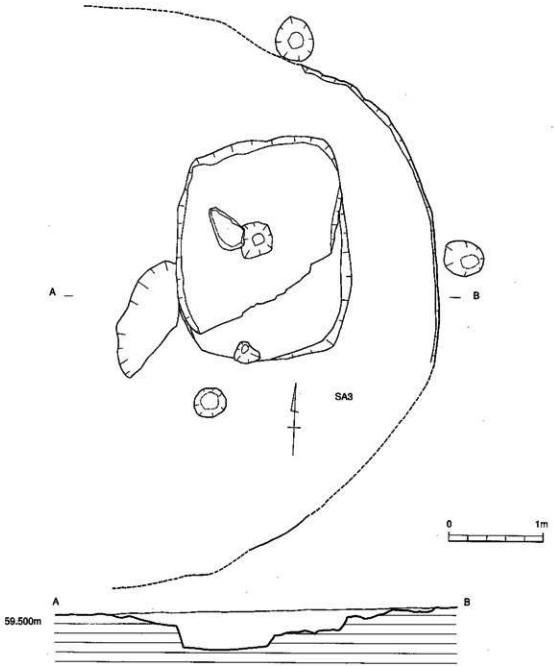
11号住居跡は、14号住居跡と15号住居跡に切られている。長径は316cmで深さは14cmほどである。主柱穴については切り合いが激しいため、中央土坑の1本だけしか確認できていない。プランは、円形プランと思われる。埋土は黒灰色土である。出土遺物は少なくⅣ類（27）、Ⅴ類（26）、Ⅵ類（28）が出土している。

12号住居跡（第36図）

12号住居跡は、13号住居跡に切られている。円形プランを呈する。長径は308cmで深さは32cm



第28図　竪穴住居跡実測図（1）

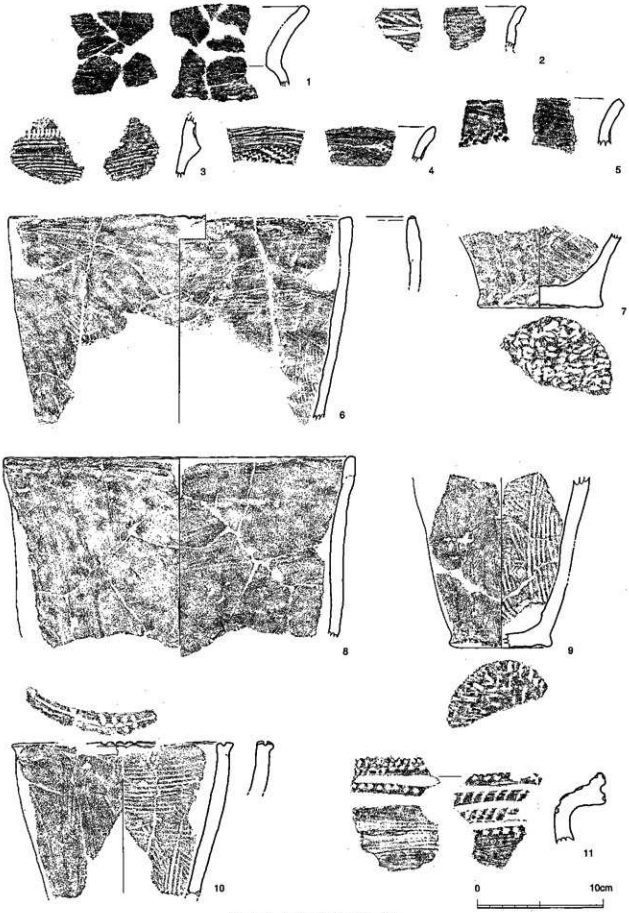


第29図　竪穴住居跡実測図（2）

である。主柱穴は、2本柱と思われる。中央土坑は無く、出土遺物も無かった。埋土は黒灰色である。出土遺物は無い。

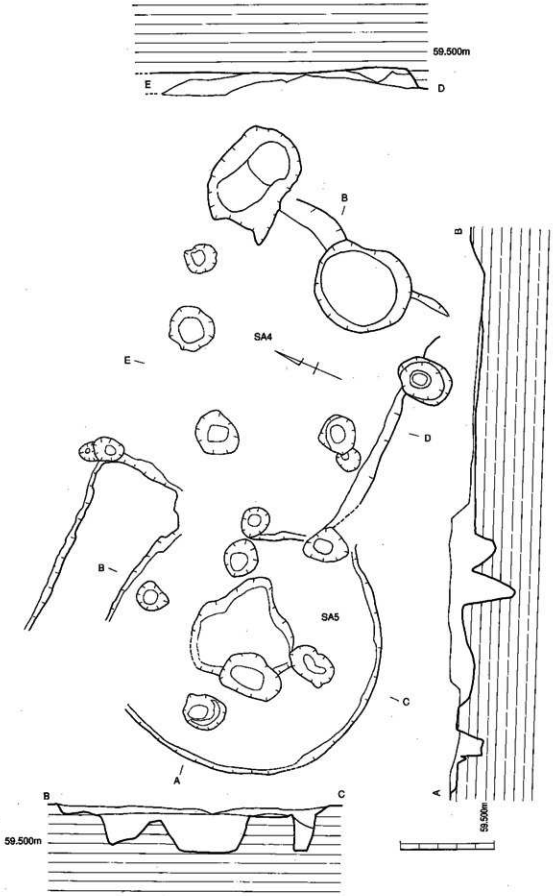
13号住居跡（第36図）

13号住居跡は、12号住居跡を切っている。円形プランと思われる。長径は400cmで短径は348cmで深さは28cmである。中央土坑に2本柱がある。埋土は黒灰色土である。出土遺物は貝殻条痕文土器（29）、Ⅳ類土器（30～36）である。

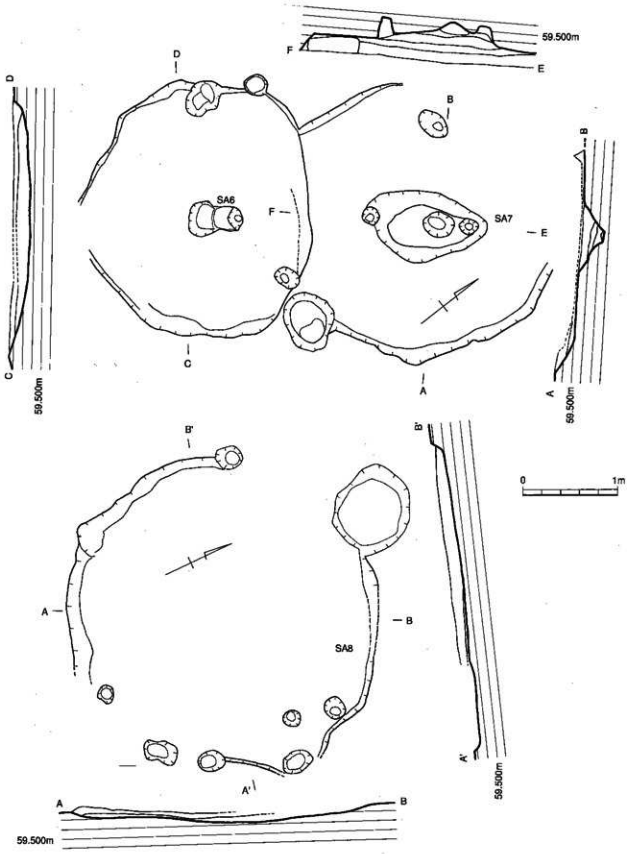


第30図　縄文土器実測図（1）

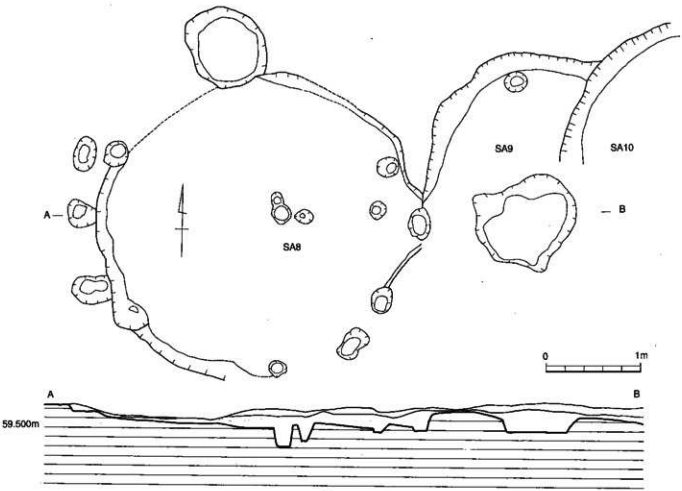
第31図　縄文土器実測図（2）



第32図　竪穴住居跡実測図（3）



第33図　竪穴住居跡実測図（4）



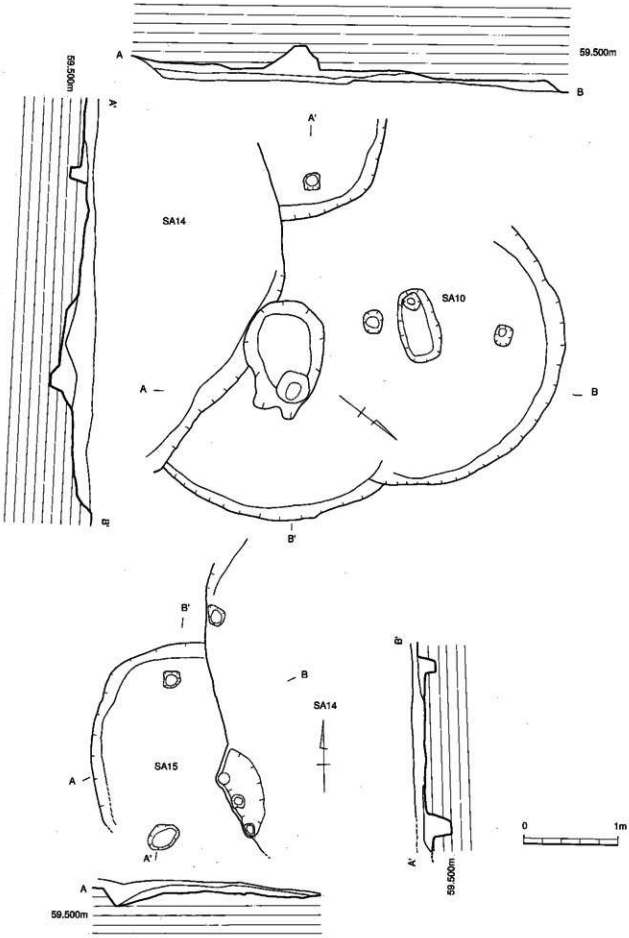
第34図　竪穴住居跡実測図（5）

14号住居跡（第37図）

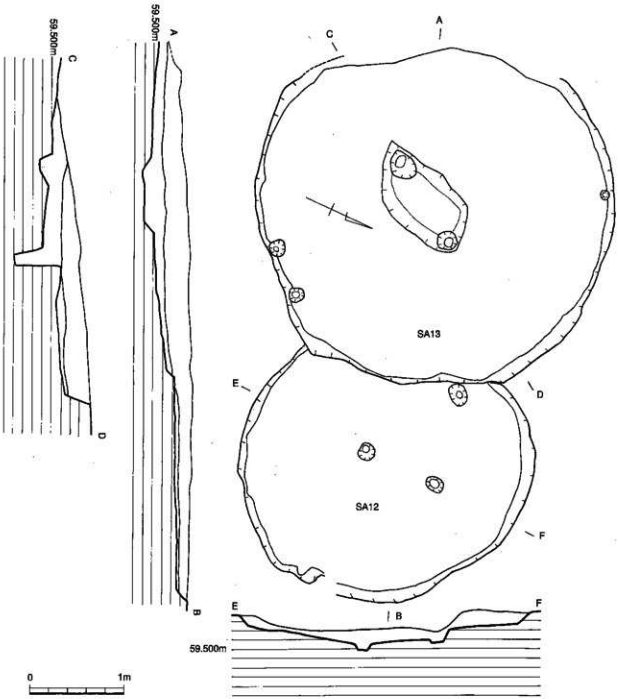
14号住居跡は、15号住居跡と11号住居跡を切っている。円形プランを呈する。長径は588cmで短径は498cmで深さは15cmほどである。中央土坑があり2本柱になっている。埋土は黒灰色土である。出土遺物は多く、口縁部はやや外反し、貝殻腹縁刺突文や沈線文が施されているものでⅡ類aに相当するもの（37）、内外面上位に縄文が施されているもの（38）、外面上位に2条の沈線文を廻らし、内面上位に連続刺突文、短沈線文が施されているもの（39）、Ⅳ類土器（40～49）、Ⅵ類土器（50）、Ⅴ類土器（51）、台付Ⅲ形土器（52）等が出土している。

15号住居跡（第35図）

15号住居跡は、14号住居跡に切られている。隅丸方形プランと考えられる。長径は276cmで切り合いの関係で短径は計測不能である。深さは、16cmほどである。主柱穴は切り合いが激しいため1本しか確認できなかった。出土遺物は少なくⅣ類土器（53･54）、Ⅴ類土器（55）等が出土している。



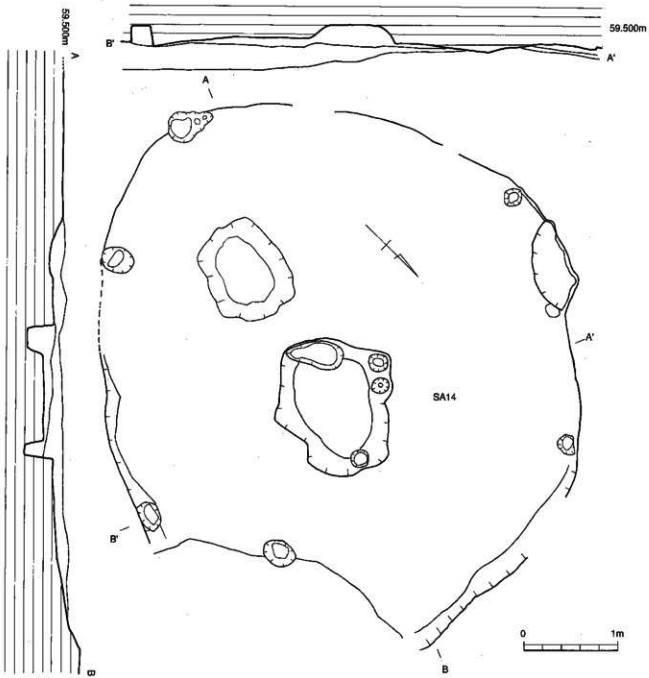
第35図　竪穴住居跡実測図（6）



第36図　竪穴住居跡実測図（7）

16号住居跡（第40図）

16号住居跡は、17号住居跡・18号住居跡・19号住居跡をそれぞれ切っている。円形プランを呈する。長径424cm・短径384cmで深さ16cmである。主柱穴は4本柱と考えられる。中央土坑を有している。出土遺物はⅣ類土器（56～62）、口縁部が内傾する無文土器（63）、磨研土器（64・65）がある。

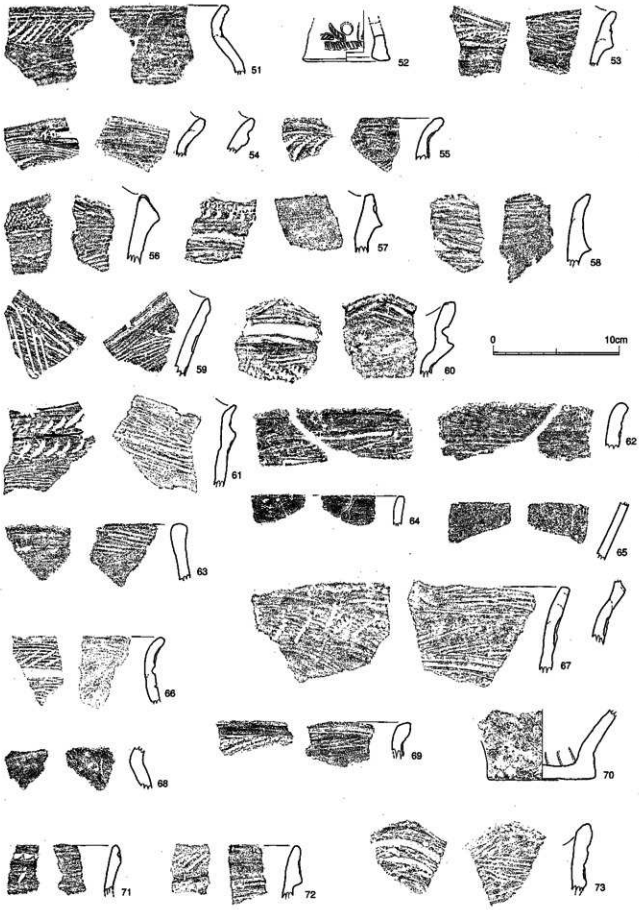


第37図　竪穴住居跡実測図（8）

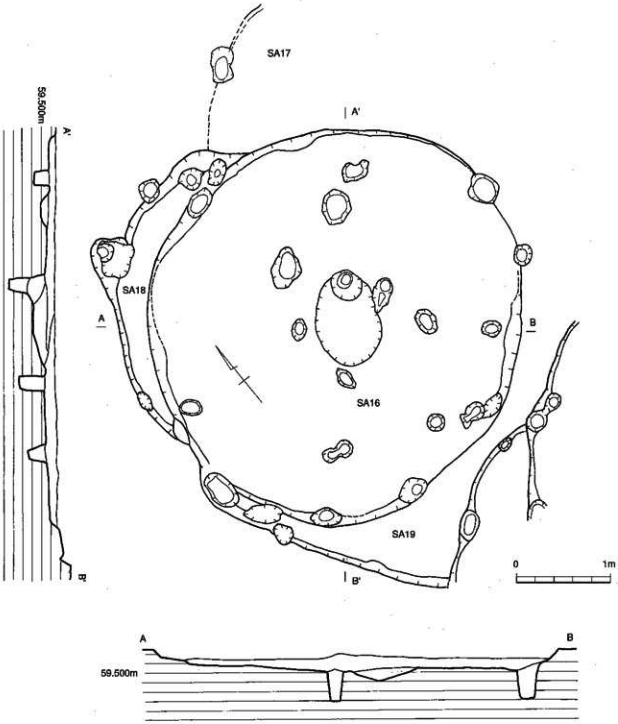
17号住居跡（第40図）

17号住居跡は、16号住居跡と15号住居跡に切られている。円形プランと考えられる。長径は304cmで短径は切り合いのため計測不能である。深さは6cmである。主柱穴は切り合いが激しいために確認できなかった。出土遺物は、Ⅵ類土器（66･67）、Ⅴ類土器（69）、指頭痕のある底部（70）等がある。

第38図　縄文土器実測図（3）



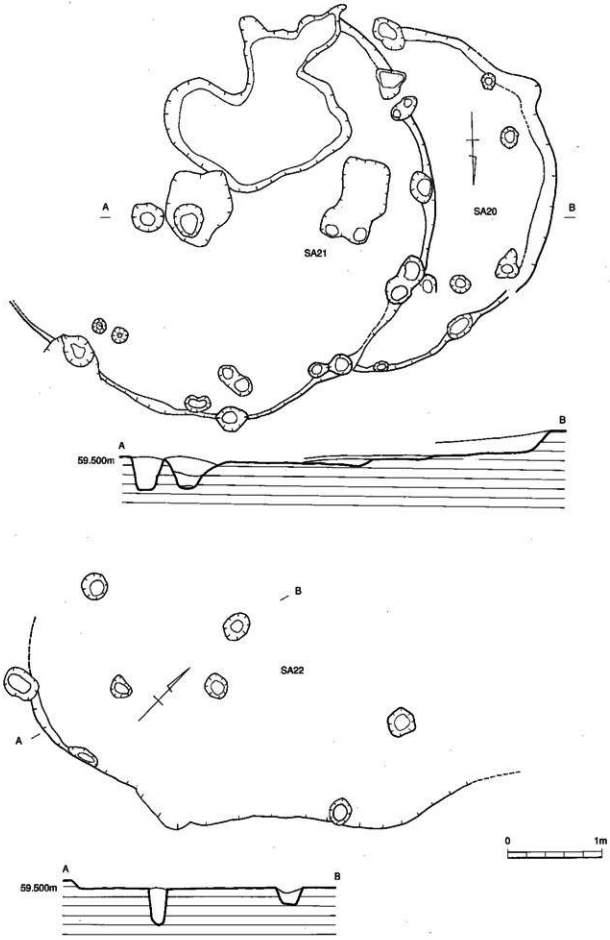
第39図　縄文土器実測図（4）



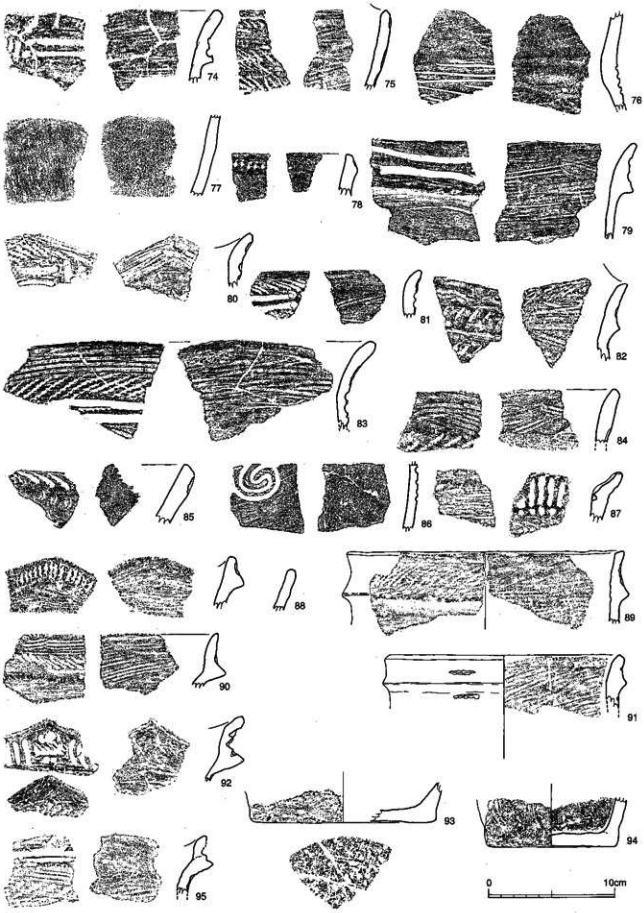
第40図　竪穴住居跡実測図（9）

18号住居跡（第40図）

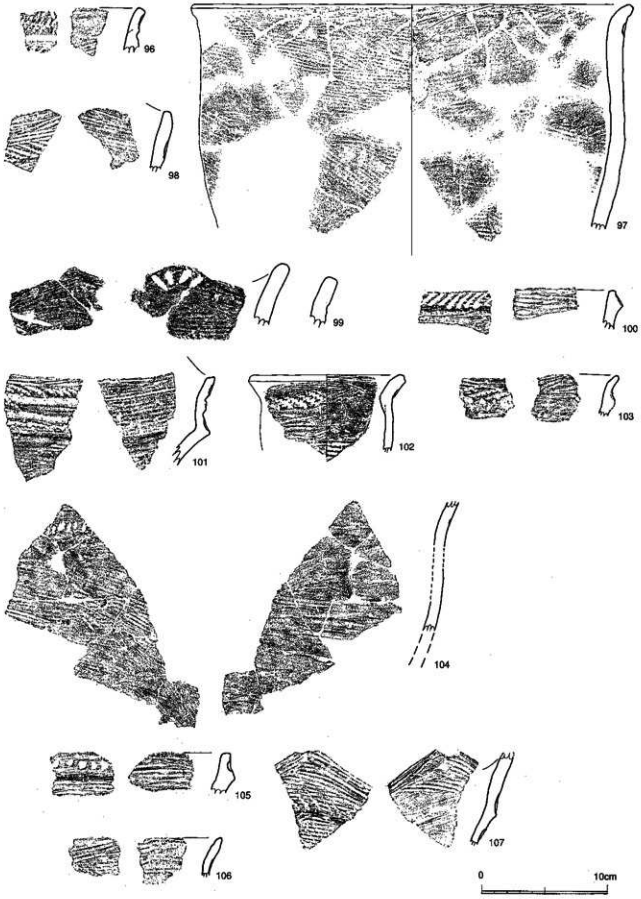
18号住居跡は16号住居跡を切り、17号住居跡に切られているものである。円形プランと考えられる。長径は316cmほどあるが切り合いの程度が大きいので主柱穴などは確認できていない。深さは8cmほどである。遺物は少なく、磨研土器の胴部片（68）が出土している。



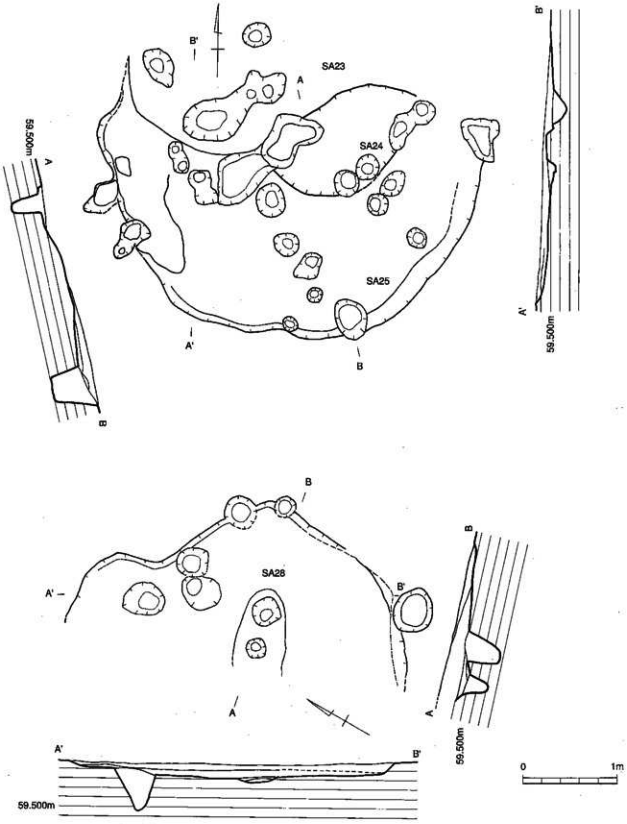
第41図　竪穴住居跡実測図（10）



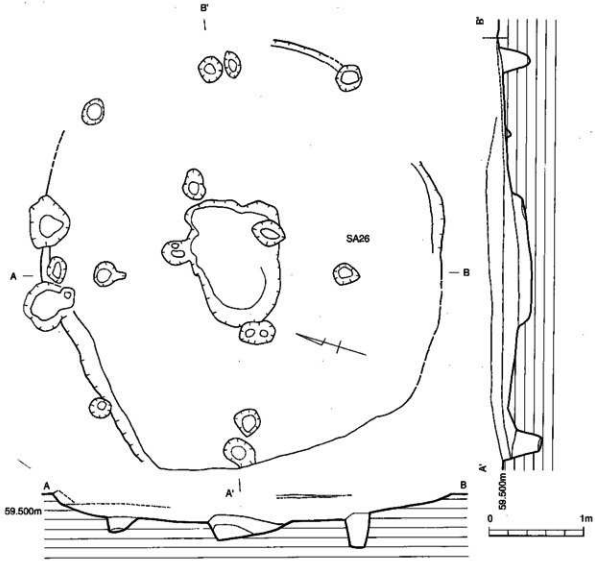
第42図　縄文土器実測図（5）



第43図　縄文土器実測図（6）



第44図　竪穴住居跡実測図（11）



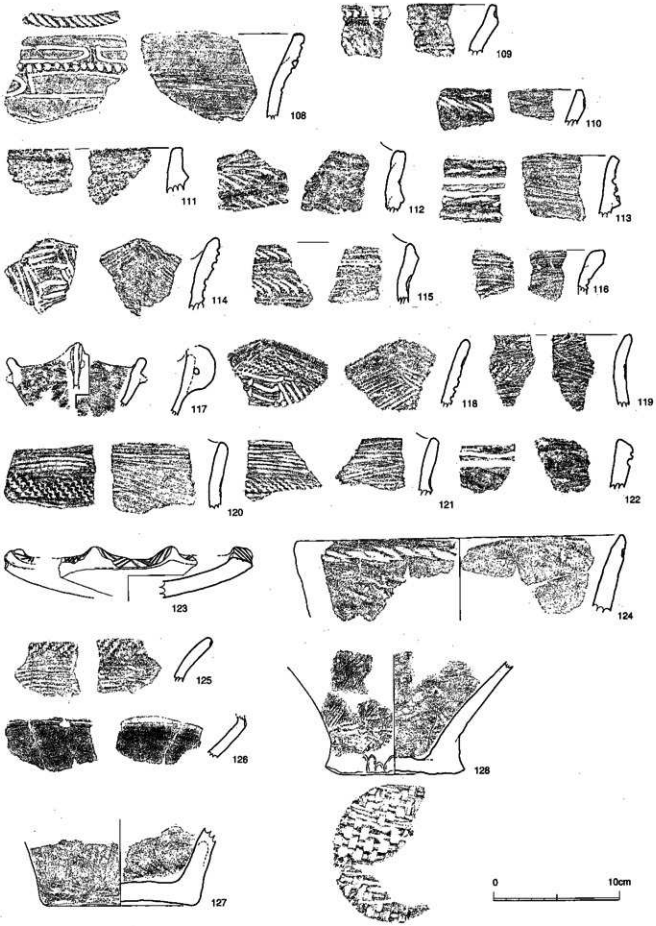
第45図　竪穴住居跡実測図（12）

19号住居跡（第40図）

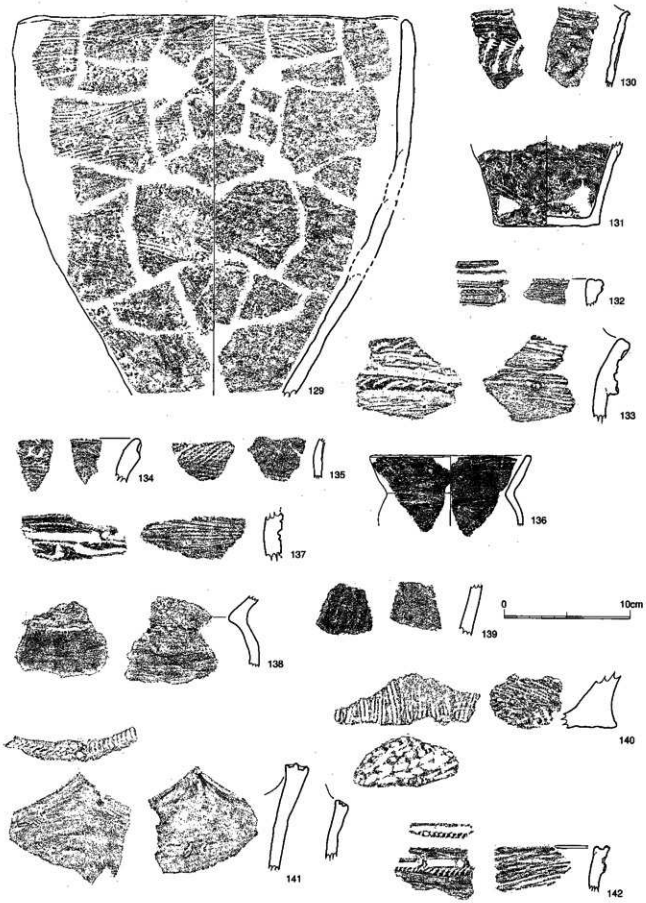
19号住居跡は、16号住居跡と20号住居跡に切られている。方形プランと考えられる。長径が352cmである。深さは11cm程度である。プランは不定形のものである。切り合いの関係で主柱穴は、確認できなかった。遺物は少なくⅣ類土器（71～73）が出土している。

20号住居跡（第41図）

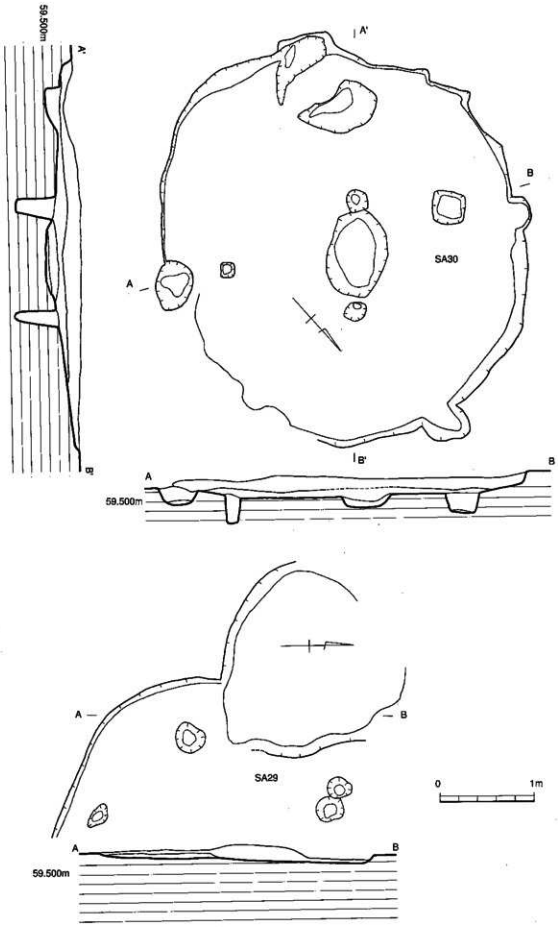
20号住居跡は21号住居跡に切られている。円形プランと考えられる。長径が372cmほどあり、深さは20cmほどである。切り合いの程度が激しいので主柱穴は確認できなかった。出土遺物は、Ⅳ類土器（74）、Ⅵ類土器（75）、施文の特徴からⅦ類に相当する土器（76）、ヘラミガキの磨研土器の胴部片（77）が出土している。



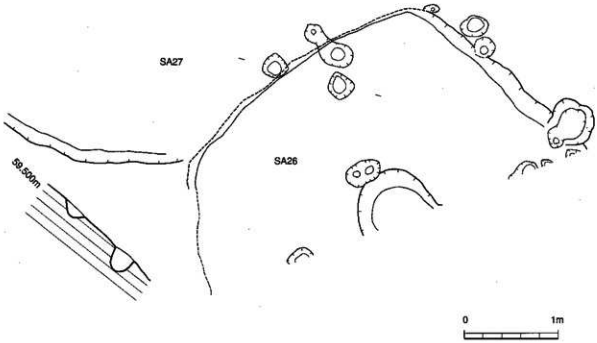
第46図　縄文土器実測図（7）



第47図　縄文土器実測図（8）



第48図　竪穴住居跡実測図（13）



第49図　竪穴住居跡実測図（13）

21号住居跡（第41図）

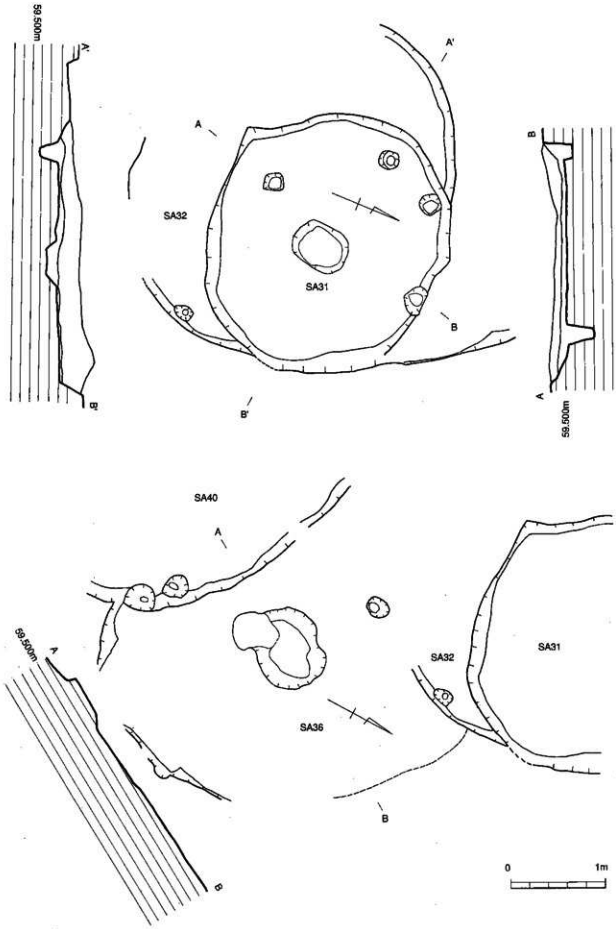
21号住居跡は、23号住居跡と22号住居跡を切っている。長径が460cmで短径が414cmの円形プランで深さが16cmほどある。主柱穴は2本柱と考えられる。不定形ながら中央土坑を有している。埋土は黒灰色である。出土遺物は、Ⅳ類土器（78～82）、Ⅴ類土器（83）、Ⅵ類土器（84・85）、棒状工具による渦巻き状の沈線文間に縄文が施されている磨消縄文土器の胴部片（86）等が出土している。

22号住居跡（第41図）

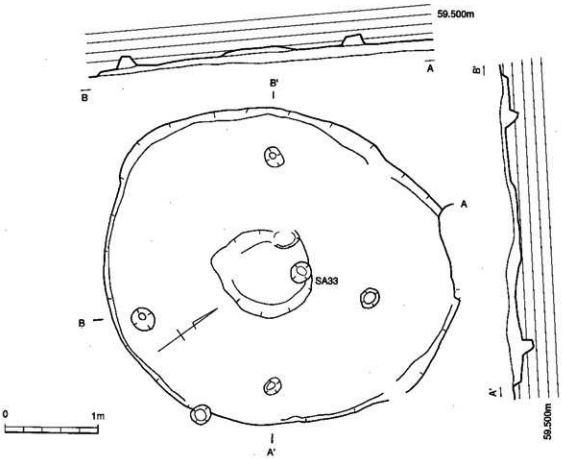
22号住居跡は、21号住居跡と14号住居跡に切られている。長径540cmの円形プランで深さは、10cmである。主柱穴は、２本柱と考えられる。埋土は黒灰色である。出土遺物は、内面施文土器（87）、Ⅳ類土器（88～92・95）、底部（93・94）特に93は、木の葉底である。

23号住居跡（第44図）

23号住居跡は、24号住居跡を切り、21号住居跡に切られている。円形プランと考える。長径は、252cmで短径は切り合いが激しいため計測不能である。主柱穴は、２本柱と考えられる。埋土は黒灰色である。出土遺物はⅣ類と思われる。（96）口縁部上位に横位の貝殻腹縁刺突文を施しているもの（97）、Ⅵ類土器の（98）、波頂部に凹圧刻みがあり、下位に棒状工具による斜方向の沈線文が施されている土器（99）等が出土している。



第50図　竪穴住居跡実測図（15）



第51図　竪穴住居跡実測図（16）

24号住居跡（第44図）

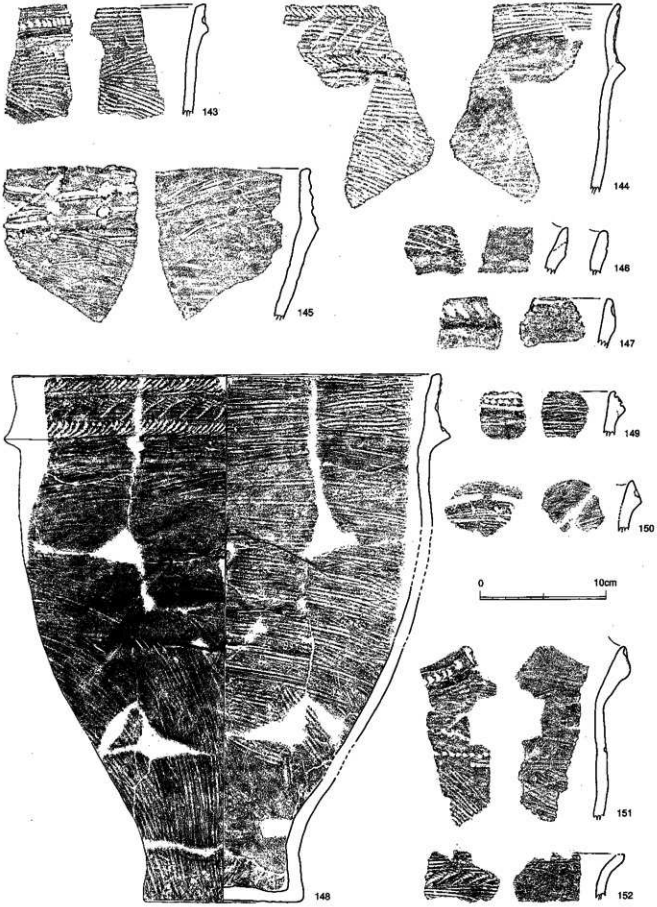
24号住居跡は、25号住居跡を切り、22号住居跡と23号住居跡に切られている。住居の形態は、円形プランと考えられる。長径が184cmで短径は切り合いが激しいために計測不能である。深さは8cmである。埋土は黒灰色土である。出土遺物は少ない。Ⅳ類土器（100・101）Ⅴ類土器（102）である。

25号住居跡（第44図）

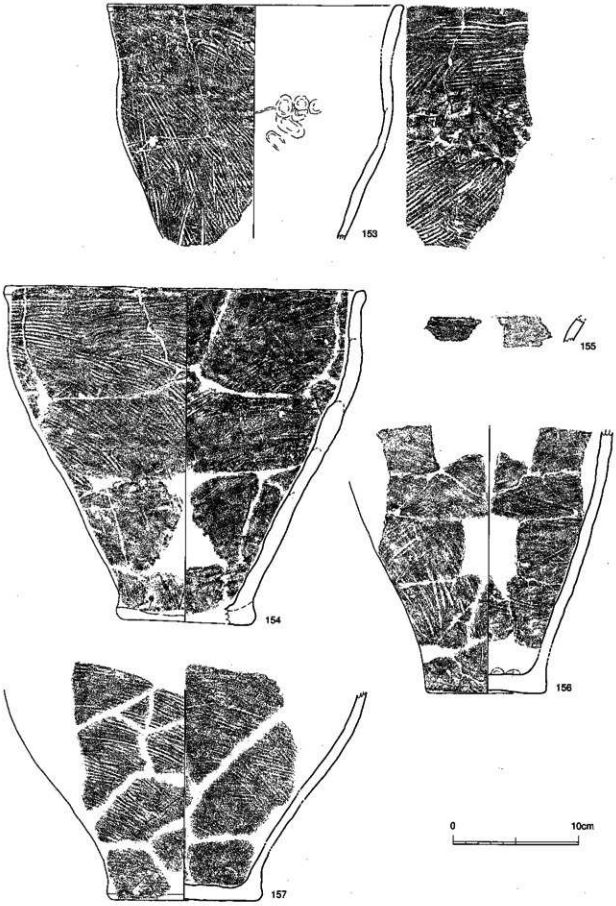
25号住居跡は、23号住居跡・24号住居跡から切られているものである。住居の形態は円形プランである。長径が444cmで切り合いの関係で短径は計測不能である。深さは18cmであった。埋土は黒灰色土である。出土遺物は少なくⅣ類土器（103）が出土している。

26号住居跡（第45図）

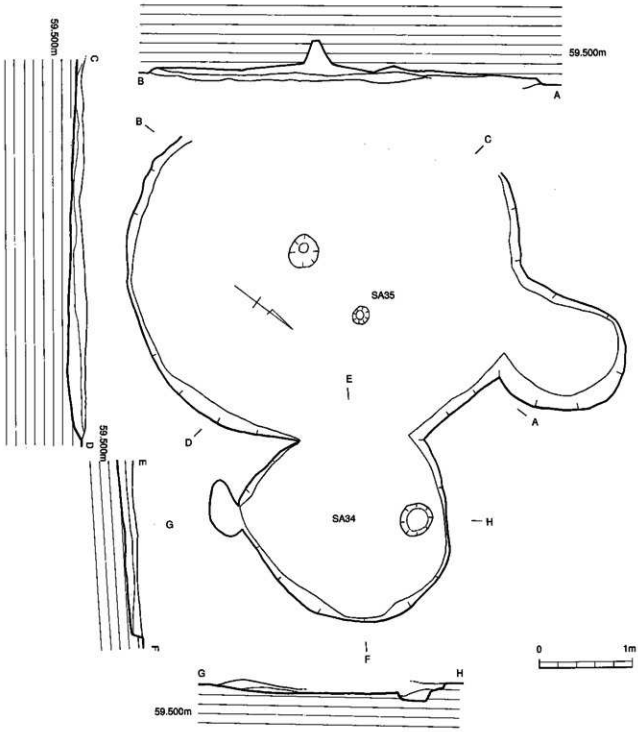
26号住居跡は、27号住居跡を切っている。住居の形態は、円形プランである。長径476cm・短径420cmで深さが31cmほどある。埋土は黒灰色土である。出土遺物は多い。口唇部に斜位の連続凹圧刻み、口縁部に沈線文や刺突文を施したⅡ類に相当すると思われる土器（108）、Ⅳ類土器（109～115）、Ⅴ類土器（116）、焼成前の貫通孔のある貼り付け突起があり、ヘラ状工具による横位の



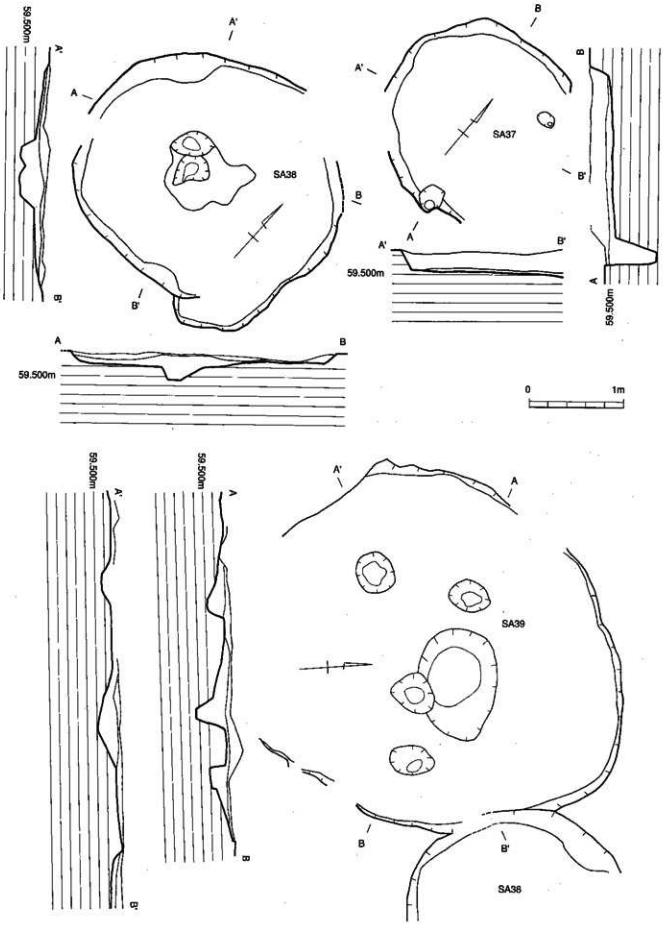
第52図　縄文土器実測図（9）



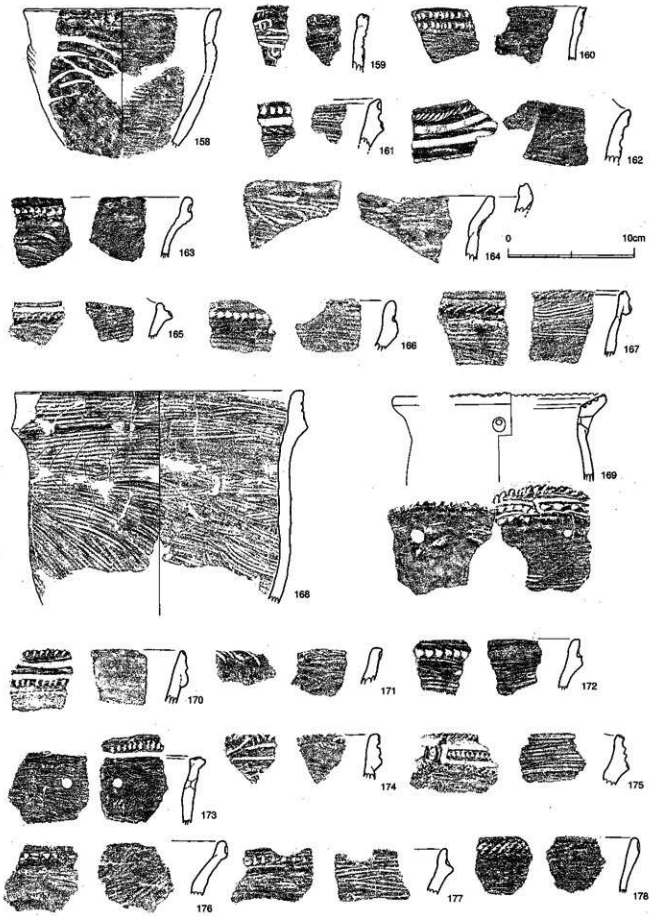
第53図　縄文土器実測図（10）



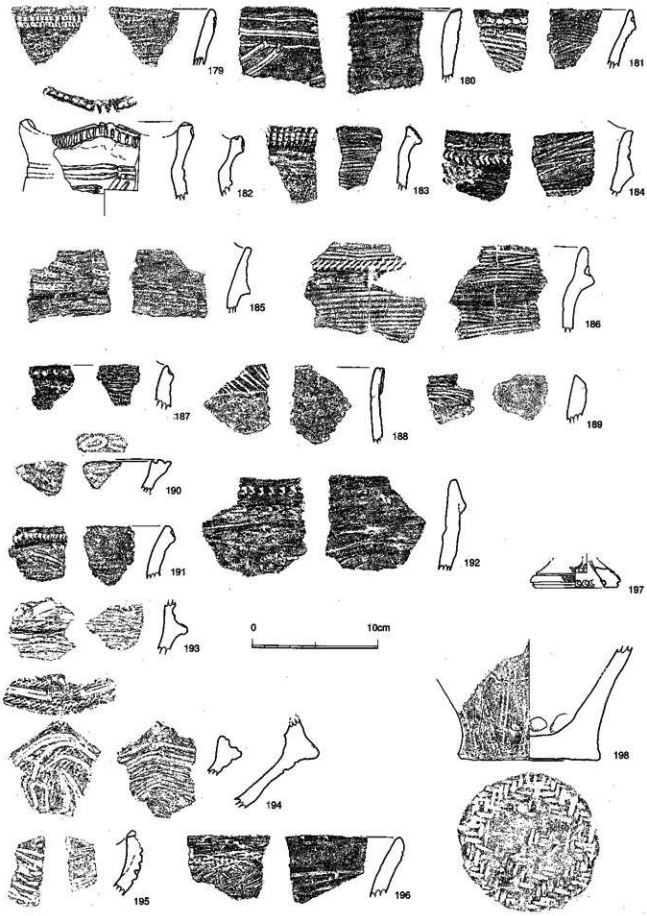
第54図　竪穴住居跡実測図（17）



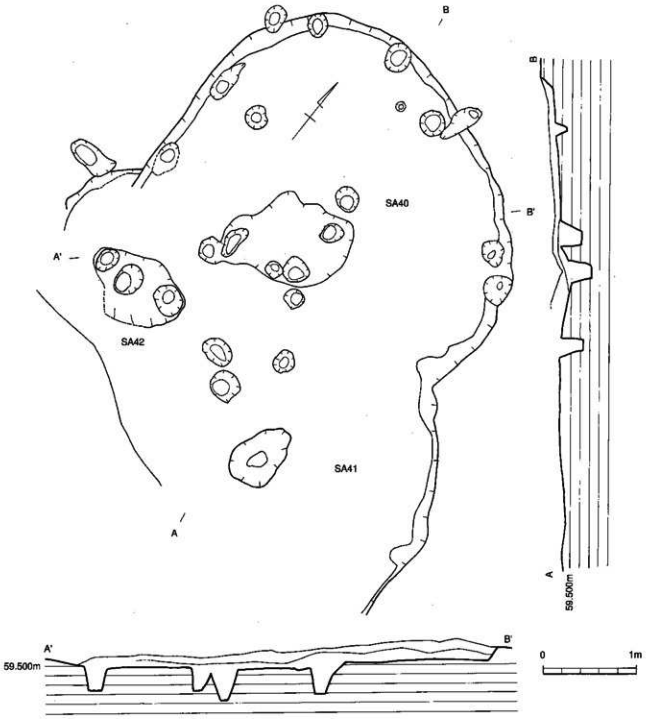
第55図　竪穴住居跡実測図（18）



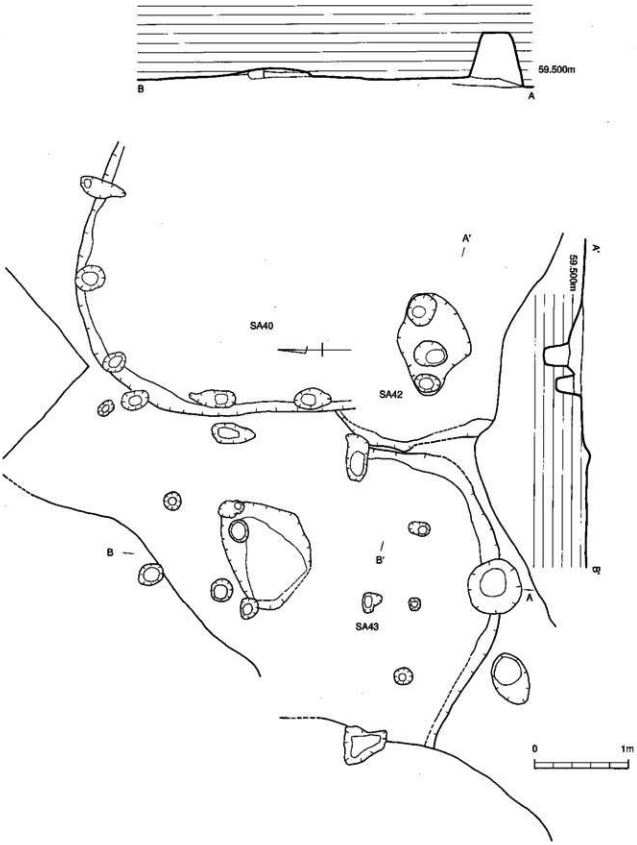
第56図　縄文土器実測図（11）



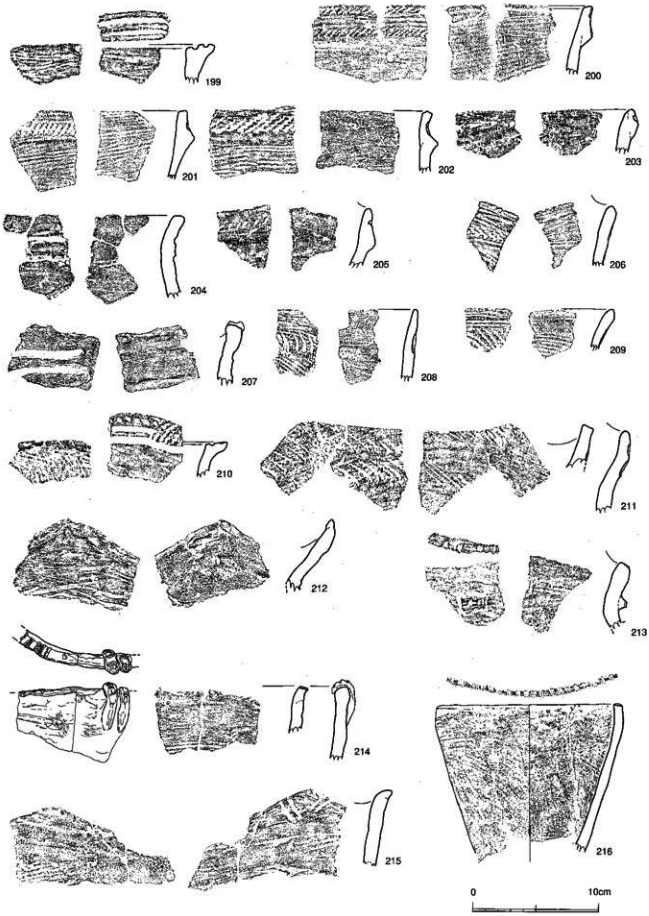
第57図　縄文土器実測図（12）



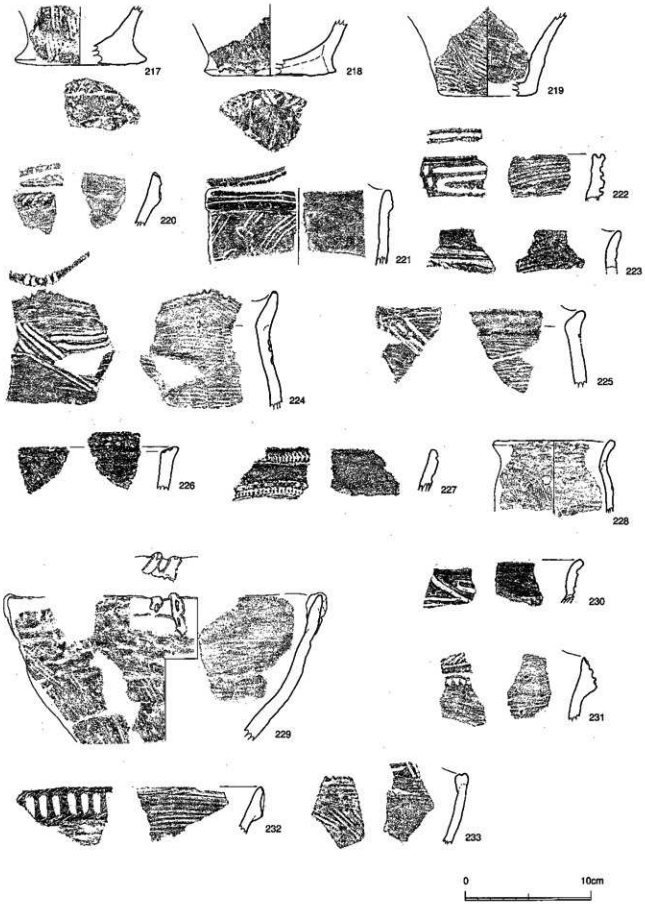
第58図　竪穴住居跡実測図（19）



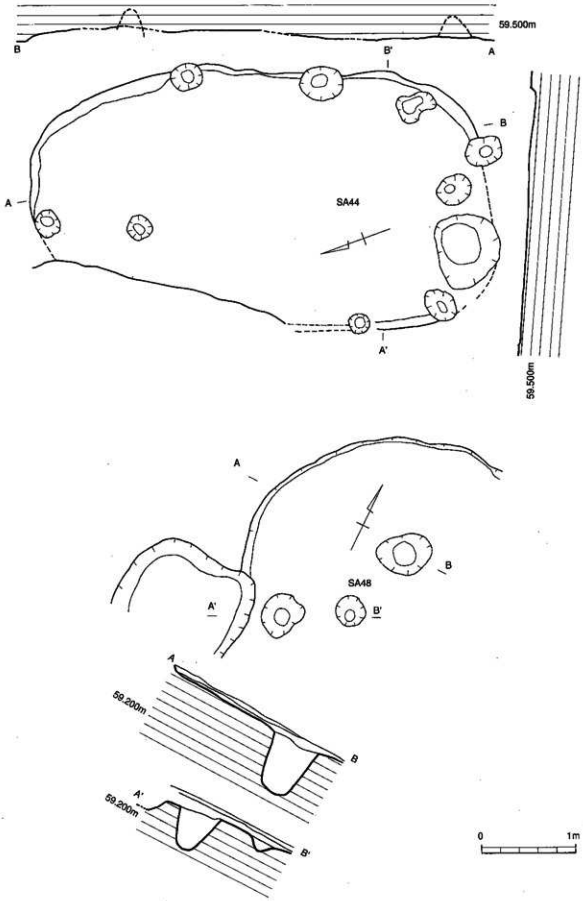
第59図　竪穴住居跡実測図（20）



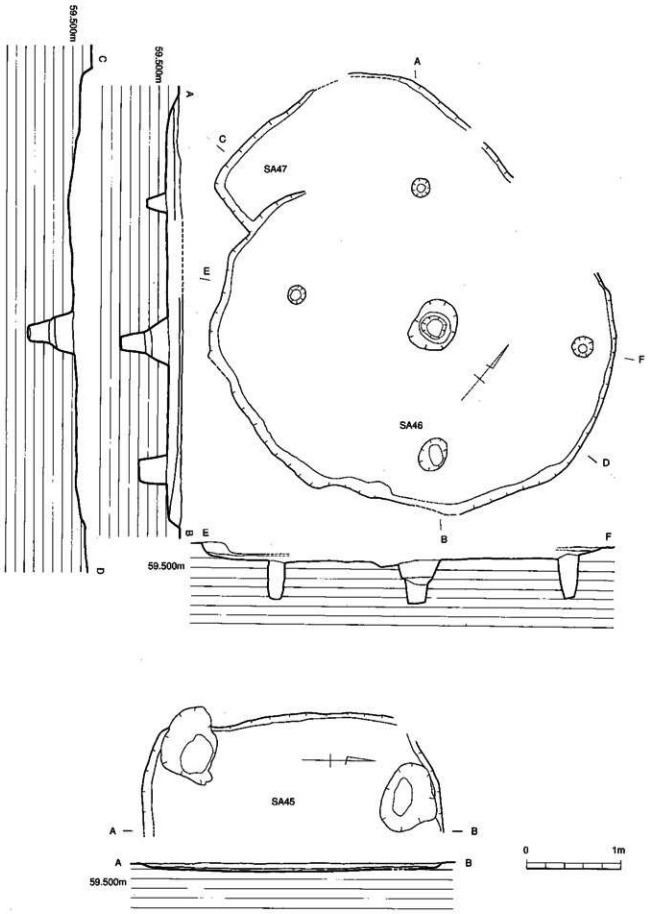
第60図　縄文土器実測図（13）



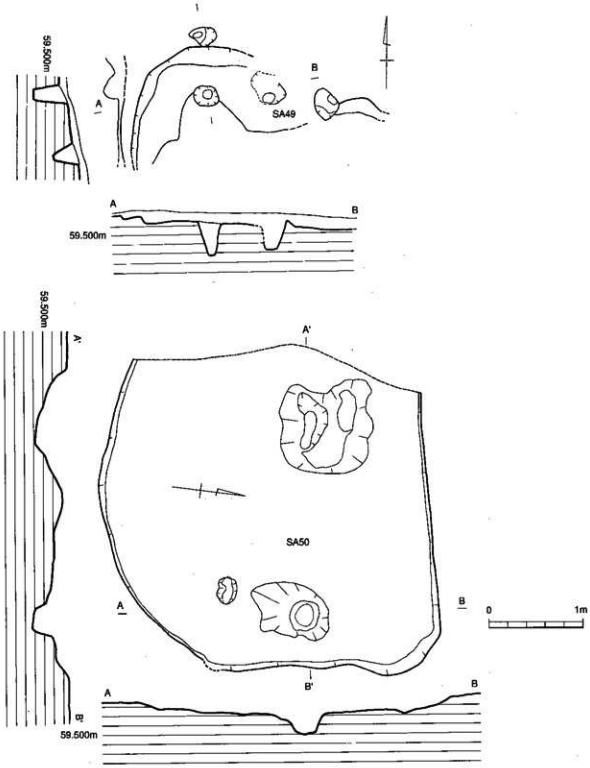
第61図　縄文土器実測図（14）



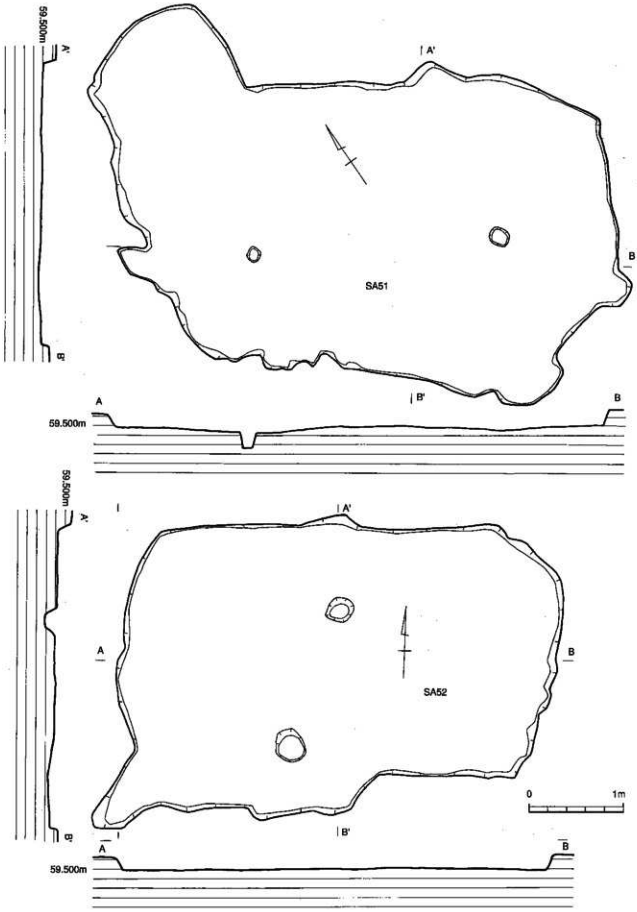
第62図　竪穴住居跡実測図（21）



第63図　竪穴住居跡実測図（22）



第64図　竪穴住居跡実測図（23）



第65図　竪穴住居跡実測図（24）

第5表　竪穴住居跡観察表

住居番号	プラン	出土位置	長径（cm）	短径（cm）	現存する壁面からの深さ	柱穴	出土土器	旧住居番号
SA2	楕円形プラン	F−4	262cm	186cm	11cm	1本	市来式土器	SC42
SA3	円形プラン	F−4・5	556cm	200cm+α	8cm	2本		SA51
SA4	隅丸方形プラン	H−5・6	338cm	140cm+α	21cm	2本	市来式土器	SA49
SA5	円形プラン	H−5	288cm	254cm	12cm	4本		SA36A
SA6	円形プラン	G−4・H−4	300cm	260cm	17cm	2本	岩崎系・市来・丸尾	SA21
SA7	円形プラン	H−4	272cm	240cm	17cm	2本	市来・草野	SA22
SA8	円形プラン	H−4	344cm	336cm	17cm	2本	市来式土器	SA23
SA9	円形プラン	H−4	276cm	160cm+α	5cm		市来・台付皿	SA24
SA10	円形プラン	H−4	304cm	80cm+α	17cm	2本	市来・丸尾	SA20
SA11	円形プラン	H−4・5	316cm	180cm+α	14cm		草野・丸尾・市来	SA31
SA12	円形プラン	H−5	308cm	240cm+α	32cm	2本		SA18
SA13	円形プラン	H−5	400cm	348cm	28cm	2本	市来式土器	SA19
SA14	円形プラン	H−4・5　I−4・5	588cm	498cm	15cm	2本	市来・草野・指宿・台付皿	SA32
SA15	円形プラン	H−4	276cm	140cm+α	16cm	2本	市来・草野	SA33
SA16	円形プラン	H−4　I−4	424cm	354cm	16cm	4本	市来式土器	SA25
SA17	円形プラン	H−4	304cm	200cm+α	6cm		草野・丸尾	SA41
SA18	円形プラン	H−4	316cm	30cm+α	14cm		草野・丸尾・市来	SA38
SA19	円形プラン	I−4	352cm	70cm+α	11cm		市来式土器	SA40
SA20	円形プラン	I−4	372cm	70cm+α	20cm		市来・丸尾・納曾	SA26
SA21	円形プラン	I−4	460cm	414cm	16cm	4本	市来・草野・丸尾・鐘崎	SA39
SA22	隅丸方形プラン	I−4・5	540cm	340cm+α	10cm	2本	市来式土器	SA27
SA23	円形プラン	I−4	252cm	60cm+α	5cm	2本	深鉢	SA44
SA24	円形プラン	I−4	184cm	50cm+α	8cm		市来・草野	SA43
SA25	円形プラン	I−4	444cm	60cm+α	18cm	2本	市来式土器	SA42
SA26	楕円形プラン	I−4・J−4	476cm	420cm	31cm	4本	市来・丸尾・草野・台付皿	SA30
SA27	円形プラン	J−4	480cm	60cm+α	9cm	2本		SA47
SA28	不整形プラン	I−3	368cm	80cm+α	15cm	4本	市来・丸尾	SA34
SA29	楕円形プラン	J−4	378cm	60cm+α	5cm		丸尾	SA46
SA30	円形プラン	J−4	464cm	360cm	19cm	2本	市来・草野	SA28
SA31	円形プラン	I−5・H−5	288cm	244cm	24cm	2本	指宿・松山・市来・丸尾	SA29
SA32	円形プラン	I−5・H−5	475cm	60cm+α	22cm		指宿系・市来・草野	SA48
SA33	円形プラン	H−5・6	396cm	376cm	16cm	4本	市来式土器	SA17
SA34	円形プラン	H−5・6	256cm	200cm	8cm	1本	市来式土器	SA15
SA35	円形プラン	H−5　I−5	552cm	390cm+α	12cm	2本	市来式土器	SA16
SA36	楕円形プラン	I−5	400cm	300cm+α	6cm	2本		SA37
SA37	円形プラン	I−6	216cm	180cm	24cm	2本	指宿式土器	SA12
SA38	円形プラン	I−6	304cm	256cm	12cm	1本	指宿式土器・市来式土器	SA13
SA39	円形プラン	I−5	428cm	350cm	7cm	2本	市来式土器	SA14
SA40	円形プラン	I−5	424cm	300cm+α	13cm	4本	台付皿・納曾・市来	SA36
SA41	円形プラン	I−5	372cm	256cm	4cm	2本	市来式土器	SA35
SA42	円形プラン	I−5	188cm	200cm+α	7cm	2本	納曾・指宿系・丸尾・草野	SA50
SA43	円形プラン	I−4・5	344cm	296cm	9cm	4本	市来式土器	SA52
SA44	楕円形プラン	J−5・6	504cm	276cm	12cm	4本	市来式土器	SA10
SA45	隅丸方形プラン	J−5	316cm	120cm+α	8cm	2本		SA11
SA46	円形プラン	J−5・6	432cm	372cm	14cm	4本	浅鉢等	SA9
SA47	不整形プラン	J−5	316cm	120cm+α	12cm			SA8
SA48	円形プラン	K−6	356cm	200cm	8cm	2本	深鉢	SA5
SA49	円形プラン	I−5	336cm	100cm+α	16cm		深鉢無紋・網代底	SA51
SA50	不整形プラン	F−4	448cm	288cm	15cm	2本	台付皿	A−ⅢSA1
SA51	不整形プラン	G−15	500cm	288cm	15cm	2本	市来式　・指宿式	A−ⅠSA1
SA52	不整形プラン	G−13	466cm	260cm	13cm	2本	市来式・晩期	A−ⅠSA2

成形痕がある土器（117）もⅤ類に相当すると思われる。Ⅵ類土器（118～121）、口唇部に2条の沈線文を施したⅦ類に相当すると思われる土器（122）、台付皿形土器（123）、口唇部に斜位の連続凹圧文を施したバケツ状の深鉢（124）はⅥ類土器に後続するタイプか。口縁部上位に縄文を施した土器（125）、磨研土器の胴部片（126）網代底で指頭痕のある底部（128）等が出土している。

27号住居跡（第49図）

27号住居跡は、26号住居跡に切られている。住居の形態は円形プランであろう。長径は、480cmで切り合いと一部が調査区外のため短径については計測不能である。深さは9cmほどである。埋

土は黒灰色土である。出土遺物は無し。

28号住居跡（第44図）

28号住居は、半分ほど攪乱であった。住居の形態は不定形プランである。長径368cmほどである。深さは15cmほどであった。短径は攪乱の為に計測不能であった。埋土は、黒灰色であった。出土遺物は少なく、Ⅳ類土器（105）、Ⅵ類土器（106・107）が出土している。

29号住居跡（第48図）

29号住居跡は、全体の１／４ほどしか残っていなかった。住居の形態は円形プランである。長径が378cmほどで短径は計測不能である。深さは5cmほどである。埋土は黒灰色土である。出土遺物は少ない。Ⅵ類土器（130）内面に指押さえ痕のある底部等が出土している。

30号住居跡（第48図）

30号住居跡は、単独で残っていた。住居の形態は円形プランである。長径が464cmで短径が360cmほどであった。深さは19cmほどである。埋土は黒灰色土である。出土遺物は口唇部に棒状工具による沈線文、口縁部上下に沈線文を施しその間に縄文をほどこしている磨消縄文土器（132）、Ⅳ類土器（133・134・137）、ヘラミガキの磨研土器（136・138・139）、網代底の底部（140）等が出土している。

31号住居跡（第31図）

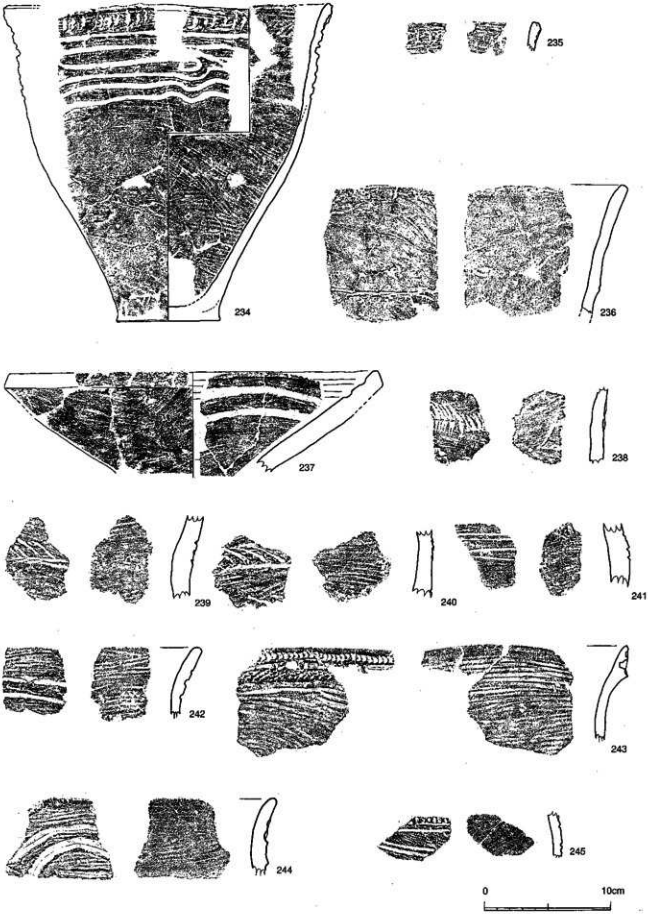
31号住居跡は、32号住居跡を切っている。住居の形態は円形プランである。長径が288cmで短径が244cmである。深さが24cmほどある。埋土は黒灰色土である。出土遺物は多い。波頂部に刺突文、蒲鉾状の口唇部に連続刺突文施している土器（141）松山式が。口唇部に沈線文、連続刻み、口縁部に沈線文や貝殻腹縁刺突文を施すⅡ類に相当する土器（142）、Ⅳ類土器（143～151）特に148は、完径に近く、Ⅳ類土器の器形を知る貴重な資料である。Ⅵ類土器（152）、無紋土器（153～154）、ヘラミガキの磨研の胴部片（155）、底部（156・157）が出土している。

32号住居跡（第50図）

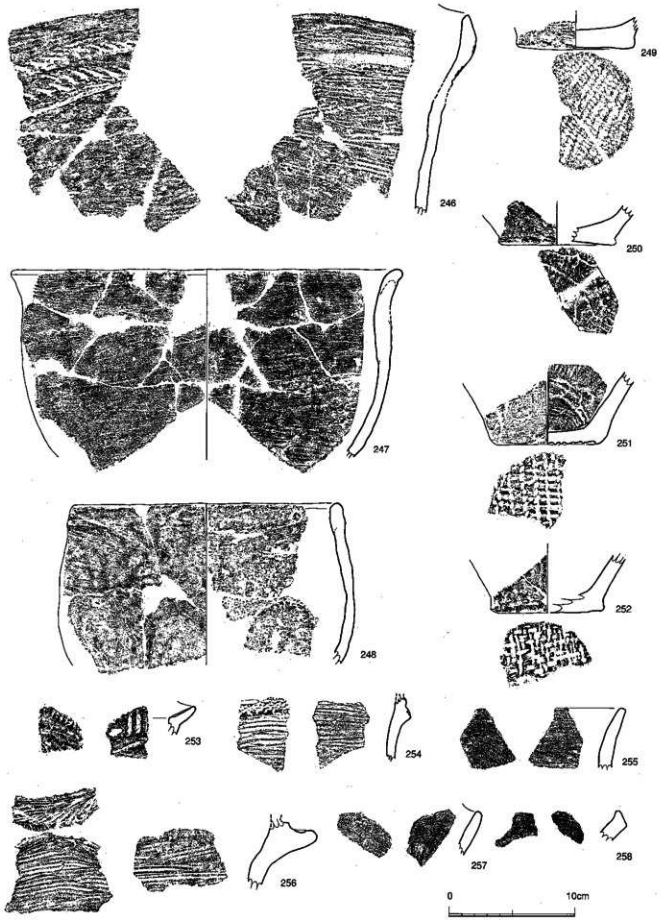
32号住居跡は、31号住居跡に切られている。住居の形態は円形プランである。長径が475cmで短径は、切り合いの関係で計測不能である。深さは22cmである。埋土は黒灰色である。出土遺物は少ない。口唇部に斜め方向の刻み、口縁部に棒状工具による沈線文を施すⅡ類に相当する土器（158）、同じく沈線文と刺突文の組み合わせである（159）もⅡ類に相当すると思われる。Ⅳ類土器（160～164）も出土している。

33号住居跡（第64図）

33号住居跡は、単独で検出した。住居の形態は、円形プランである。長径が396cmで短径376cmである。深さは16cmであった。埋土は黒灰色土である。出土遺物は少ない。Ⅳ類土器（165～168）のみ出土しているがⅣ類でも古い方に相当する。



第66図　縄文土器実測図（15）



第67図　縄文土器実測図（16）

34号住居跡（第54図）

34号住居跡は、35号住居跡に切られている。住居の形態は、円形プランである。長径256cmで、短径200cmである。深さは8cmほどであった。埋土は黒灰色土である。出土遺物は少ない。内面施文土器（169）、口唇部に連続凹圧刻み、口縁部に沈線文と連続刺突文を施し、口縁部が肥厚している土器（170）、Ⅳ類土器（171･172）等が出土している。

35号住居跡（第54図）

35号住居跡は、34号住居跡を切っている。住居の形態は、円形プランである。長径552cmで切り合いの関係で短径は計測不能である。深さは12cmほどであった。埋土は黒灰色土である。出土遺物は、口唇部に貝殻腹縁刺突文を縦位に施し、口縁部に穿孔がある土器（173）、松山式か。口縁部上位に連続刺突文、その下位に端部を刺突した沈線文を施し、口縁部を肥厚させているもの（174）、Ⅱ類かⅣ類に相当すると思われる。また、Ⅳ類土器（175～178）、Ⅵ類土器（179）も出土している。

36号住居跡（第50図）

36号住居跡は、31号住居跡と32号住居跡に切られている。また、35号住居跡を切っている。住居の形態は楕円形プランである。長径は、400cmほどで短径は切り合いの関係で計測不能である。深さは6cmである。埋土は黒灰色土である。遺物の出土は無し。

37号住居跡（第55図）

37号住居跡は、単独で検出しているが一部調査区外になっていた。住居の形態は、楕円径プランである。長径が216cmほどで゛短径が180cmである。深さが24cmである。埋土は、黒灰色土である。出土遺物は少ない。波頂部に凹圧刻み、口縁部に横方向の沈線文や刺突文、胴部上位に端部を刺突した沈線文を施すⅡ類に相当する土器（182）が出土している。

38号住居跡（第55図）

38号住居跡は、39号住居跡に切られている。住居の形態は、円形プランである。長径が304cmで短径が256cmで深さが12cmである。埋土は黒灰色土であった。出土遺物は少ない。口縁部を肥厚させ、沈線文を施しているⅡ類に相当する（180）やⅣ類土器（181）が出土している。

39号住居跡（第55図）

39号住居跡は、41号住居跡と49号住居跡に切られている。住居の形態は、円形プランである。長径が428cmで短径が350cmで深さが7cmである。埋土は黒灰色土である。出土遺物は少ない。上面施文の（183）、Ⅳ類土器（184～187）、口縁部を肥厚させ斜め方向の沈線文を施しているもの（188）、口縁部上位に貝殻腹縁によるロッキング上の刺突文を施しているⅦ類に相当する土器（189）等が出土している。

40号住居跡（第58図）

40号住居跡は、41号住居跡と42号住居跡に切られている。住居の形態は円形プランである。長径424cmである。短径については、切り合いの関係で計測不能である。深さは13cmである。埋土は黒灰色土である。出土遺物は多く口縁上面に棒状工具で楕円形の沈線文を施しているもの（190）、Ⅳ類土器（191～194）、口唇部に刻み、口縁部に棒状工具による沈線文や刺突文を施し、口縁部を

少し肥厚させるⅦ類に相当すると思われる土器（195）、同じくⅦ類の（196）、台付皿形土器（197）、網代底の底部（198）が出土している。

41号住居跡（第58図）

41号住居跡は、40号住居跡を切り、42号住居跡に切られている。住居の形態は、円形プランである。長径が372cmである。短径が256cmである。深さは4cmである。埋土は黒灰色土である。出土遺物は、口縁上面に太い沈線を廻らしている土器（199）、Ⅳ類土器（200～203）が出土している。203は、棒状工具による刺突である。

42号住居跡（第58図）

42号住居跡は、40号住居跡に切られ、41号住居跡を切っている。住居の形態は円形プランである。長径は188cmである。短径は、切り合いの関係で計測不能である。深さは7cmである。埋土は黒灰色土である。出土遺物は多い。口縁部に棒状工具による2条の沈線文を施すⅡ類土器（204）、Ⅳ類土器（205）、Ⅵ類土器（206・208・209·211）、波頂部に刻み、口縁部にヘラ状工具による横方向の浅い沈線文がほどこされているⅡ類に相当する土器（207）、上面施文の（210）、口唇部がやや肥厚したⅦ類土器に相当する（212）、口縁部は少し外反し波状口縁、口唇部に連続刻み、口縁部に刻みのある突帯がある土器（213）、口唇部に貝殻腹縁による刻みを入れ、粘土紐を口唇部に貼り付け、胴部には沈線文を施している土器（214）、Ⅴ類に相当するか。また、波頂部両端に貝殻腹縁による刻みがある無紋土器（215）、口唇部に刻みのある無紋土器（216）、木の葉底の底部（217）等が出土している。

43号住居跡（第59図）

43号住居跡は、40号住居跡と42号住居跡にそれぞれ切られている。住居の形態は円形プランである。長径は、344cmである。短径は296cmである。深さは、9cm程度である。埋土は黒灰色土である。出土遺物は少なく、Ⅳ類土器（220）が出土している。

44号住居跡（第62図）

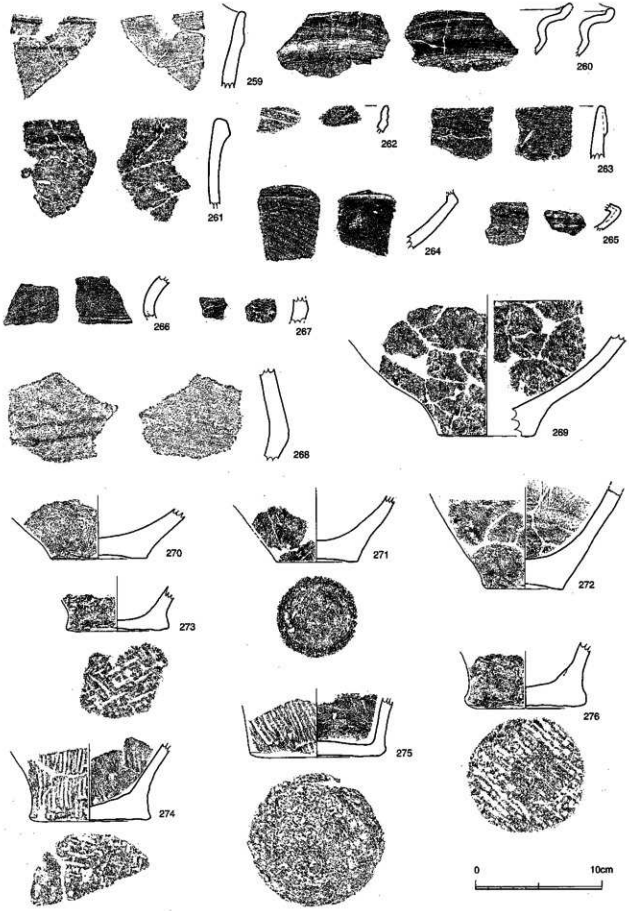
44号住居跡は、隅丸方形のものである。住居の形態は、方形プランである。長径は、504cmで、短径は276cmである。深さは、12cmである。埋土は黒灰色土である。出土遺物は少ない。磨研土器（230）、Ⅳ類土器（231～232）、口唇部に横・斜め方向の沈線文を施した土器（233）等が出土している。

45号住居跡（第63図）

45号住居跡は、方形プランで他の住居跡と切り合っていないものの、調査区外で完全な形で調査できなかった。長径は、316cmで深さは8cmである。埋土は黒灰色土である。出土遺物は無し。

46号住居跡（第63図）

46号住居跡は、円形プランで47号住居跡を切っている。長径は、432cmである。短径は、372cmである。深さは14cmである。埋土は黒灰色土である。出土遺物は口縁部を肥厚させ、口唇部に横方向の1条の沈線文、口縁部に3条の横走沈線文や、平行沈線、孤状の沈線文を施すⅡ類に相当する土器（221）や同じく沈線文を施す（223・224·225）がありⅡ類の範疇か。また上面施文土器（226）、Ⅵ類に相当すると思われる。（227）、口唇部は外反し、胴部に浅い沈線による孤状曲線文



第68図　縄文土器実測図（17）

を施している土器（228）。浅鉢で口唇部に刺突文を施した粘土紐を貼り付けた土器（229）等が出土している。

47号住居跡（第63図）

47号住居跡は、円形プランで46号住居跡に切られている。長径は316cmである。短径は切り合いの関係で計測不能である。埋土は黒灰色土である。出土遺物はなし。

48号住居跡（第62図）

48号住居跡は、単独で検出しているが一部調査区外にあるために全体は把握できなかった。住居の形態は、円形プランと考えられる。長径が356cmで短径が200cmである。深さが8cmであった。埋土は黒灰色土である。出土遺物は少ない。口縁部上部に貝殻腹縁刺突文、下位に沈線文を施しⅠ類に相当すると思われる（234）。またⅥ類に相当すると思われる（235）も出土している。

49号住居跡（第64図）

49号住居跡は、39号住居跡を切り41号住居跡に切られている。住居の形態は、円形プランと考えられる。長径は336cmである。短径は、切り合いのため計測不能である。深さは、16cmである。埋土は黒灰色土である。出土遺物なし。

50号住居跡（第64図）

50号住居跡は、A－Ⅲ区で検出されている。隅丸方形プランである。長径448cmで短径は、288cmであった。深さは15cmである。一部攪乱の為に全体は検出できていない。埋土は黒褐色土であり、他の住居と異なっている。出土遺物は少ない。口縁部が外反し胴部に貝殻腹縁による孤状の連続刺突文がありⅦ類の範疇か（236）。台付Ⅲ形土器（237）、Ⅶ類の胴部片に相当すると思われるもの（238～241）等が出土している。

51号住居跡（第65図）

51号住居跡は、不定形プランで長径500cmである。短径は288cmである。深さは15cmである。埋土は黒灰色土である。出土遺物は多い。口縁部に横方向の沈線文を施しているⅡ類に相当する土器（242）、Ⅳ類土器（243·244）、棒状工具による刺突文、沈線文の間に縄文を施しその上をナデ消している。Ⅶ類に相当すると思われる（245）。（246）も同類と思われる。また、無紋土器（247・248）、網代底（245·252）、木の葉底（250）、モジリ編み底（251）等が出土している。

52号住居跡（第65図）

52号住居跡は、不定形プランで長径466cmである。短径260cmである。深さは13cmである。埋土は黒灰色土である。出土遺物は多い。内面施文土器（253）、Ⅳ類土器（254·256）、磨研土器（255・257・258・260・264・265・266）このうち260・264・265・266は浅鉢である。また、263は、晩期土器か。また網代底（273～276）等が出土している。

(2) 土坑

検出した土坑は106基を数え、その内3基が配石土壙である。ここでいう土坑とは、使用目的の解らない竪穴のことを指し、大きさ、形状はバラエティーに富んでいるが、断面形態の特徴で類型すると、7種類になる。

第Ⅰ類型	断面形態が皿状	17基
第Ⅱ類型	断面形態が柱状形	10基
第Ⅲ類型	断面形態が箱形	69基
第Ⅳ類型	断面形態が袋状形	2基
第Ⅴ類型	断面形態が船底形	5基
第Ⅵ類型	断面形態が碗形	2基
第Ⅶ類型	断面形態が不定凹形	1基

類型別の違いは、穴を掘る段階では壁の立ち上がりは垂直に近い状態であったと思われる。立ち上がりが垂直に近いものは、掘り込まれて早い段階で埋められた可能性があり、そこに何か目的を感じるが、逆に皿状に近いものは長期間放置されている間に壁の上部が崩落し、その後、埋まった可能性があり、使用期間が長かったか、ずっと放置され自然に埋まったと推測される。土坑については遺物出土のあるものについて主に紹介し、詳細については土坑一覧表を参照されたい。

SC1　出土地点はG－5グリッドであり、平面形態は、長軸371cm、短軸229cmの不整長方形を呈する。確認面から底面までの深さは40cmである。埋土は基本土層の第2層（黒褐色土）である。底面のまわりに配石がある配石土壙であり、その西側にⅣ類の土器が入れ子状に5個検出された。ただ、断面図を見ても解るように、土器の下部の方がなくなっていた。どういう原因でこうなったかは今後考察したい。遺物は283・285・286・287・299が入れ子状態で出土した。

SC2　出土地点はⅠ－4グリッドであり、平面形態は、長軸190cm、短軸81cmの隅丸長方形を呈する。確認面から底面までの深さは15cmである。SC1と同じく配石土壙であり、底面の中央より南側に小穴が掘り込まれその中にⅣ類の土器片が検出された。

SC3　出土地点はE－3グリッドであり、平面形態は、長軸140cm、短軸120cmの不整円形である。SC1・2と同じく配石土壙であり、3基の中ではストーンサークルのようにすき間なく2段～3段にしっかりと石積みが組まれていた。中央は掘り込みがあり石が壁のようにその周りを保護していた。遺物は検出されなかった。

SC4　遺物はⅣ類土器（301・302）、Ⅶ類土器（304・305）、磨研土器（305）、口縁部上位に2条の凹線文があり、その間に楕円の凹点文がある（306）。調整はミガキであるので磨研土器の前段階あたりか。

SC6　遺物は口縁部に2条の沈線文があり、調整はナデ（307）。磨研土器の前段階あたりか。

SC7　遺物は台付皿形土器である（308）。

SC10　遺物はⅣ類土器（309～311）。

SC13　遺物はⅣ類土器（312）と胴部片（313）である。

SC14　遺物は磨研土器の胴部片（314）である。

SC15　遺物は棒状工具による沈線文を施した胴部片（315）である。

SC16　遺物は口唇部・口縁部に貝殻腹縁による連続刺突文を施した粘土紐を貼り付け、その下部に浅い沈線文を施す（316）。口唇部に貝殻腹縁刺突文を施した粘土紐貼り付け文、下部に沈線文を施す（317）。口縁部上位に連続刺突文、胴部に浅い沈線文を施す（318）。いずれも、Ⅰ類に相当すると思われる。

SC17　遺物はⅠ類土器（319）、磨研土器の頸部片（320）である。

SC19　遺物はⅣ類土器（321・322）、Ⅶ類土器（323）である。

SC24　遺物はⅣ類土器（325・326・327）、Ⅴ類土器（328・329）、網代底（330）である。

SC25　遺物はⅡ類に相当すると思われる土器（332）である。

SC27　遺物はⅣ類土器（333・334・335）、Ⅶ類土器に相当すると思われる（336・337）、磨研土器（338～340、343～347）、磨消縄文土器（341・342）、無文土器（350）である。

SC28　遺物は内面施文土器（351）、Ⅳ類土器（352～354）である。

SC29　遺物はⅣ類土器（355）である。

SC30　遺物はⅣ類土器（356）である。

SC31　遺物はⅣ類土器（357・358）、底部（359・360）である。

SC32　遺物はⅥ類土器と思われる（361）、磨研土器（362）である。

SC33　遺物はⅣ類土器（363）、Ⅴ類土器（364）、内面施文土器（365）である。

SC34　遺物はⅣ類土器（366）、Ⅵ類土器（367）、口縁部にヘラ状工具による連続刺突文（368・369）、Ⅶ類に相当すると思われる（371・373）である。

SC35　遺物は無文土器（370・372）である。372は口唇部に刻みがある。

SC38　遺物はⅥ類土器（377）と思われるものである。

SC47　遺物は磨研土器（374）である。

SC49　形態・規模から竪穴状遺構の可能性がある。遺物はⅦ類土器（375）である。

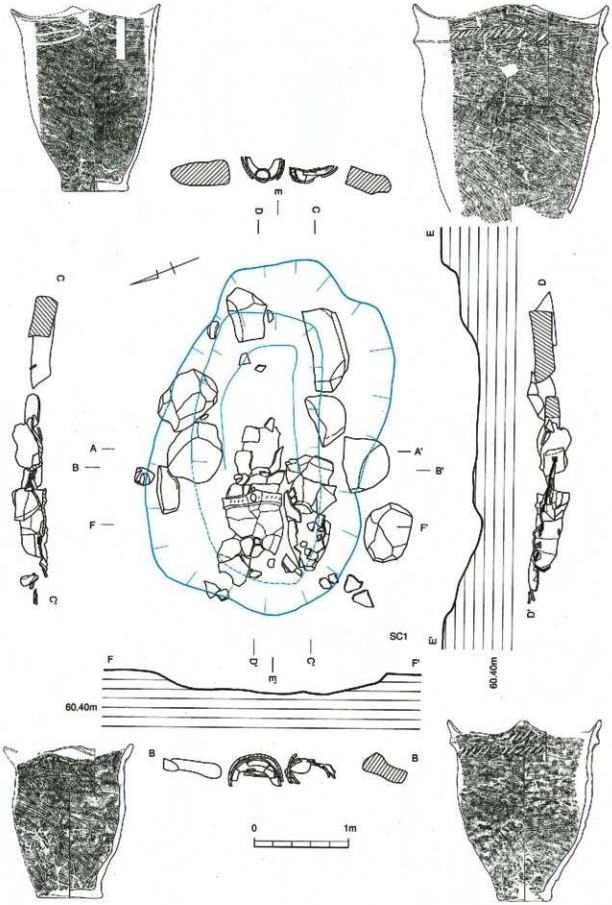
SC50　遺物は磨研土器（378）、台付皿形土器（379）である。

SC51　遺物はⅣ類土器（376）である。

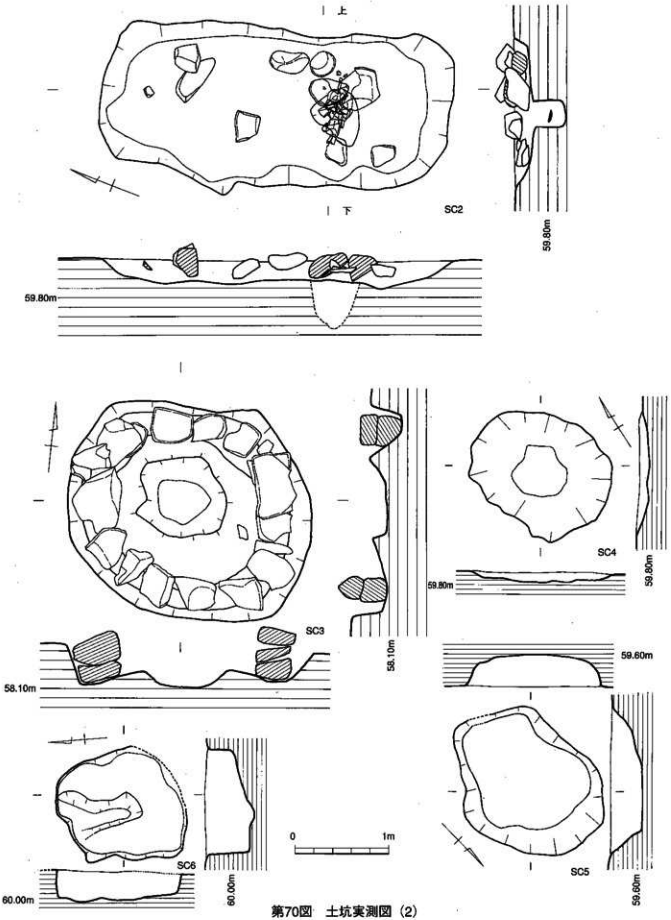
SC53　遺物はⅣ類土器（380・381）である。

SC56　遺物は口縁部にヘラ状工具による縦位の沈線文を施す（382）、Ⅳ類土器（383・384）等である。

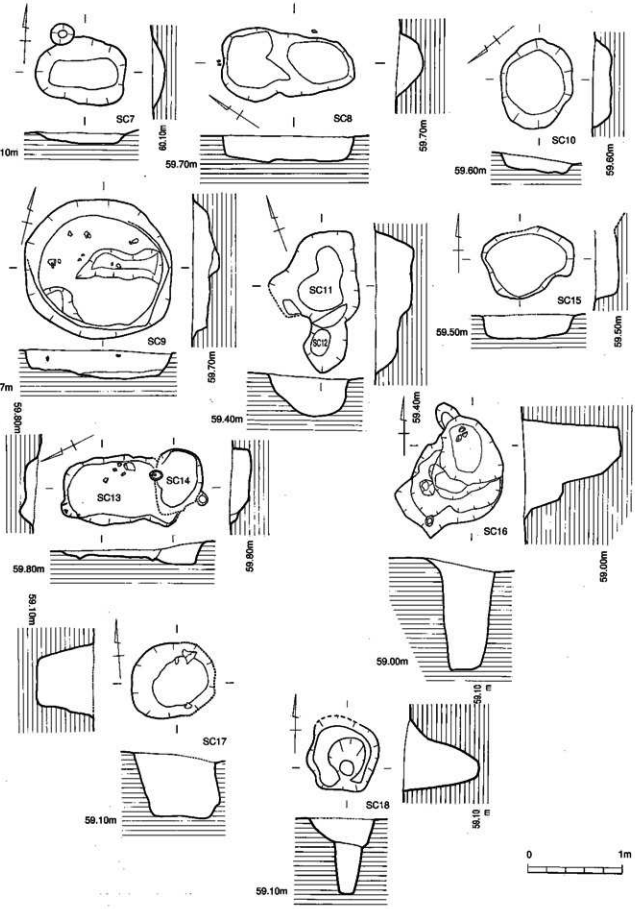
SC57　出土地点はＦ－５グリッドであり、平面形態は、長軸174cm、短軸149cmの楕円形である。確認面から底面までの深さは46cmである。出土遺物はⅣ類土器（387・389）、Ⅴ類土器（390～393）、磨消縄文土器（397）、無文土器（388・395・396）、底部（398・399）が多量検出された。



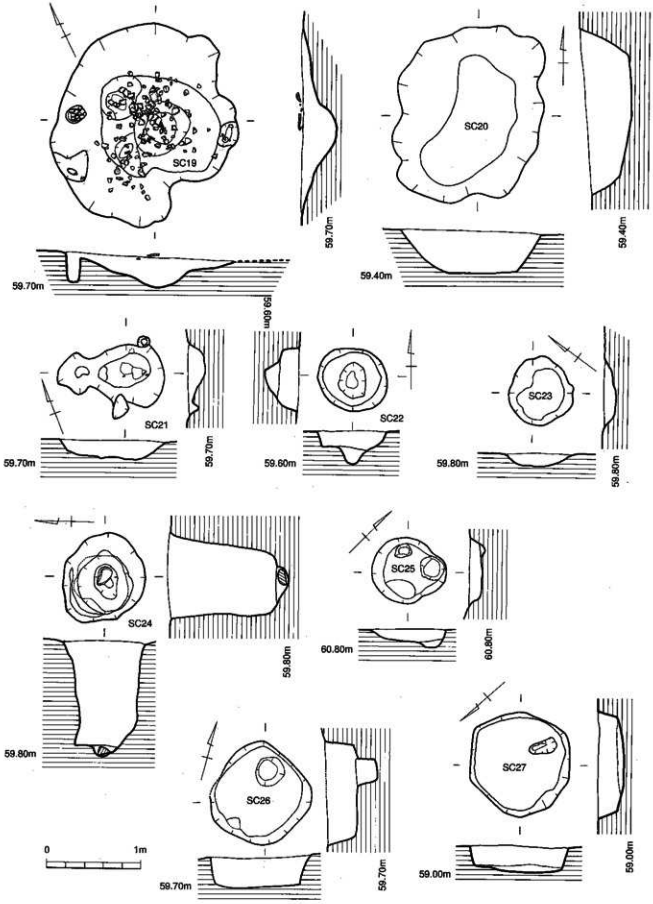
第69図　土坑実測図（1）


上
下
SC2
59.80m
59.80m
SC3
58.10m
58.10m
SC4
59.80m
59.80m
59.80m
SC5
59.80m
SC6
60.00m
60.00m
0
1m

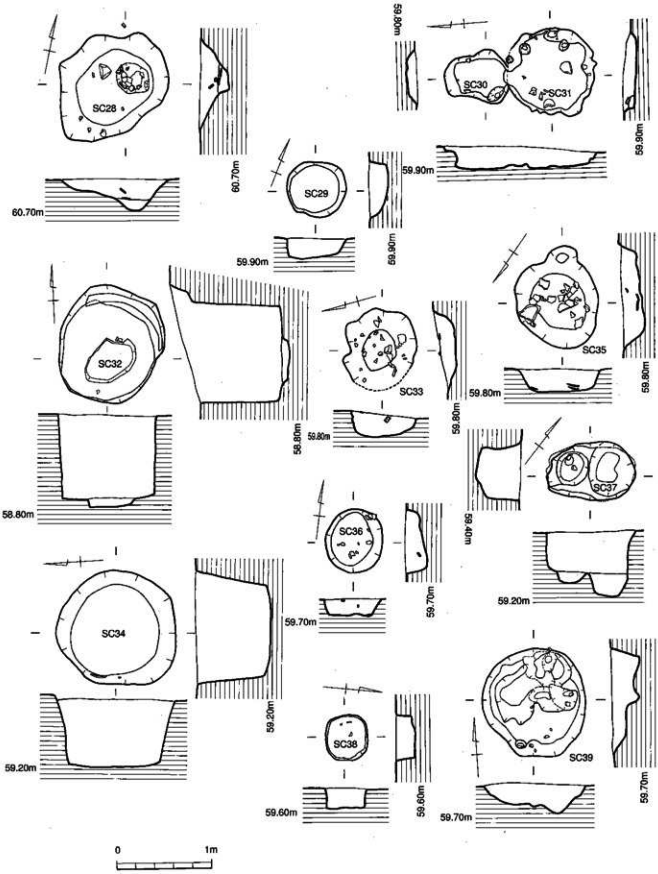
第70図 土坑実測図（2）


SC7
60.10m
60.10m
SC8
59.70m
59.70m
SC10
59.60m
59.60m
SC9
59.7m
59.70m
SC11
SC12
59.40m
SC15
59.50m
59.50m
59.80m
SC13
SC14
59.80m
59.80m
59.40m
SC16
59.00m
59.00m
59.00m
59.10m
SC17
59.10m
SC18
59.10m
59.10m
0
1m

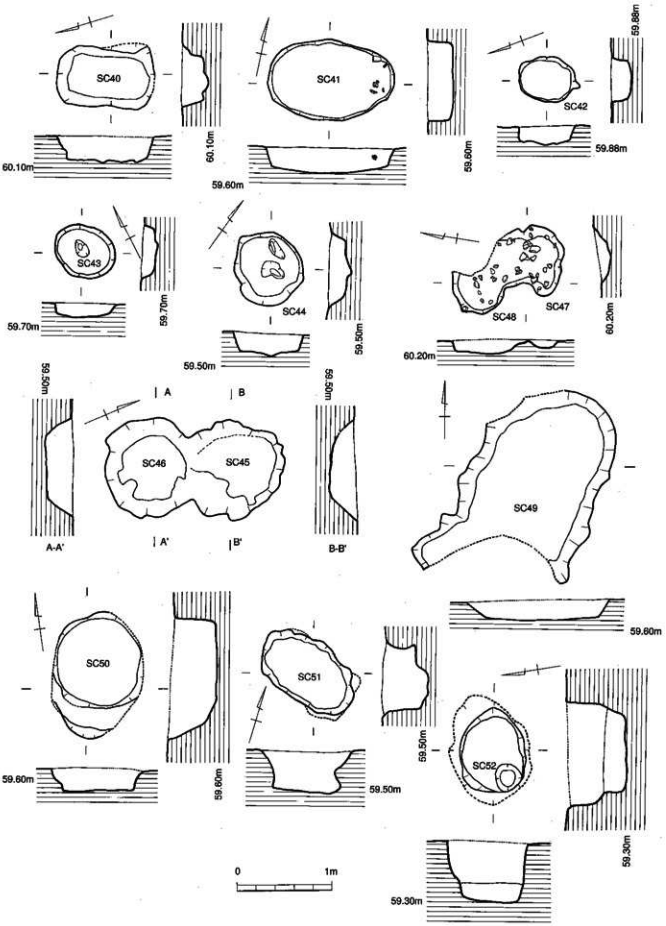
第71図　土坑実測図（3）


SC19
59.70m
59.70m
SC20
59.40m
59.40m
SC21
59.70m
59.70m
SC22
59.60m
59.60m
SC23
59.80m
59.80m
SC24
59.80m
59.80m
SC25
60.80m
60.80m
SC26
59.70m
59.70m
SC27
59.00m
59.00m
0
1m

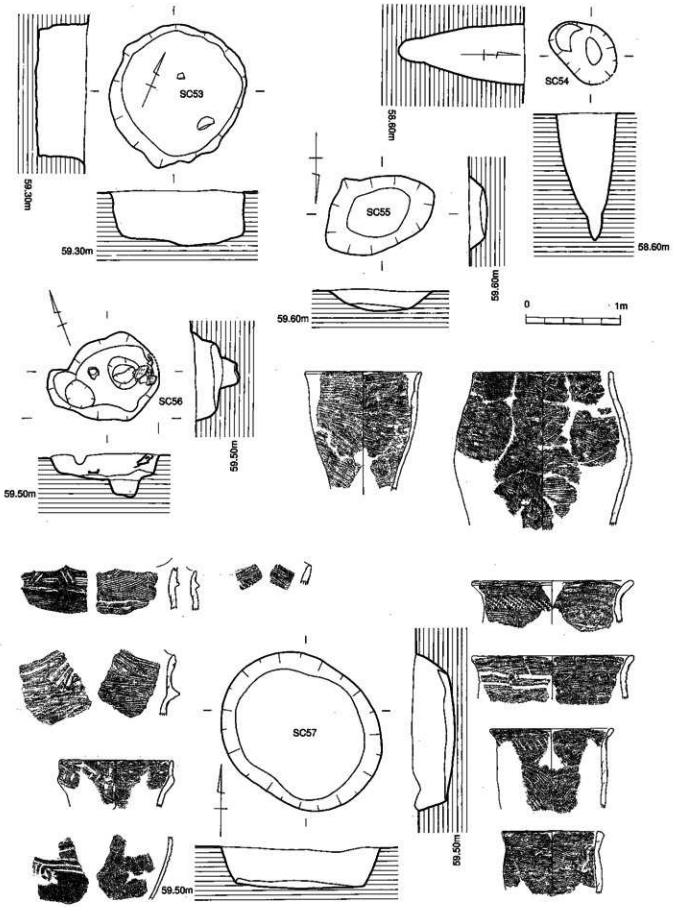
第72図　土坑実測図（4）


SC28
60.70m
60.70m
SC29
59.90m
59.90m
59.90m
SC30
SC31
59.90m
59.90m
SC32
58.80m
58.80m
58.80m
SC33
59.80m
59.80m
SC35
59.80m
59.80m
SC36
59.70m
59.70m
59.40m
SC37
59.20m
SC34
59.20m
59.20m
SC38
59.60m
59.60m
SC39
59.70m
59.70m
0
1m

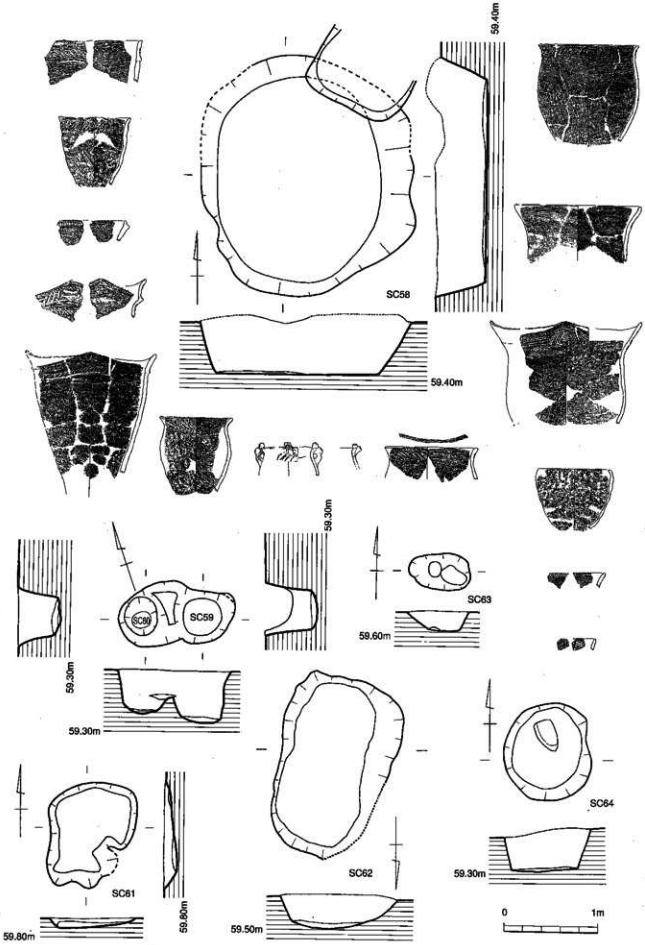
第73図　土坑実測図（5）


SC40
60.10m
60.10m
SC41
59.60m
59.60m
SC42
59.88m
59.88m
SC43
59.70m
59.70m
SC44
59.50m
59.50m
SC47
SC48
60.20m
60.20m
59.50m
A
B
SC46
SC45
59.50m
A-A'
A'
B'
B-B'
SC49
59.60m
SC50
59.60m
59.60m
SC51
59.50m
59.50m
SC52
59.30m
59.30m
0
1m

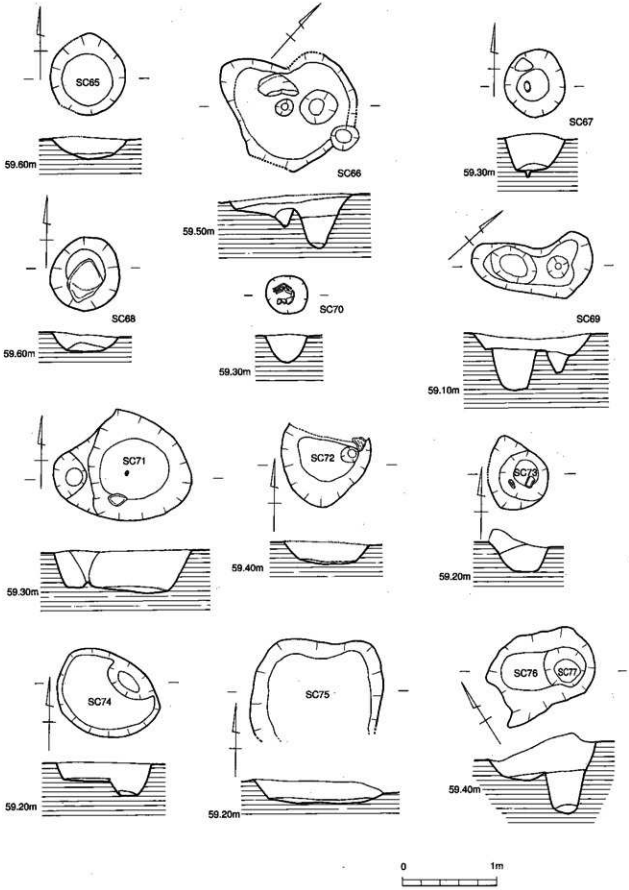
第74図　土坑実測図（6）


SC53
59.30m
59.30m
SC54
58.60m
58.60m
SC55
59.60m
59.60m
0
1m
SC56
59.50m
59.50m
SC57
59.50m
59.50m

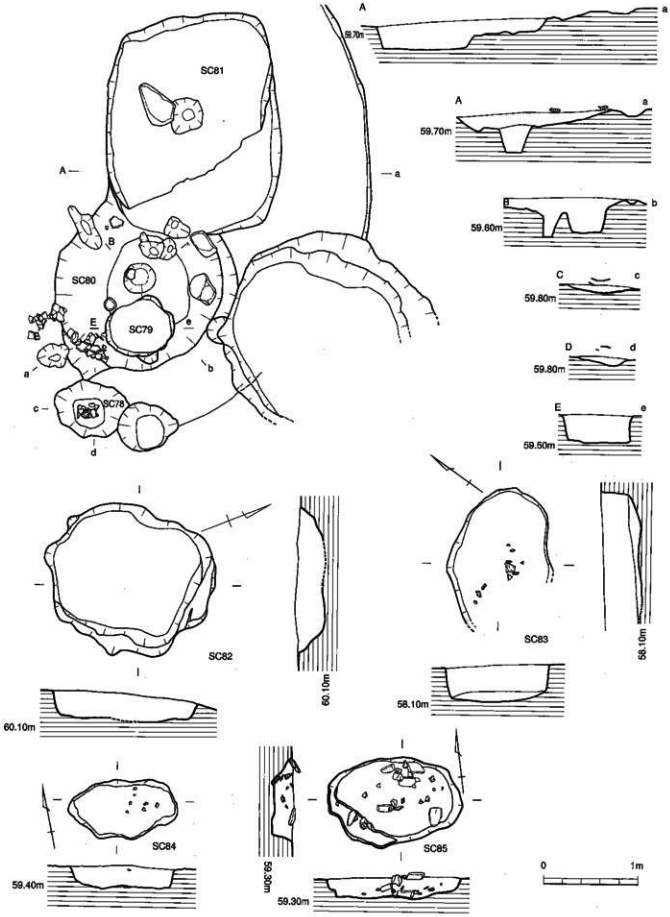
第75図　土坑実測図（7）


59.40m
SC58
59.40m
59.30m
SC60
SC59
59.30m
59.30m
SC63
59.60m
SC61
59.80m
59.80m
SC62
59.50m
SC64
59.30m
0
1m

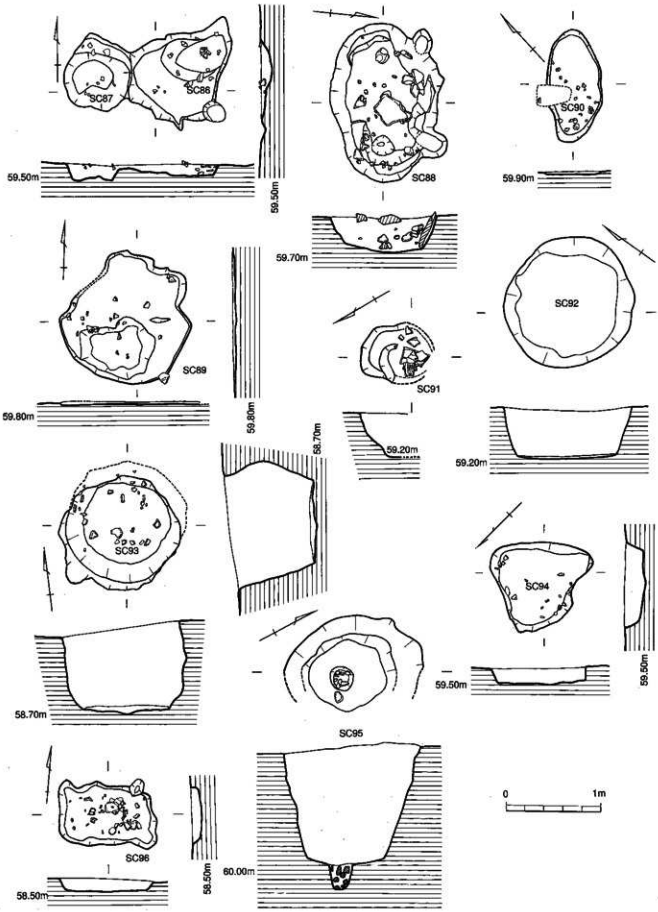
第76図　土坑実測図（8）


SC65
59.60m
SC66
59.50m
SC67
59.30m
SC68
59.60m
SC70
59.30m
SC69
59.10m
SC71
59.30m
SC72
59.40m
SC73
59.20m
SC74
59.20m
SC75
59.20m
SC76
SC77
59.40m
0
1m

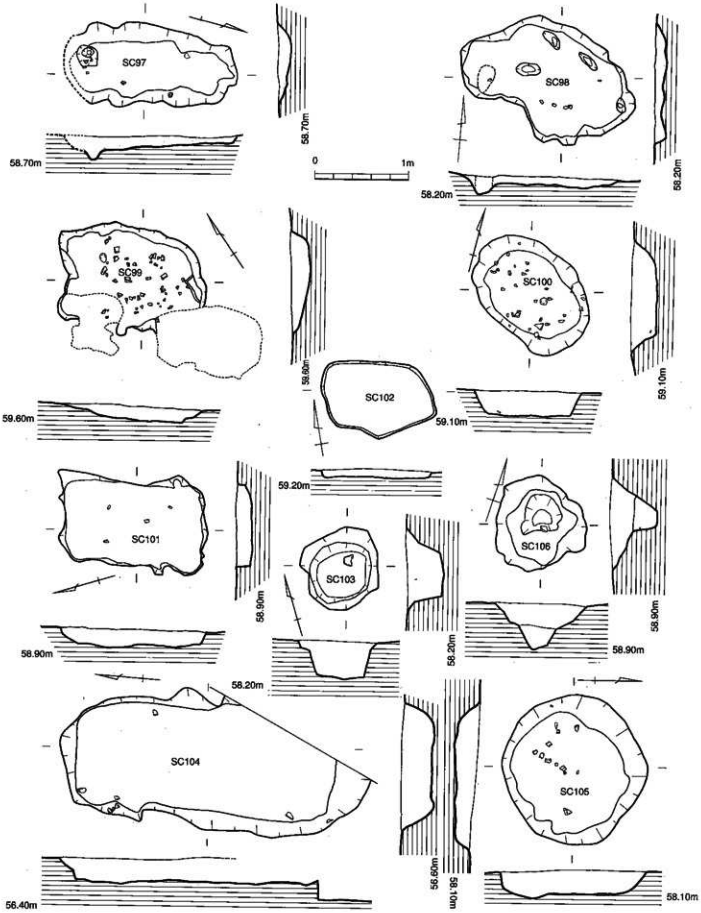
第77図　土坑実測図（9）



第78図　土坑実測図（10）



第79図　土坑実測図（11）



第80図　土坑実測図（12）

第５表　竹ノ内遺跡縄文後期土抗一覧表

遺構No	出土位置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	平面プラン	断面形態	遺　物	種　別	備　考
SC1	B−1 G・5	371	229	40	不整長方形	皿形	市来（入れ子）	配石土壙	
SC2	B−1 I・4	190	81	15	隅丸長方形	皿形	市来	配石土壙	
SC3	A−3 E・3	140	120	21	不整円形	不定凹形		配石土壙	
SC4	B−1 E・4	152	120	12	楕円形	皿形	納曾・市来		
SC5	B−1 H・5	180	130	32	不整楕円形	箱形			
SC6	B−1 B・4	135	123＋α	45	不整方形	箱形	納曾		
SC7	B−1 B・5	93	71	13	隅丸方形	皿形	脚台		
SC8	B−1 J・4	136	66	29	不整長方形	箱形			
SC9	B−1 J・4	164	150	28	円形	箱形			
SC10	B−1 H・4	94	74＋α	21	楕円形	箱形			
SC11	B−1 H・4	102＋α	95	39	不整形	箱形			SC12と切り合い
SC12	B−1 H・4	46＋α	46	23	不整楕円形	箱形			SC11と切り合い
SC13	B−1 G・5	102＋α	72	8	隅丸方形	箱形	市来・丸尾		SC14と切り合い
SC14	B−1 G・5	61	39＋α	19	隅丸方形	箱形			SC13と切り合い
SC15	B−1 G・5	97	72＋α	23	不整楕円形	箱形	指宿		
SC16	B−1 G・5	124＋α	99	110	不整形	柱状形	阿高or岩崎		
SC17	B−1 G・4	94＋α	82＋α	64	円形	箱形	岩崎形		
SC18	B−1 G・4	87＋α	70	80	不整方形	柱状形			
SC19	B−1 G・4	210	186	35	不整形	船底形	市来・納曾・丸尾		
SC20	B−1 G・3	260	163	48	不整楕円形	箱形			
SC21	B−1 F・4	113	73	19	不整形	箱形	晩期		
SC22	B−1 F・4	76	67	36	円形	船底形	底部		
SC23	B−1 F・4	70	67	14	不整円形	皿形	市来		
SC24	B−1 G・5	99	85	124	不整円形	柱状形	市来・丸野or草野		
SC25	B−1 G・5	80	70	20	不整円形	箱形	指宿系		
SC26	B−1 G・5	110	106	55	不整方形	箱形			
SC27	B−1 F・5	112	104	27	不整方形	箱形	市来・納曾・晩期		
SC28	B−1 G・5	134	99	33	不整楕円形	皿形	市来		
SC29	B−1 F・5	62	58	19	円形	箱形	市来or丸尾		
SC30	B−1 F・5	86＋α	55	23	不整長方形	箱形	市来		SC31と切り合い
SC31	B−1 F・5	97＋α	90	19	不整円形	箱形	草野・市来		SC30と切り合い
SC32	B−1 F・5	124	13	106	不整方形	柱状形	納曾		
SC33	B−1 E・5	88＋α	77＋α	26	不整円形	箱形	丸尾・市来・草野		
SC34	B−1 F・4	126	120	78	円形	箱形	市来		
SC35	B−1 F・5	107	86	24	不整楕円形	箱形	深鉢・無紋		
SC36	B−1 I・4	68	60	22	円形	箱形			
SC37	B−1 G・5	61	50＋α	69	不整円形	柱状形			明治土坑と切り合い
SC38	B−1 K・6	50	49	22	隅丸方形	箱形	深鉢		
SC39	B−1 G・5	115	109	29	円形	箱形			
SC40	B−1 B・3	105	69＋α	28	隅丸長方形	船底形			
SC41	B−1 H・5	134	85	27	楕円形	箱形			
SC42	B−1 F・5	60	47	21	楕円形	箱形			
SC43	B−1 F・4	67	55	16	円形	箱形			
SC44	B−1 G・4	80	74	25	不整円形	船底形			
SC45	B−1 H・5	101	89＋α	28	不整円形	箱形			SC46と切り合い
SC46	B−1 H・5	105	97＋α	24	不整円形	箱形			SC45と切り合い
SC47	B−1 F・4	71	33＋α	14	不整形	皿形			
SC48	B−1 F・4	78	45＋α	13	不整形	箱形			
SC49	B−1 H・5	181＋α	151	21	不整長方形	箱形	深鉢		
SC50	B−1 H・5	130＋α	89＋α	48	不整形	箱形	台付皿		
SC51	B−1 G・5	114	65	46	不整長方形	袋状形	深鉢		
SC52	B−1 G・5	80＋α	68＋α	64	不整円形	箱形			
SC53	B−1 G・5	145	142	57	不整円形	箱形	市来		
SC54	B−1 G・3	76	54	133	不整楕円形	柱状形			
SC55	B−1 H・5	124	77	16	不整楕円形	箱形			
SC56	B−1 G・5	116	86	28	不整形	箱形	丸尾		
SC57	B−1 F・5	174	149	46	楕円形	箱形	丸尾・草野・市来		
SC58	B−1 F・5	253	223	54	不整楕円形	箱形	丸尾・草野・市来		
SC59	B−1 G・5	61＋α	55	47	円形	柱状形			
SC60	B−1 G・5	63	52＋α	43	楕円形	柱状形			
SC61	B−1 G・4	111	88	13	不整形	皿形			

SC62	B−1H・5	199	127	31	隅丸長方形	皿形			
SC63	B−1H・5	65	38	20	不整楕円形	箱形			
SC64	B−1H・6	102	92	40	不整楕円形	箱形	深鉢無紋		
SC65	B−1H・6	85	78	17	円形	皿形	丸尾		
SC66	B−1H・6	134＋α	108＋α	23	不整形	箱形			
SC67	B−1J・6	71	64	38	円形	箱形	指宿		
SC68	B−1J・6	78	71	18	円形	皿形			
SC69	B−1J・6	126	49	12	不整形	箱形			
SC70	B−1J・5	44	40	30	円形	鉢形	縄式		
SC71	B−1K・5	145	116	46	不整楕円形	箱形			
SC72	B−1K・5	88	75＋α	24	不整形	箱形	丸尾・指宿		
SC73	B−1K・5	78	64＋α	30	不整形	鉢形			
SC74	B−1K・5	112	86	30	不整楕円形	箱形			
SC75	B−1K・6	139	110＋α	23	不整形	箱形			
SC76	B−1G・6	91	64＋α	31	不整形	皿形			
SC77	B−1G・6	76	53＋α	84	不整円形	柱状形	指宿		
SC78	B−1G・5	78＋α	56	8	不整楕円形	皿形	深鉢		
SC79	B−1F・5	73	64	30	不整楕円形	箱形			
SC80	B−1F・5	194	147＋α	15	不整形	皿形			
SC81	B−1F・5	234＋α	181	27	隅丸長方形	箱形			
SC82	B−4P・3	130	152	29	不整形	箱形			
SC83	A−1G・15	160＋α	110	31	不整形	箱形	岩崎系・晩期		
SC84	A−1F・15	112	59	23	不整楕円形	箱形			
SC85	A−1G・14	140	89＋α	21	不整楕円形	箱形	晩期		
SC86	A−1G・15	94＋α	85	10	不整形	箱形	深鉢		SC87と切り合い
SC87	A−1G・15	85	67＋α	17	不整方形	箱形			SC86と切り合い
SC88	A−1H・14	168	113	39	不整形	箱形	深鉢		
SC89	A−1H・14	139	120＋α	3	不整形	皿形			
SC90	A−1G・16	119	56	2	不整楕円形	皿形	市来		
SC91	A−1G・16	75＋α	64＋α	48＋α	不整形	箱形	指宿系・深鉢		
SC92	A−1G・16	137	134	49	不整円形	箱形	縄式		
SC93	A−1G・16	150	123	90	不整円形	袋状形	市来・岩崎系		
SC94	A−1G・15	100	90	20	不整形	箱形			
SC95	A−2G・7	133＋α	117＋α	124	不整形	柱状形	胴部		
SC96	A−2G・7	117	77	12	隅丸長方形	箱形			
SC97	A−2G・7	183	83	13	不整長方形	箱形			
SC98	A−2F・4	189	121	11	不整形	皿形			
SC99	A−2F・4	158＋α	105＋α	20	不整形	箱形	胴部		
SC100	A−2J・4	140	96	26	楕円形	箱形	納曾系？		
SC101	A−2G・8	179	121	20	不整長方形	箱形			
SC102	A−2H・11	123	81	8	不整長方形	箱形			
SC103	A−3E・3	91	85	40	不整円形	箱形			
SC104	A−3E・3	320＋α	127	33	不整形	箱形			
SC105	A−3F・3	158	155	27	不整円形	箱形			
SC106	A−3F・3	100	95	26	不整形	船底形	岩崎系		

SC58　出土地点はＦ５グリッドであり、平面形態は、長軸253cm、短軸223cmの不整楕円形である。確認面から底面までの深さは54cmである。埋土は黒褐色土で、出土遺物は非常に多くⅣ類土器（400～416・418・420・422）、Ⅴ類土器（425・427～429）、Ⅵ類土器（417・419・421・423・424・426）等の土器が多量検出されており、少量出土土器には、口縁部に縄文を施している（430）、胴部に撚糸文を施す（432・433）、口縁部にヘラ状工具で細沈線文を施す（434）、無文土器（431）、底部（435～437）等がある。形態・規模・遺物等から、ここでは土坑扱いをしているが、竪穴住居跡の可能性も考えられる。

SC64　遺物はⅣ類土器（438・439・441）、指押え痕のある無文土器（440）である。

SC65　遺物はⅥ類土器と思われる（442）。

SC67　遺物はⅡ類土器（443）と思われるものが出土している。

SC70　遺物は磨消縄文土器（444）である。

SC72　遺物はⅣ類土器（445・446）、磨研土器（448）、網代底（447）である。

SC78　遺物はⅣ類土器（449）、口縁部を肥厚させ、沈線文や刺突文を施す（450）土器が出土している。

SC81　形態・規模から竪穴状遺構の可能性がある。遺物は磨研土器の胴部片（452）である。

SC83　遺物はⅣ類と思われる（451）、磨消縄文土器（453）、Ⅱ類土器（454）等である。

SC85　遺物はナデの無文土器（456）である。

SC86　遺物は胴部に横方向の沈線文を廻らし、その上に刺突文を施す（457）である。

SC87　遺物は磨研土器（458）である。

SC88　遺物は調整ナデの無文土器である。（459）

SC90　遺物はⅣ類土器（461）、口縁部に縦方向の短沈線文、下位に横方向の沈線文。

SC91　遺物は口縁部に棒状工具による3条の浅い沈線文を施す（467）、貝殻条痕文土器で底部は網代底の（468）等である。

SC92　遺物は口縁部に短沈線文と貝殻腹縁刺突文を施したⅡ類に相当すると思われる土器（466）である。

SC93　遺物は口唇部に棒状工具による押圧刻み、口縁部に沈線文を施す（460）、口縁部に棒状工具による横位の連続刺突文、全体的に横方向の貝殻条痕文を施す（463）、波頂部に刺突文、口縁部に沈線文と刺突文を施した（464）、口唇部に貝殻腹縁による刻み、口縁部に沈線文と半竹管文を施す（465）等である。

SC95　断面の形態から陥し穴状遺構の可能性もあるが、逆茂木等は検出されなかった。遺物は胴部片のみで横位の貝殻腹縁刺突文や沈線文を施している。（469）

SC99　遺物は胴部片のみでヘラ状工具による斜位の連続刺突文を施している。（470）

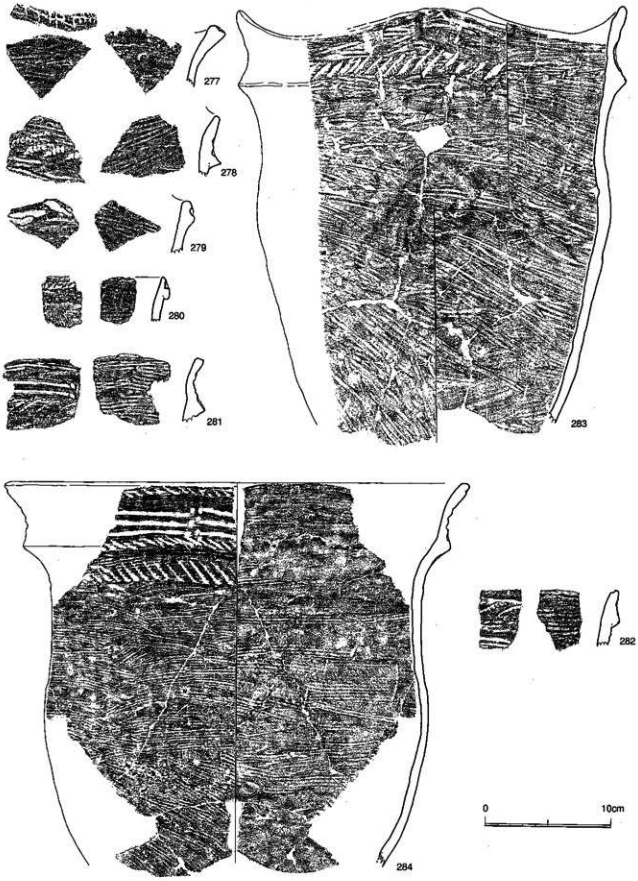
SC100　遺物は口縁部上位に貝殻腹縁によるロッキングが施されⅦ類に相当すると思われる。（471）

SC102　遺物は口縁部上位に貝殻腹縁刺突文が施され、Ⅶ類に相当すると思われる。（472）

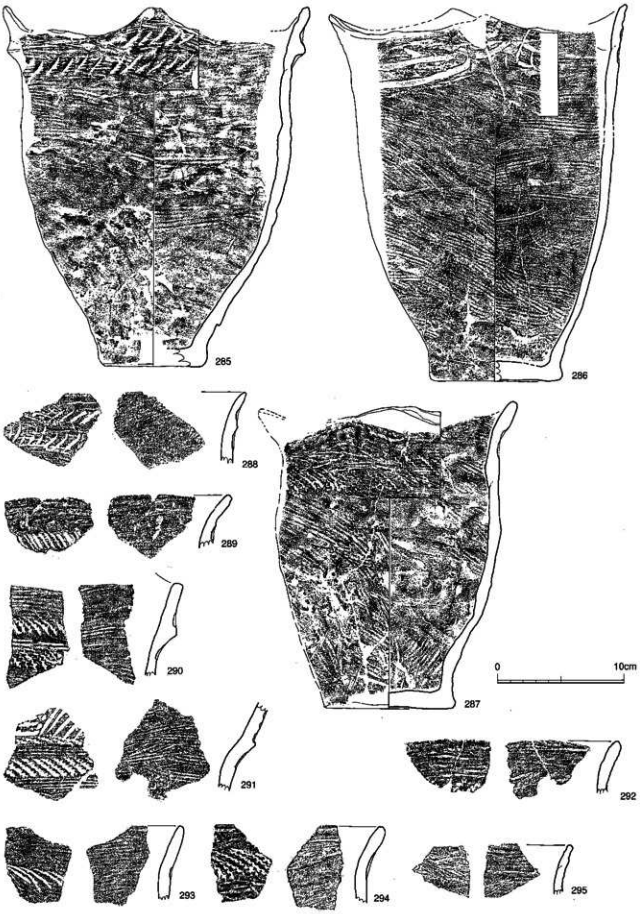
SC104　形態・規模から竪穴状遺構の可能性もある。遺物は台付皿形土器の脚部が出土している。（473）

SC105　遺物は口縁部に斜方向の貝殻条痕文が施されている。

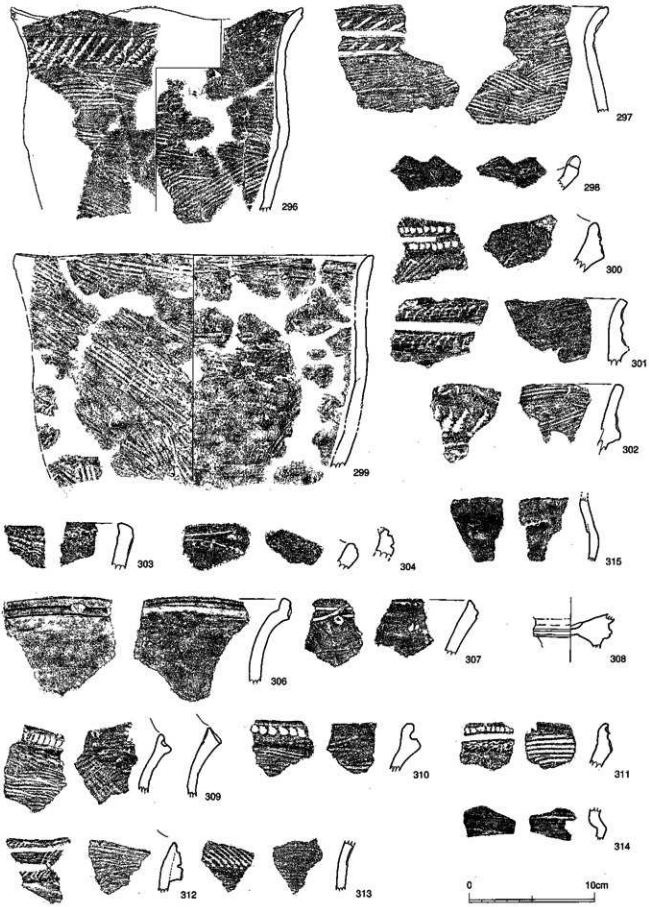
SC106　遺物は胴部片だけで、横方向の4条の押線文が施されている。（475）



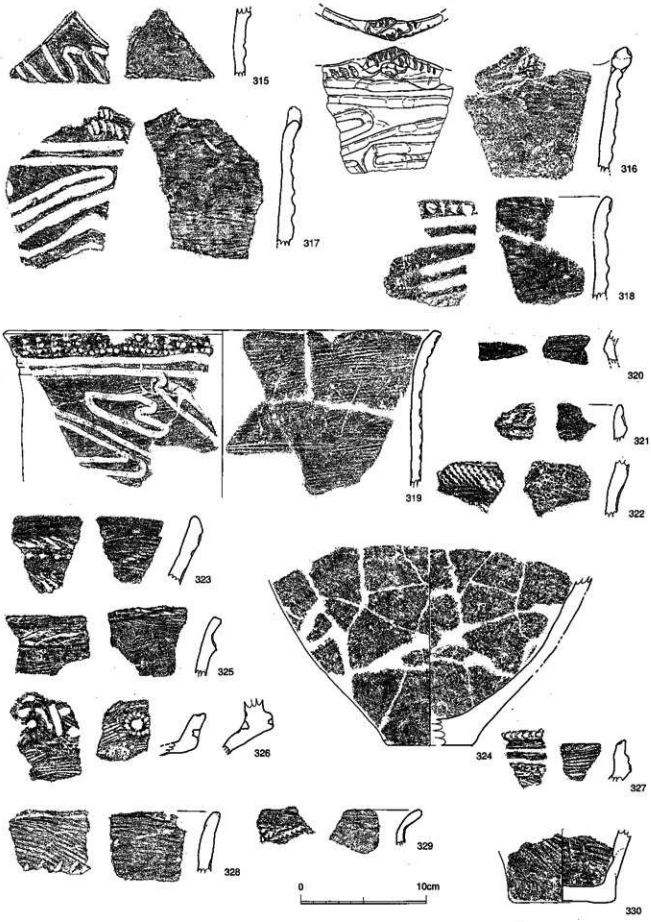
第81図　縄文土器実測図（18）



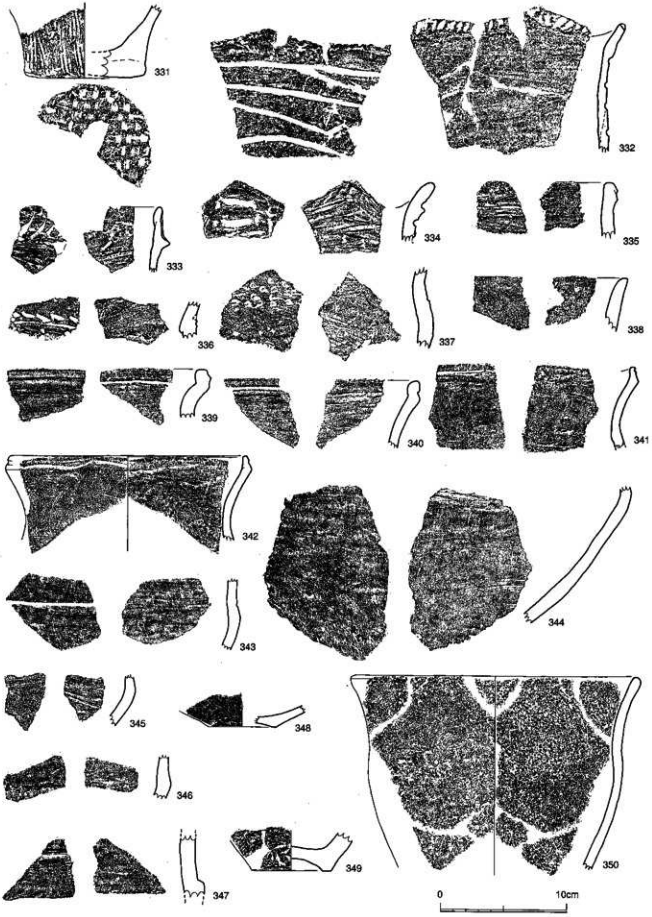
第82図　縄文土器実測図（19）



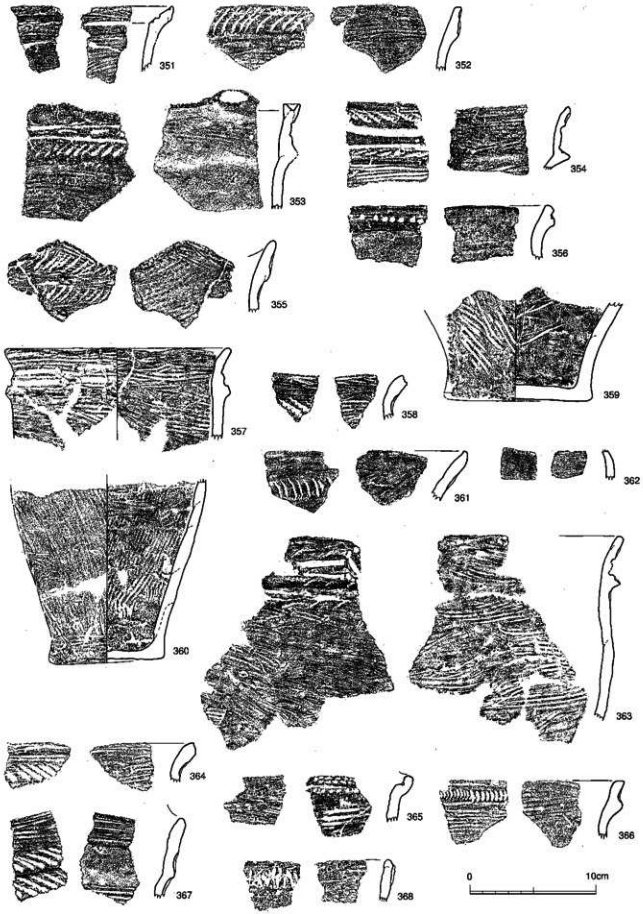
第83図　縄文土器実測図（20）



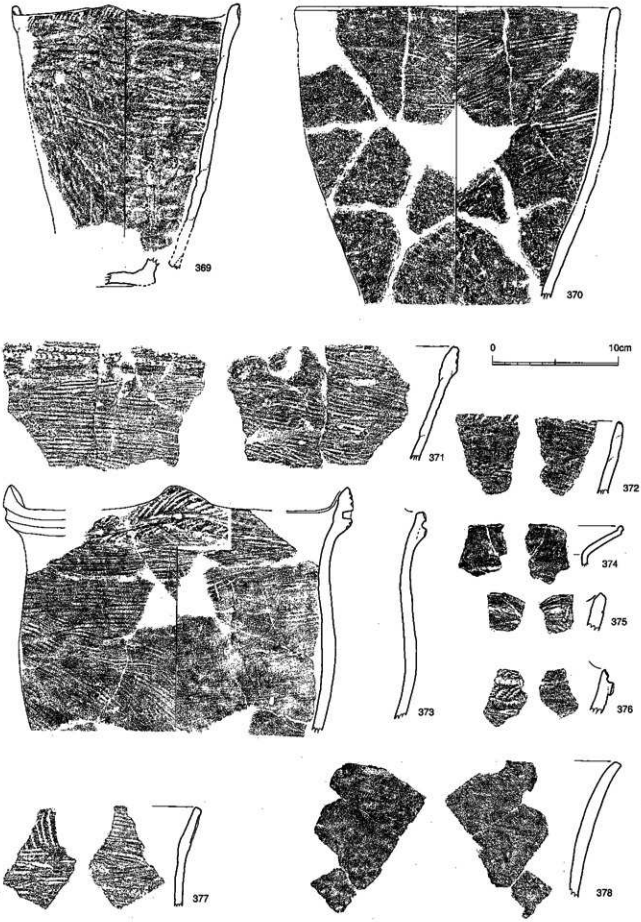
第84図　縄文土器実測図（21）



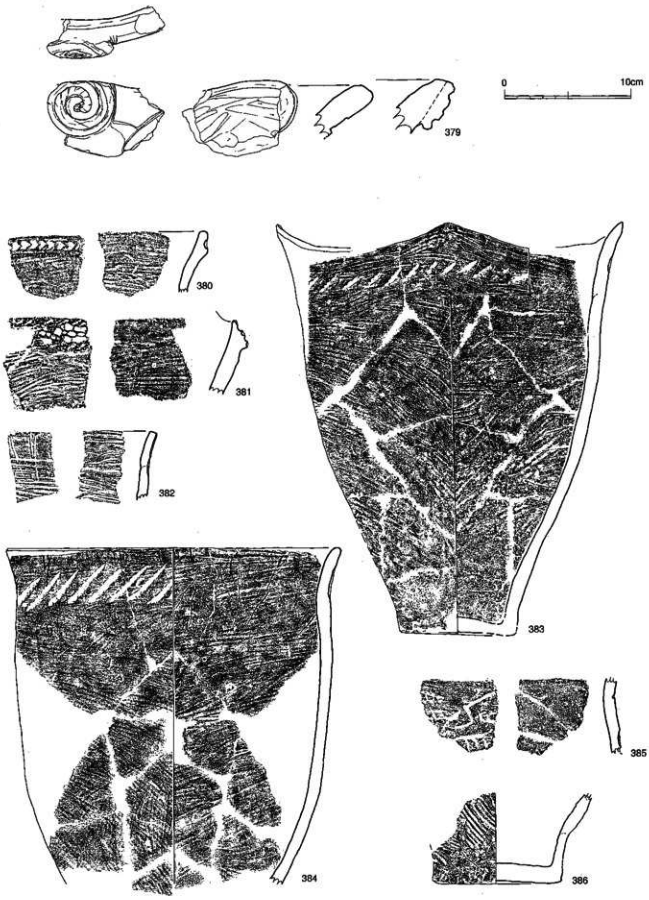
第85図　縄文土器実測図（22）



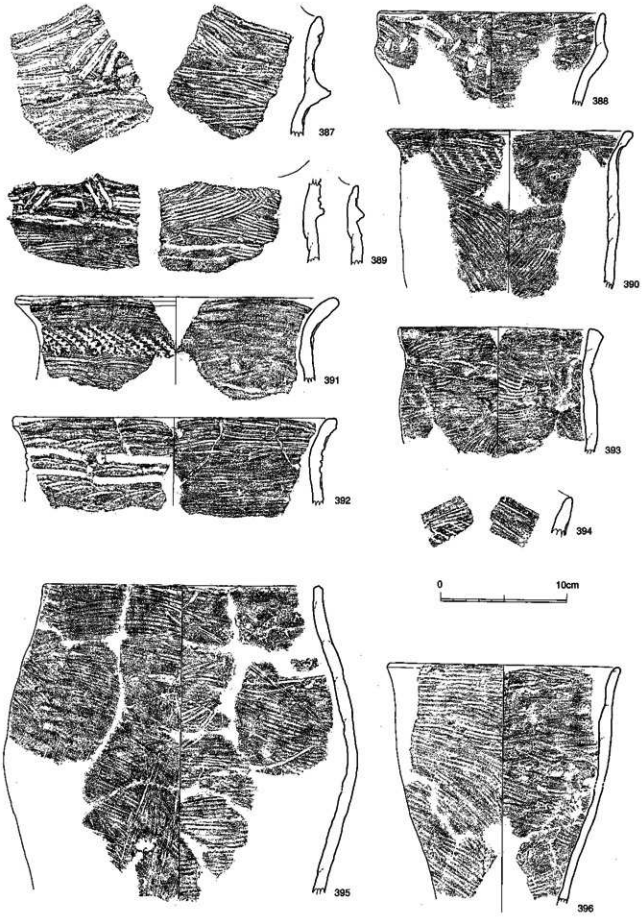
第86図　縄文土器実測図（23）



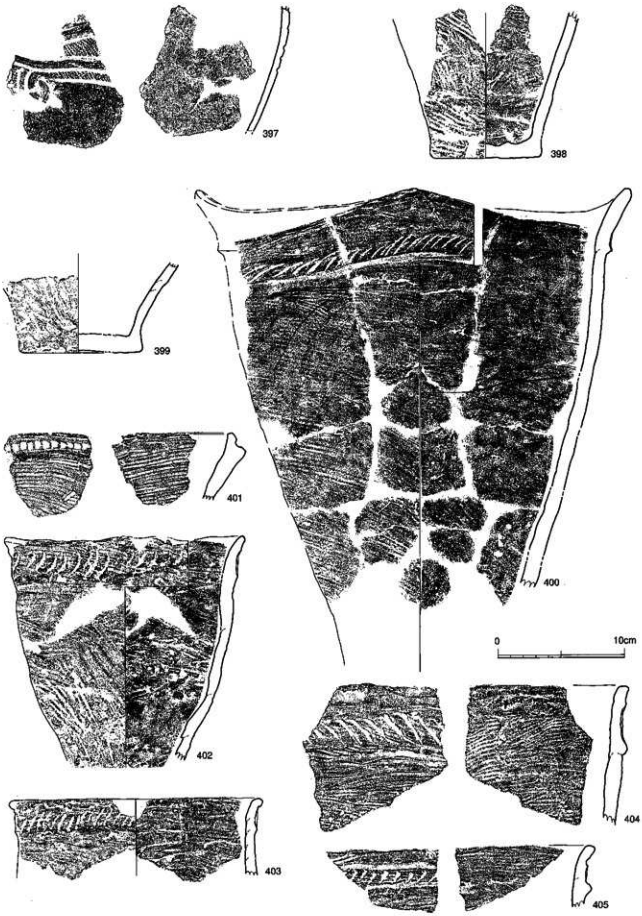
第87図　縄文土器実測図（24）



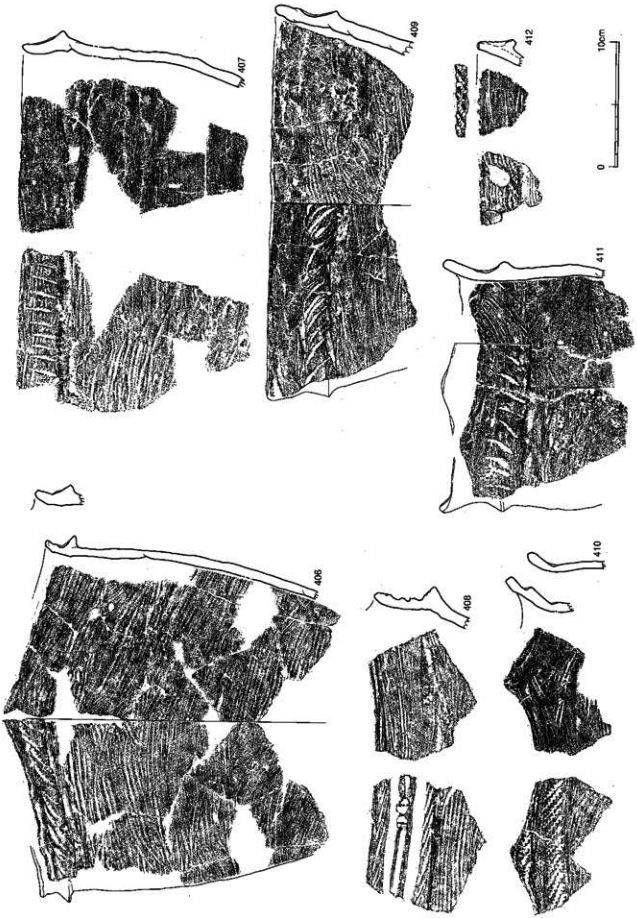
第88図　縄文土器実測図（25）



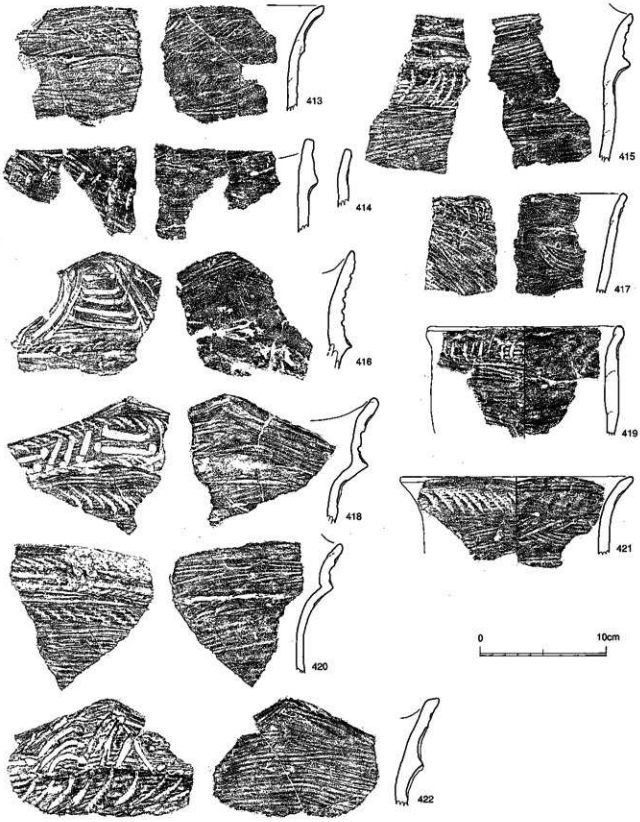
第89図　縄文土器実測図（26）



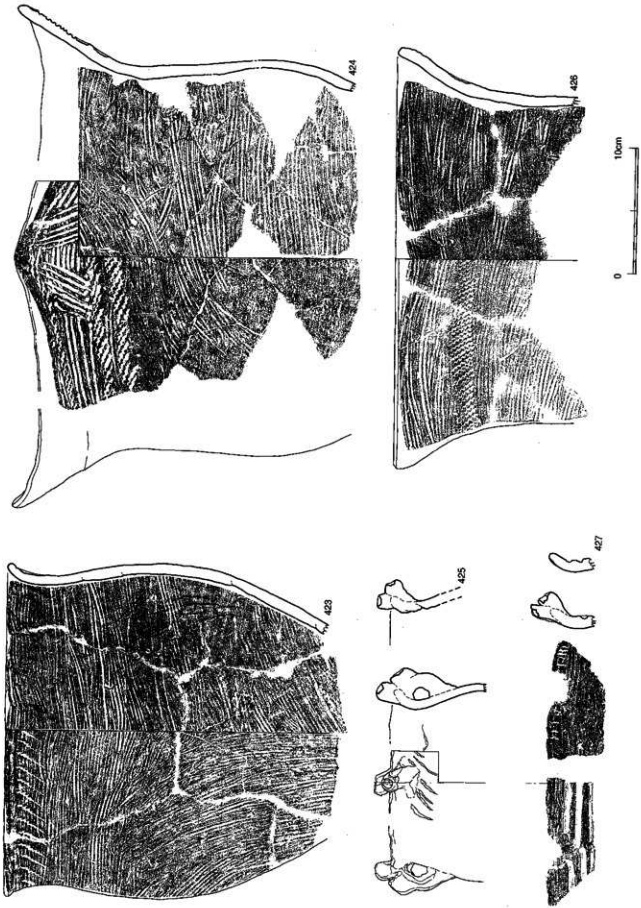
第90図　縄文土器実測図（27）



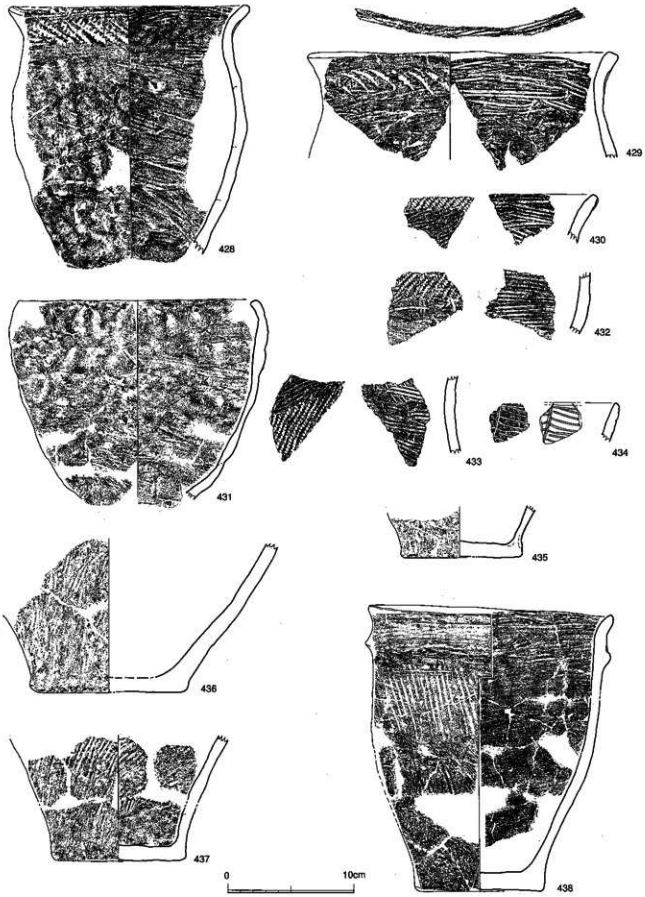
第91図　縄文土器実測図（28）



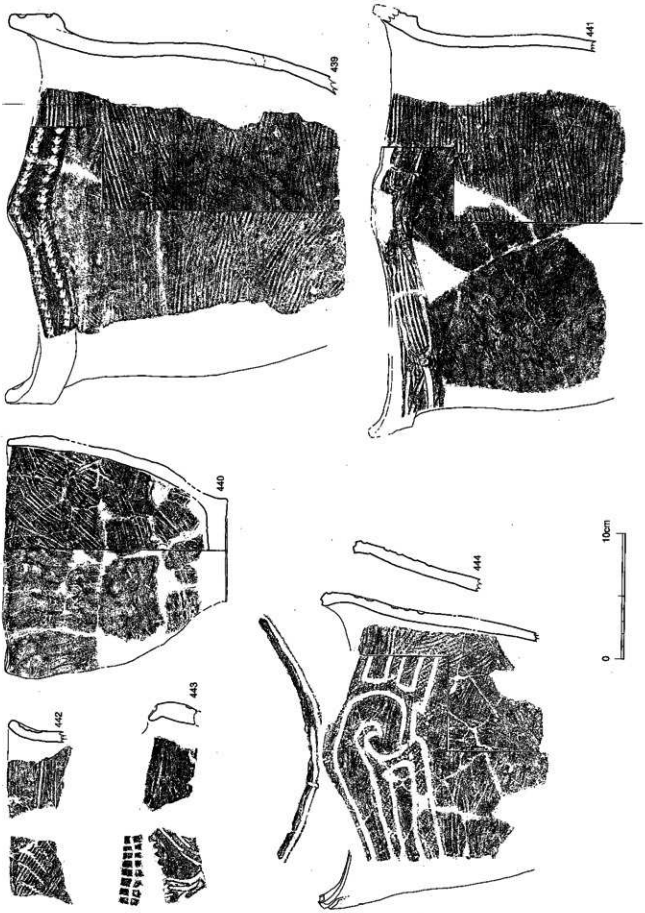
第92図　縄文土器実測図（29）



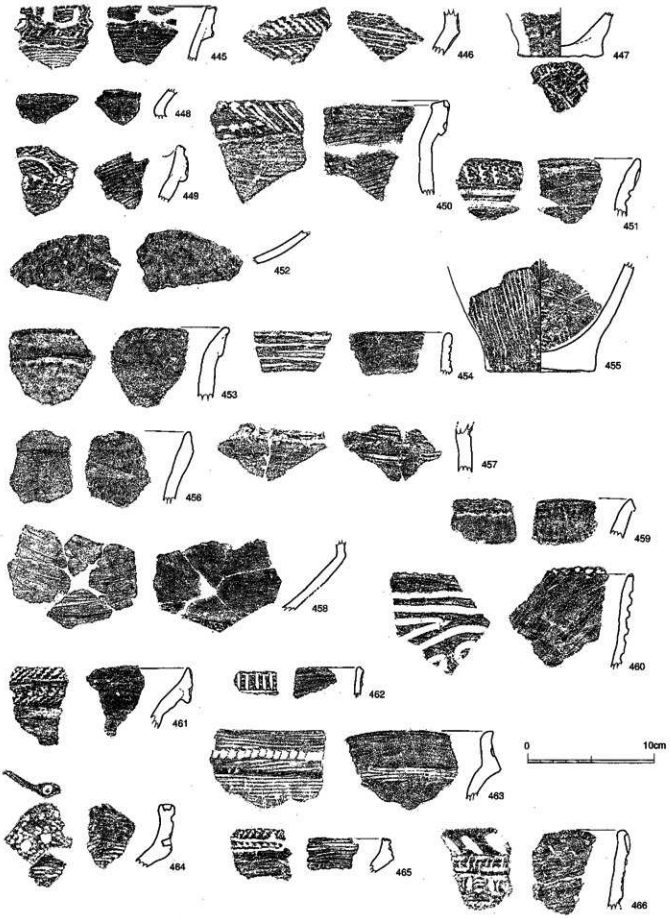
第93図　縄文土器実測図（30）



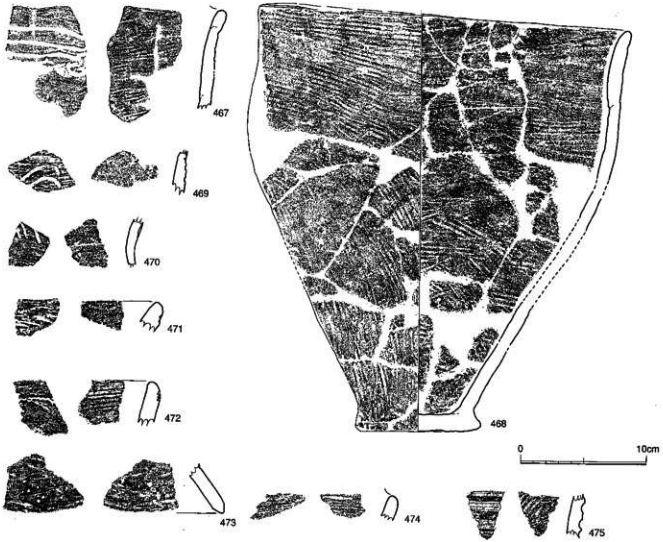
第94図　縄文土器実測図（31）



第95図　縄文土器実測図（32）



第96図　縄文土器実測図（33）



第97図　縄文土器実測図（34）

竪穴状遺構

竹ノ内遺跡では、A－Ⅱ区で竪穴状遺構が７基ほど出土している。いずれも検出面が浅い。明確な主柱穴が見られなかったため竪穴状遺構として報告したい。

SZ１号（第98図）

不整形のプランを持ち、J－７で検出している。規模は、長径が４ｍ×3.5ｍで深さは15cm程度と浅くなっている。遺物は、口縁部下部が張り出す市来系の土器が出土している。(476～477)

SZ２号（第98図）

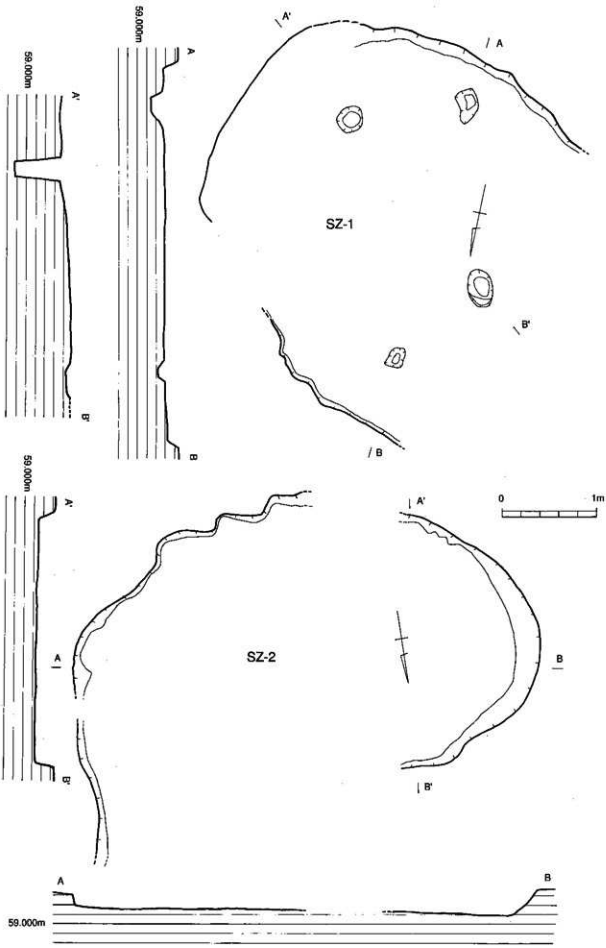
不整形のプランで、J－７で検出している。長さは長径4.9ｍ×3.3ｍで深さは35cmとやや深くなっている。遺物は口縁部下部が張り出す市来系の平口縁や波状口縁の土器・丸尾式系の土器もみられる。(478～484)

SZ３号（第99図）

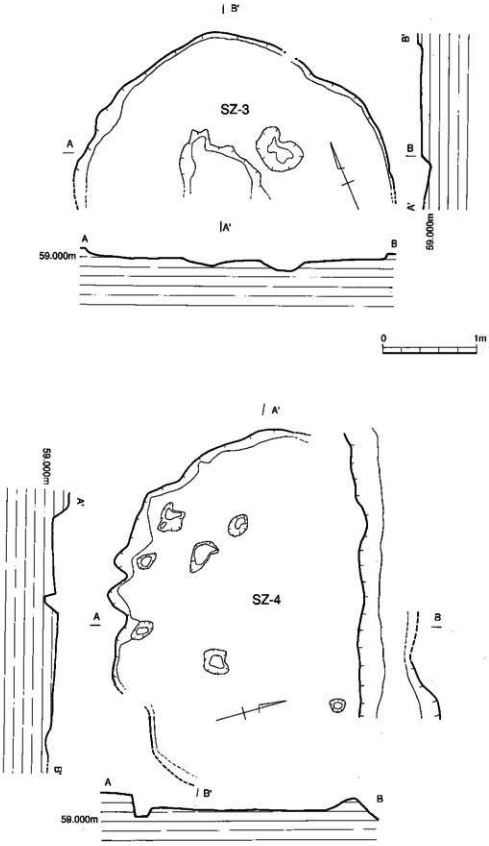
同じく不整形のプランでJ－７・８で検出している。長さが3.35ｍ×2.25ｍで深さは６cm程度である。遺物は、貝殻腹縁による斜位の連続沈線文を持つ市来系の土器である。(485)

SZ４号（第99図）

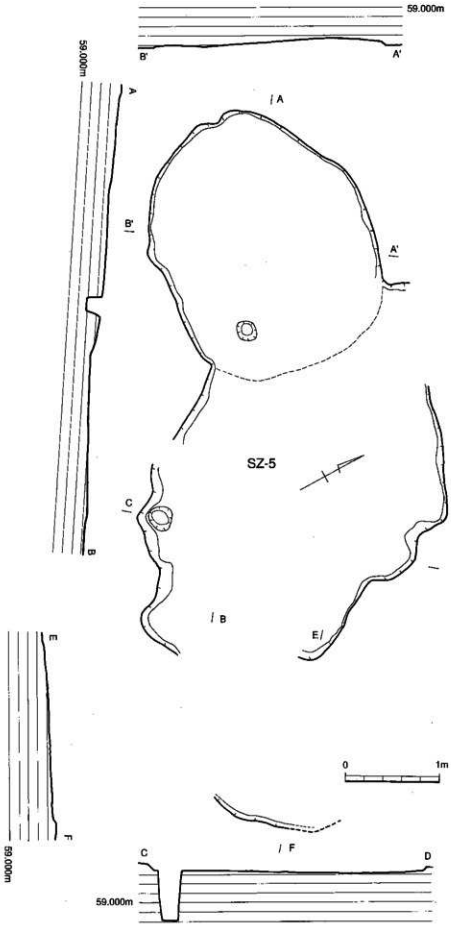
同じく不整形のプランでJ－７・J－７で検出している。規模は、長径3.8ｍ×2.5ｍで深さは



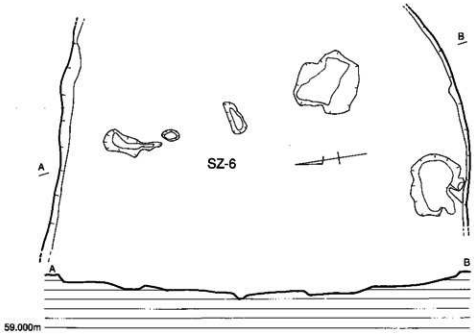
第98図　竪穴状遺構実測図（1）

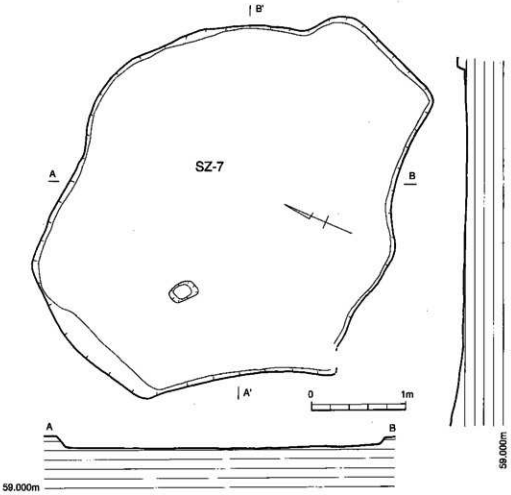


第99図　竪穴状遺構実測図（2）

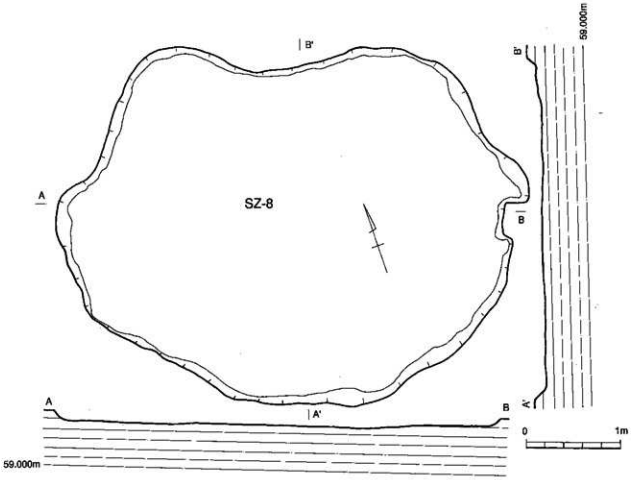


第100図　竪穴状遺構実測図（3）





第101図　竪穴状遺構実測図（4）



第102図　竪穴状遺構実測図（5）

第７表　竹ノ内遺跡竪穴状遺構観察表

遺構番号	プラン	出土位置	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	備考
SZ−1	不整形	J−7	4	3.5	15	
SZ−2	不整形	J−7	4.9	3.3	35	
SZ−3	不整形	J−7・8	3.35	2.25	6	
SZ−4	不整形	J−7・I−7	3.8	2.5	20	
SZ−5	不整形	J−6	3.8	2.9	10	
SZ−6	不整形	J−9	4.35	2.7	10	
SZ−7	不整形	G−11	4.6	3.55	15	
SZ−8	不整形	G−11・H−11	5	3.6	10	

SZ５号（第100図）

不定形のプランでJ−６で検出されている。遺物は指宿系の口縁や無紋の口縁などがみられた。

SZ６号（第101図）

不定形のプランでJ−9で検出されている。規模は、4.35m×2.7mで深さは10cmである。

SZ７号（第101図）

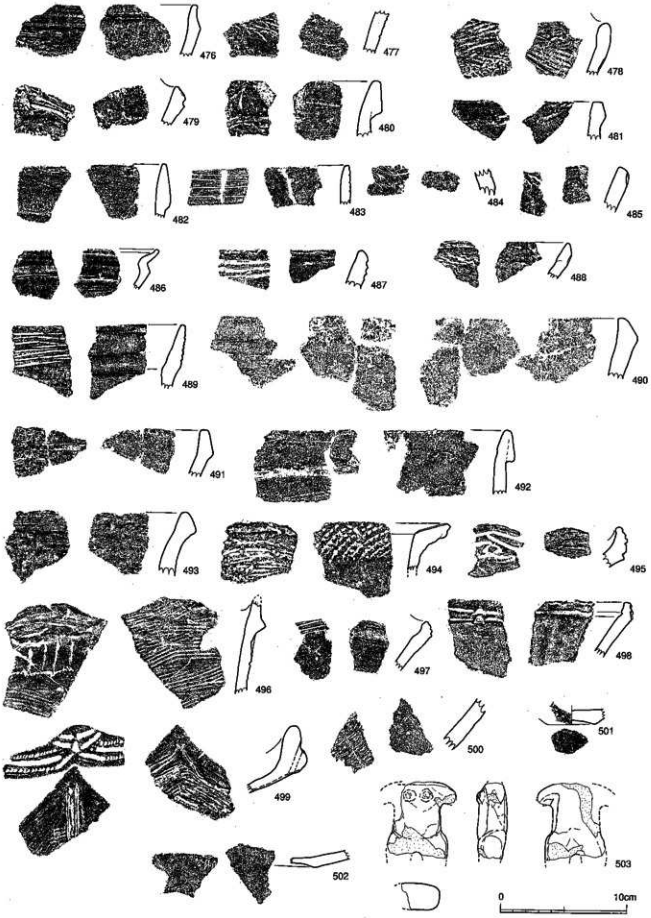
不整形のプランでG−11で検出されている。規模は、4.6m×3.55mで深さは15cm程度である。

SZ８号（第102図）

不整形のプランでG−11・H−11で検出されている。

(4)その他の遺物（494〜503）

中世と思われる2号溝状遺構に縄文土器が流れ込んでいた。市来系の土器・内面施文の土器・土偶などの遺物も出土している。



第103図　縄文土器実測図（35）

2　遺物

(1)　土器

1　出土状況

縄文後期土器は、貝殻文系の在地系土器を●で示し、磨消縄文土器・黒色磨研土器を○で示した。A地区ではA－1区のG14～16の土器密集区に集中している。A－2区はG4～8・F4～8・J6～7の土器密集区に集中している。磨研土器が多く出土している。A－3区はD1～2・E1・G1～2・F4グリッドから出土しているが遺物の量は少ない。B地区では、B－1区はF4～6、G4～6、H4～6、I4～6、J4～6の遺構密集区から大量に出土している。出土層は基本土層のⅡ層にあたり、貝殻文系の土器が大量に出土した。磨研土器も多く出土しているが、貝殻文系土器との層位差は確認できなかった。B－3区は遺物は確認できず、B－4区も1点を数えるのみであった。

2　分類（第106図～第150図）

縄文土器の分類はA区とB区の第Ⅱ層（黒褐色層・遺物包含層）出土土器をもとに行い、最初に在地系土器の分類をし、その後に磨消縄文土器～黒色磨研土器の分類をした。それぞれ深鉢形土器・浅鉢形土器の口縁部形態や文様、その他の諸特徴をもとに分類し、胴部・底部で明らかに同類に含まれるものは分類に含めた。その他は胴部・台付Ⅲ形土器・底部とまとめた。順を追って説明していきたい。

Ⅰ類（第106図）　凹線文を施すもの（504～509）施文の特徴で2類に分類した。

a．浅くてふとい凹線文を施すもの（504）。筋のあるヘラ状工具を使用している。

b．口縁部外面上端に貝殻腹縁刺突文を1条巡らし、その下位に凹線文を施すもの（505～509）。器形は直口またはやや外反する深鉢形土器で、器面調整には貝殻条痕文が多く見られる。

Ⅱ類（第107図）　口縁部から胴部にかけて沈線文または平行沈線文を主文様として施文するタイプ（510～539）。口縁部はやや外反するものが殆どで、強く外反するものは少ない。文様によって次の2類に区分した。

a．2本の沈線文間に連続刺突文を施すもの（510～519）で、磨消縄文土器の影響を受けていると思われる。平口縁と波状口縁がある。貝殻腹縁刺突文が多いが、（511・512・518）はヘラ状工具若しくは棒状工具による刺突である。519は貝殻擬似縄文である。

b．沈線文を主文様とし、刺突文と組み合わせるものもあるタイプ（520～539）で、平口縁と波状口縁が見られる。波状口縁の土器は波頂部に刻みを持つものが多く、537は口唇部に刻みを持つ。

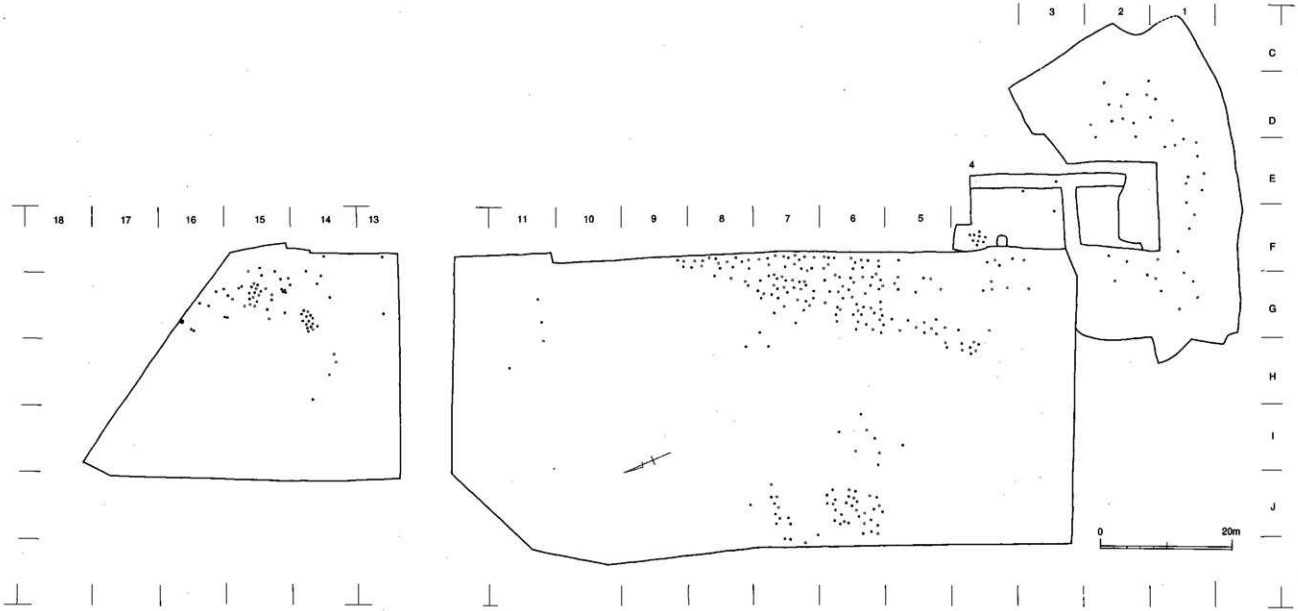
Ⅲ類（第109図）　口縁部の内面上部あるいは口唇部に施文される土器のタイプ（540～551）。平口縁と波状口縁が見られる。541は口縁部を肥厚させ、そこを文様帯とし、沈線文と刺突文を施しているのはⅡ類bの範疇に入るのかもしれない。

Ⅳ類（第110図）　口縁部を肥厚させ、断面が三角形または逆「く」字形に成形されるタイプ（552～632）。文様には、貝殻腹縁刺突文や竹管状工具による「D」字形の連続刺突文や単独の刺突文、沈線文や凹線文などが見られ、口縁部文様帯やあるいはその下部の胴上部にまで施文されたものがある。文様は、単一文の繰り返しや単純な組み合わせのものが多い。波状口縁と平口縁がある。口縁部文様帯の幅や施文の特徴、口縁部断面の形態などによって２類に分類した。

a．口唇部をわずかに拡張させたような、口縁部文様帯幅がせまく、文様も「D」字形連続刺突文など単純なものが多い（552～602）。平口縁と波状口縁がある。552～571は貝殻腹縁や棒状工具による刺突文を口縁部の肥厚帯に１条か２条廻らすタイプである。571は補修孔あり。572～581は口唇部に刻みがあり、口縁部に貝殻腹縁や棒状工具による刺突文を廻らすタイプである。口唇部の刻みは貝殻腹縁が多いが、576～577は棒状工具による刻みである。582～596は肥厚口縁部に沈線文と刺突文が施されているタイプで、582は波状口縁で波頂部に竹管状工具による縦位の連続刺突文を施している。583・585・588は口唇部に貝殻腹縁刺突文を施している。586は波状口縁で波頂部に縦位の沈線文を施している。594は口唇部に工具による連続刺突文を施し、596は内面に3列の連続刺突文を施している。597～602は口縁部文様帯の下にも文様を施すもので、597・598は内面上端に連続刺突文を施している。また、600～602は肥厚帯がしだいに丸みを帯び口縁部からくびれて外傾または外反するⅤ類土器への移行期の土器かもしれない。

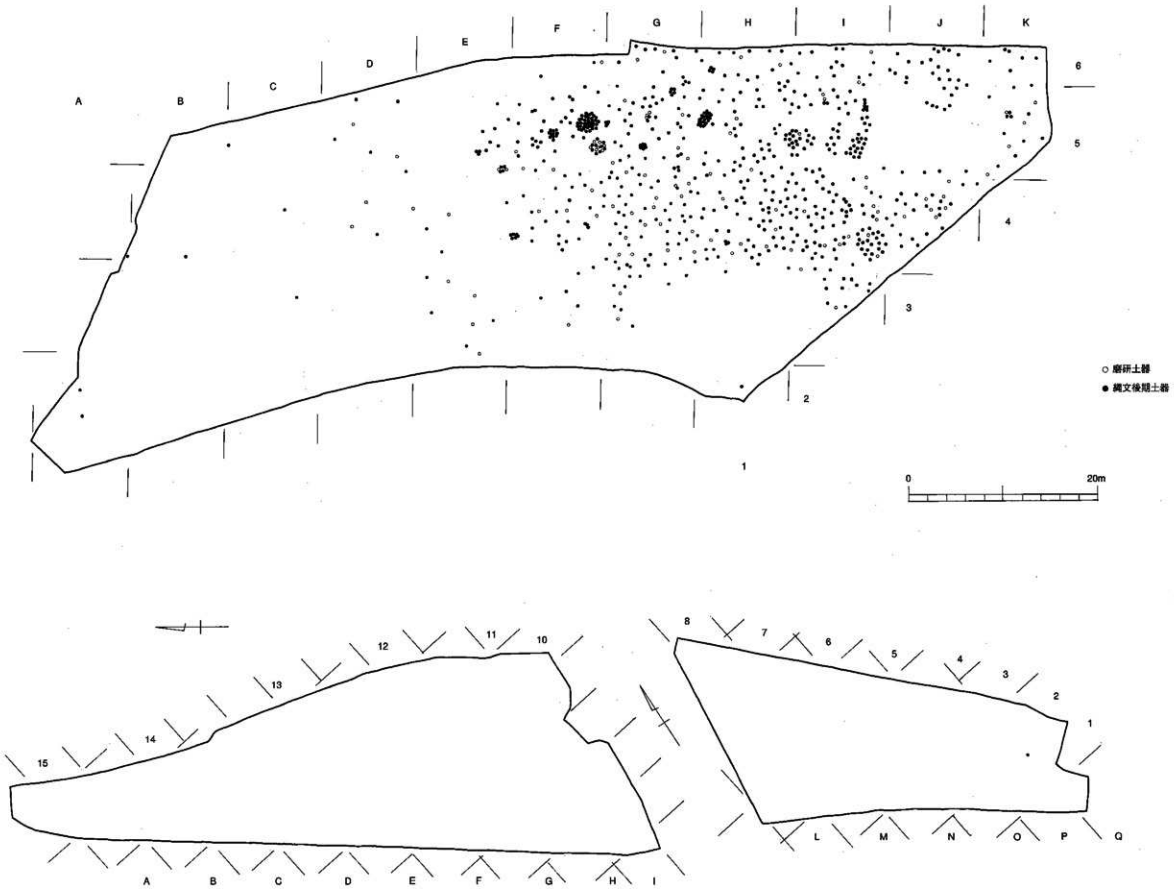
b．口縁部文様帯幅が広いタイプで、肥厚部分は明瞭で、口縁部断面が逆「く」字形に著しく張り出すタイプも多い（603～632）。620・621・625・626・631は口縁部文様帯下部の肥厚部分は明瞭で著しく張り出す。また、その内面が屈曲し、口縁部断面が顕著な逆「く」字形を呈する。文様の特徴として端部を刺突で止めた凹線文（太めの沈線文）と貝殻腹縁刺突文を組み合わせ、620・624・626・631等のように、横方向の短凹線文の左右に斜方向の短凹線文、さらにその左右に横方向の凹線文を施し、これらの上下には貝殻腹縁刺突文を施すというパターンが多く、特に波状口縁の波頂部に見られる。それに比べて605・610等の平口縁は文様が簡素なものが多い。また、618・620・621等のように口縁部文様帯とその下部の頸部と胴部のくびれ付近にも施文されるものもある。

Ⅴ類（第116図）器面調整や施文法などⅣ類との強い関連をうかがわせるが、Ⅳ類の特徴である口縁部文様帯の肥厚や逆「く」字形の屈曲などは全く見られないもので、外面のくびれ付近から口縁部が外傾または外反し、文様はこの付近に貝殻腹縁刺突文などが施されている（633～648）。調整はナデで633・634・636などのように指頭痕の残るものが多い。平口縁が多い。633は口縁部に粘土塊を貼り付け刺突文を施している。口縁部には貝殻腹縁刺突文を廻らし、その下位に棒状工具による沈線文と横方向の貝殻腹縁刺突文を施す。内面にも沈線文を施すというこの類では文様の複雑なタイプで、Ⅳ類土器の波状口縁の波頂部の変わりに貼り付け凸帯を設けたような感じもする。634は口径21.65cm、底径8.15cmを測り口縁部に貝殻腹縁刺突文が廻らされている。胴部に炭化物が付着している。635は口径22.6cmで口縁部に貝殻腹縁刺突文を廻らし、頸部のくびれから



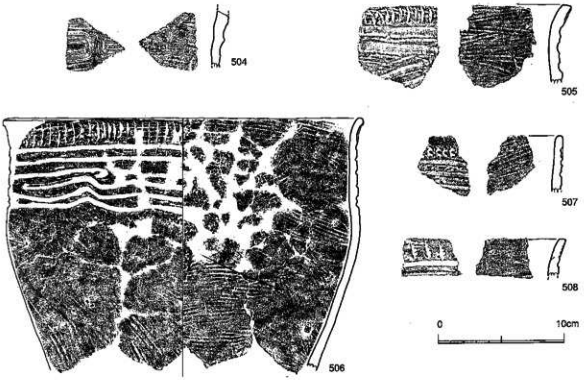
○ 磨研土器
● 縄文後期土器

第104図　縄文時代後期土器分布図（A区）

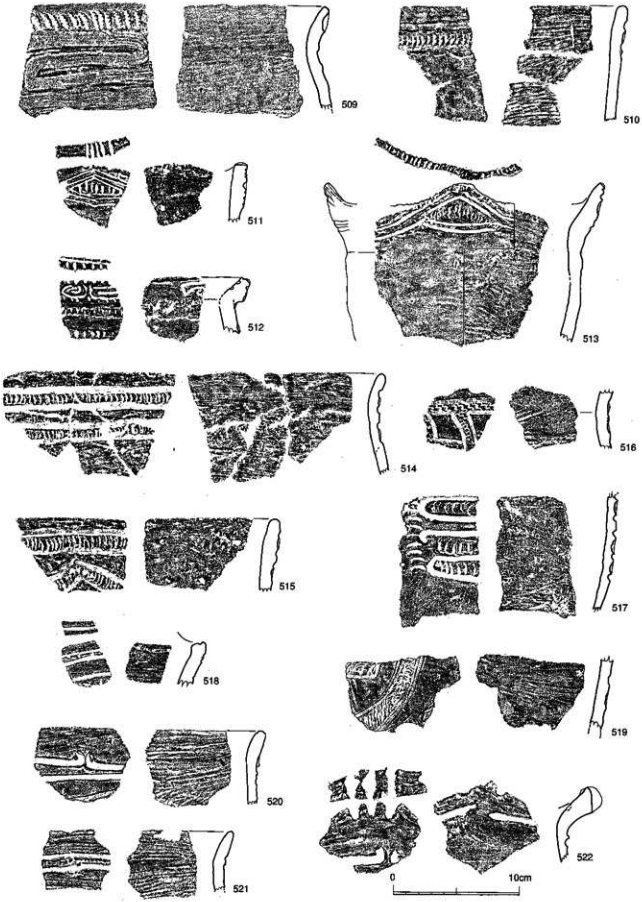


第105図　縄文時代後期土器分布図（B区）

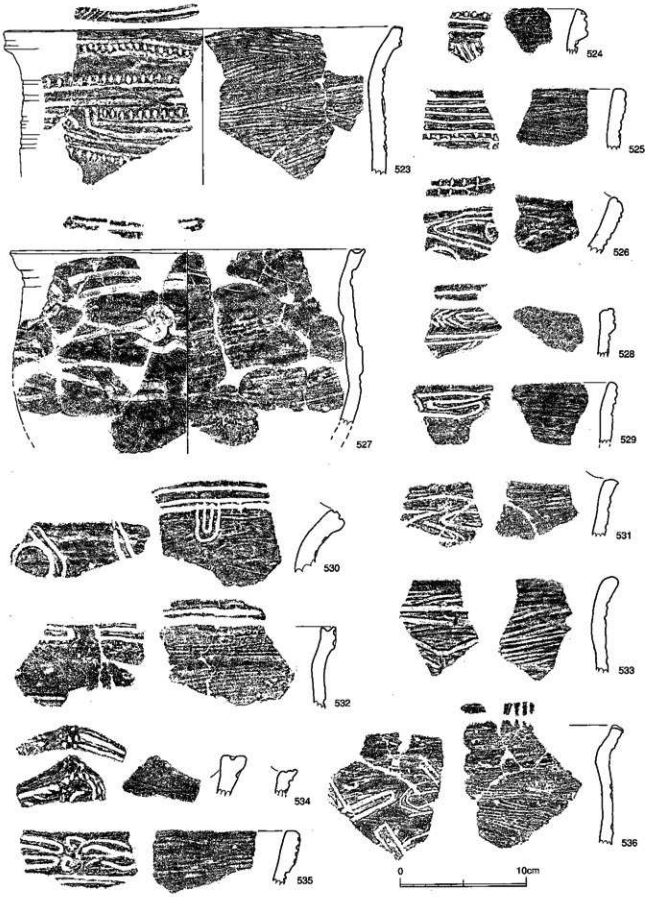
下位に棒状工具による端部を刺突した横走沈線文が施文されている。文様構成はⅣ類土器との関連をうかがわせる。636は口径24cmで口縁部に貝殻腹縁刺突文を廻らし、その下位に横位の貝殻腹縁刺突文を施文している。内面は指による調整の為かくぼみが多く見られる。638は口径14.4cmで、成形は悪く粘土のたるみや、口縁部のゆがみが見られる。639は口縁部に沈線文が見られる部分があり、あるいは部分的に波頂部の突起が付く可能性もある。640は口径11.3cmの小型の土器で口縁部に貝殻腹縁刺突文を廻らしその下位に２条の横方向の沈線文が施されている。641は口縁部が壺のように内傾して、そこに横方向の沈線文と横位の貝殻腹縁刺突文を施文している。643は口径18.7cmである。644は口縁部に横方向の貝殻条痕文を丁寧に施文して、くびれの上位に貝殻腹縁刺突文を廻らしている。



第106図　縄文土器実測図（36）



第107図　縄文土器実測図（37）



第108図　縄文土器実測図（38）